

大学英語教育学会  
創立30周年記念誌

J A C E T

1962 - 1992

Thirtieth Anniversary Overview

The Japan Association of College English Teachers  
1992

# 目 次

J A C E T 3 0 周年に当たって ..... 名誉会長 梶木 隆一 1

## 第一部 J A C E T の 3 0 年

その軌跡と展望 .....	会長	小池 生夫	2
J A C E T と私 .....	顧問	安藤 昭一	5
九州・沖縄支部の創立期を顧みて .....	顧問	林 哲郎	6
J A C E T と私 .....	顧問	片山 嘉雄	7
J A C E T は私の研究里程標 .....	顧問	直井 豊	8
英語教育への関心 .....	顧問	大浦 幸男	9
中部支部の明け方 .....	顧問	佐藤 一夫	10

## 第二部 J A C E T の諸活動

### 1. 委員会・研究会

(1) 全国大会運営委員会 .....	11
(2) 紀要編集委員会 .....	13
(3) 月例研究会 .....	21
(4) 夏期セミナー委員会 .....	25
(5) J A C E T 通信委員会 .....	27
(6) 大学英語学会賞選考委員会 .....	29
(7) 応用言語学研究会 .....	30
(8) 教育問題研究委員会 .....	32
(9) 教材研究委員会 .....	34
(10) テスト研究開発委員会 .....	35
(11) 大学英語教育実態調査委員会 .....	37
(12) 英語教育メディア研究開発委員会 .....	39
(13) 海外資料研究委員会 .....	40
(14) 文学研究会 .....	42
(15) 語法研究会 .....	44

2. 本部・事務局 .....	45	
3. 支部		
(1) 北海道支部 .....	49	
(2) 東北支部 .....	51	
(3) 中部支部 .....	54	
(4) 関西支部 .....	58	
(5) 中国・四国支部 .....	61	
(6) 九州・沖縄支部 .....	65	
第三部 J A C E T の将来への展望：座談会 .....		69
第四部 J A C E T 年譜 .....		79
J A C E T 1962-1992 .....		85
編集後記 .....		89

## J A C E T 30周年に当たって

名誉会長 梶木隆一

J A C E T が母体である語学教育研究所から離れて独立の組織として誕生してから早くも 30 年の歳月が経過した。30 年と言えば one generation で、新生児が今や親の年齢に達したわけである。設立に際して、生みの親と言うべき初代会長に高い見識と広い包容力をそなえた朱牟田夏雄氏を迎えて、学会の基盤を築くことができたのは幸いである。続いて英語教育界の最高のリーダーである小川芳男氏が長い間全力投球をしてくれたおかげで、今日まで着実に発展の一途をたどることができた。私は名ばかりの 3 代目として、若い学会がすくすくと成長する姿をただ見守ってさえいればよかったのである。その 2 人の前会長や当初から学会のために尽力を惜しまなかった星山・原沢の両氏はすでにこの世を去り、残る天野・芹沢の両氏や私自身も傘寿を越えたので、まさに世代交替の時期になったと言える。芝居にたとえれば、J A C E T 劇の第 1 幕のカーテンは降りたので、観客一同は続いて登場する人たちの活躍ぶりを心から待望しているはずである。

創立当時を振り返ってみれば、大学の英語教育に真剣に取り組んでいる教職員の数はあまり多くなかつた。英文学や英語学の研究は盛んで、何か専門の業績を発表すれば、若い人たちにも昇進の道が広く開かれていたが、英語教育はそれより一段低い次元のものと見なされていた。教職過程に必要な英語科教育法の時間が設けられていても、専門家を得ることが困難なので、文学や語学を専攻する人たちが言わば片手間に担当する例が少なくなかったようである。また戦前に比べれば、大学生の英語学力のレベルは概して低く、入試を受ける時がピークであるとさえ言っていた。授業の形態も文学作品や評論などを教材にした訳読が主で、一般に訳毒 translation poisoning から抜け切れないでいた。しかし、国際交流や科学技術の急速な進展と社会の要請が強い引き金になって、実際的な学力と技能を求める声が一段と高くなったのは当然である。それに呼応して大学側でも英語教育の内容と方法を改善する動きが活発になり、その結果 J A C E T 創立当時は会員が 100 名そこそくであったのに、今日では広く全国にわたってその 20 倍にも達したわけである。

大学の設置基準は長い間固定して、現在では時代遅れで形骸化した感が深い。表面上それに合致していさえすれば、内容は不間にされる場合が多く、中には羊頭狗肉に近い授業も平然とまかり通っていたようである。今回ようやく設置基準が改正され、それに伴って従来の curriculum も大幅に再編成されることになった。大学の自主性を尊重して、時勢に適応した教育の刷新を計ることは結構であるが、それだけ大学側の責任が重くなつたと言わなければならない。国家社会が求めるものと学生が好むものを秤にかけて、創意と工夫に満ちた教育を実践する必要がある。J A C E T としても、原点に帰って what to teach と how to teach の両面を深く考慮に入れて、学生の能力と適性に応じて最も適切な英語教育を推進するために研究と実践を積み重ねることが期待されている。

これまでに年次大会、夏期セミナー、支部大会、各種の研究講演会、教材開発、紀要その他の刊行、政府委員会への提言などによってかなりの成果を収めてきたが、残された課題はいくつもある。何よりもまず理論倒れにならないで、満足な効果をあげる実践的な方策を講じる必要がある。教えるべきことは山ほどあるが、口先だけの会話ではなく、眞の意味の communication ができる人材を養成することが望ましい。J A C E T の名に当てはめて言うならば、Judicious Approach to Communicative English Teaching とでもなるだろう。海外の進んだ研究を取り入れることはもとより必要だが、対象が日本人である点を忘れてはなるまい。中高大の連絡強化や海外とくにアジア諸国との交流も今後重要な課題になるだろう。とにかく J A C E T の活動が今後ますます盛んになることを切望している。

# 第一部 J A C E T の 30 周年

## その軌跡と展望

会長 小池生夫

本学会は本 1992 年 11 月 9 日に創立 30 周年を迎える。昨年は 8 月 23 日から 25 日まで第 30 回記念大会を北海道大学において開催し、会員諸氏とともに学会の隆盛を祝ったことは、まさに慶賀するべきことであった。創立当時、会員僅か 150 名であったのが、いまや約 2,200 名を擁し、わが国の英語、英文学、英語学、英語教育の学会、研究団体のなかでも質量ともに有数の存在となり、国際学会としても広く世界に知られるようになってきた。人の年齢でいえば、まさに働きざかりの年齢になってきたといえよう。今後本学会は英語教育の発展のためにますます重要な役割を果たすようになっていくであろう。また、そうあるべく努力を続けたいものである。今日まで、本学会のために御貢献をいただいた諸先輩、目下努力を傾けておられる諸氏に、心から感謝の意を表するものである。

さて、この 30 周年を機会に J A C E T の発展の跡を辿ってみると、いかにして我々一人、一人がそこに存在価値を見出し、お互に協力しあい、励まし合い、一歩、一歩積み上げてきたかがわかる。それは「地の塩」の運動であり、草の根活動であり、多くの人々への“service and sacrifice”の歴史であった。遠き将来を予測し、世界がどのように動き、日本がどのようにあるべきかを考え、外国語教育、英語教育、そして、大学の英語教育をどのように改善していくかを論じ合い、そしてその結果を我々は着実に実行して歩いてきた。

我々には、時の利があり、広く社会の支持、激励をいただいた。学生を前面にして、彼らを教育することが、次代の基盤を固める責任を果すこと

になる、このような信念をもって今日まで活躍してきた。我々に付託されてきた研究と教育の義務を学会活動を通して果たしてきた。底辯をささえる地道な活動である。こうして、長く活動してきた人々はこのような活動が決して間違ってはいなかったと信じているであろう。数多くの大学関係の外国語学会において、研究と教育実践の両面にわたって、30 年の長きにわたり、これだけ活発に活躍している学会はおそらく J A C E T のみであろう。

さて、本学会が財団法人語学教育研究所の大学部会から発展的に独立し、第 1 回創立大会を東京外国语大学で開いたのが 1962 年 11 月 9 日であった。その時わが国ではじめて英語教育界に「学会」が誕生したのである。その前史にエピソードとして残っているのはその数年前から同研究所の代表者であった市川三喜先生が積極的に学会設立を提起され、比屋根主事がそれを補佐したという話である。

それ以来、年次大会は毎年に秋に実施されてきた。初期のころは 1 日で十分な内容であったが、次第に充実し、会期が延長されるようになった。第 10 回大会では日本女子大学で 1 日だけ開催されたが、第 17 回大会（竜谷大）からは、2 日になり、さらに第 20 回大会（早稲田大）では 3 日になって、今日に及んでいる。講演、研究発表、パネル、展示その他発表がおおくなる一方である。参加者も増え続け、25 回大会（慶應大）から約 800 名が参加するようになった。昨年の大会には市民講演会も含まれ、盛況であった。一般的に見て、質もあがってきているという印象が強い。

研究発表は英語教育に関するほとんどすべての項目を含んでいるが、応用言語学の分野に入るものが多い。言語学、言語習得、社会言語学、言語教授法、語法研究、教授実践、教材研究、言語テスト、外国語教育政策や計画、カリキュラムが多く、文学やコンピューター言語学、辞書研究等は少ない。授業実践の開拓は本学会研究大会の特徴とするべきものである。はやくから「私の授業」として VTR による発表が人気を呼んできたが、もっと活発になるように期待したい。4 技能の授業方法やその効果測定、テスト法も開発が必要である。日本人学生に英語やその他の外国語を教えるための適切な基礎研究のレベルがあるのが期待される。この他に特色とされるものは、外国語教育政策に関するシンポジウムがこの数年活発になってきたことである。昭和 59 年 9 月にはじまる臨時教育審議会、さらに教育課程審議会、教育職員養成審議会、大学審議会による大学設置基準改正の一連の教育改革は、戦後のわが国の教育の全面見通しをはかる大規模なものであった。この中で外国語教育に関する改革も次々と打ち出されてきたのである。本学会はこの政府の外国語の教育改革に積極的に提案をしてきた。学会本部による関連シンポジウムの開催はそれに関連したものである。特に大学サバイバルの問題とからみ、大学の外国語教育をどうするのかについては、大いに論議するべきものである。大会は普段の我々の研究や実践の集大成の場である。したがって、その準備も 1 年がかり、特に支部が担当するときには、本部と支部の協力のもとに 2 年がかりとなるときもある。学会全体でつくりあげていく大がかりなもので、関係者の労を多としたい。それだけに年々発展していく大会の様子をみるのは、うれしい。

支部の発足は、本学会の発展に役だった。1972 年 6 月に発足した関西支部は本年で創立 20 周年支部大会を迎える。JACET 有数の支部で、活発に活動を展開してきた。もともと人材が多く、最近は研究グループも多く、組織化され、成果も期待されている。1981 年 9 月に発足した東北支部は、昨年 9 月に創立 10 周年記念大会を開催した。東北 6 県にまたがる範囲をカバーするのは容易でないが、小数精銳でしっかりと経営

してきている。支部大会、支部ニュース・レター発行、各県を回っての研究会等着実である。1983 年 4 月に発足した中部支部も大きな支部で、支部大会を L.L 学会と共同で開催するほか、外国人講師を招いて研究会を随時開催している。1984 年に発足した九州・沖縄支部も発足以来、支部大会、研究会、ニュース・レターの発行など活発な活動を展開してきている。1968 年には、北海道支部がついに発足した。地理的に広範囲な地域をよくカバーして、協力して支部大会、ニュースレターの発行などを継続、地域社会に貢献している。各支部ともにすでに全国大会を開催した経験を持っていることは、各地域の活動を広げることに結び付いているといえよう。本部は学会全体にたいしての活動とともに、関東甲信越地域の会員にたいする各種の研究会、情報の提供などを行っており、文字通り最も古く、もっとも層が厚く、活発な活動を続け、本学会の中枢となっていく。学会全体の連絡調整、経営、紀要、通信、国際交流、各種研究会等 20 部門を持ち、研究成果の発表が研究報告、教材、テスト等出版物、講習会、英語教育改革のための政府への提案として結実している。

また大学教員の研修を行うため 1967 年 7 月 17 日から 8 月 4 日まで開催したのが第 1 回 JACET Summer Seminar であった。それ以来我々は多くの著名外国人講師を招き、延 1,000 名に近い参加者を集めた。その中から今日の全国にわたる JACET 活動の中核が育ったのは周知の通りである。本年も第 25 回 Seminar をふたたび Cambridge University の Downing Collegeにおいて開催、超一流の講師との discussion はすばらしいものがあった。このセミナーこそ我々の活動の原動力になってきたといえよう。

研究会活動はどう発展してきたであろうか。学会でもっともはやくからはじめた活動は、大会開催と共にはじめた学会活動の報告であった。大学英語教育学会会報の発行は 1962 年に学会が始まってから 69 年まで続いた。1963 年の会報によると、大学基準協会会報での外国語教育の問題点が本学会会員の意見とよく似ているとして次の意見を載せている。それによると、外国語の種

類をふやす、4年間一貫した英語の授業が必要、2時間授業をやめ1時間にする、1クラス30人以内、またはさらに小グループにして、補助指導員をおく、語学ラボラトリの施設と選任要員をおく、訳説に偏しないで、はやく大意を把握させる、教師間の連携と計画、研究業績、教授能力、教育業績で教師の採用、昇任をさせる、外国語教師の時間数、待遇の差別撤廃、海外派遣、内地留学制度の設置、入試に聽取能力の試験導入、外国語教育に関する全国的研究、連絡機関の設立などである。33年後の今日においてもこれらの問題は、十分に解決されてはいない。1970年からはじまった年1回の紀要は本年92年で23号をだすことになる。厳正な審査によって選ばれた論文はそのまま本学会のレベルをはかるものとして貴重な存在となっている。特にここ10年ほどは応募者が多く、それにともなって、質の向上もいちじるしい。JACE通信は会員間の情報源になっているが、年4回出て、86号を最近出した。年内1回は英文である。最近は大会特集号も出している。

JAAL-in-JACETは年一回のニュウズレターを英文で発行している。本年4月で6号になる。JACETがAILAに加入するにあたって必要上組織した研究会であるが、順調に発展して全国組織になっている。学会全体の応用言語研究の中心として、年4回の研究会を特定のテーマで開いている。

英語教育実態調査研究会は11年を費やし、5冊の研究成果報告書を出版した。わが国最大の英語教育に関する全国調査で、もたらした成果は計り知れない。たとえば、文部省の外国語教育の各種政策立案にすくなからぬ影響を及ぼした。さらに、大学改革の立案検討にずいぶん役にたった。この問題と関連して学会が取り組んできた活動は、大学の外国語教育改革の過程での目標、取得単位、位置付けなどの、基準を示すことであった。目下、数多くの大学が改革案の作成に取り組んでいるが、その折に参考にしてもらえばよい。本年夏前にはその基準ハンドブック第1集が出版された。改革全体の中で、一般教育と専門教育の区別がなくなり、外国語教育の必修やその単位数が制限されな

くなった。国際化を一層進めなければならない今日、外国語の習得はますます強化されなければならない。しかし、各大学の実情は必ずしもそうはならないのが厳しいところである。自己評価の問題も含めて、まさにこれから大学は搖れ続けるであろう。外国語、特に英語教育は最も重要であり、本学会にとっても直接関係する問題であるだけに真剣に取り組まなければならない。

創立時に決められた学会の規約が現状に合わなくなってきたため、久しく改正作業が理事会を中心に行進中であったが、1990年の年次大会において、ついに改正決定がなされた。前規約と比較して、かなり詳細なものになっている。この改正を本部、支部一体となって行ったことが、それ以降の一層の協力体制をもたらしていると認識している。

さて、本学会が扱うテーマは、大学入試、授業研究、評価研究、教授法研究、外国語教育政策、言語習得、4技能のメカニズム研究、バイリンガル教育研究、社会言語学、教育工学研究、文学教育などさまざまな分野に及ぶ。このために会員間の協力ができるようシステム作り、奨励、発表の場を提供するなどを行うべきと考える。私がJACE通信82号で会長就任の挨拶として述べた希望は5項目であった。それは、1.大学改革のために外国語教育、とくに英語教育の改善に積極的に貢献する。2.国際交流活動の拡大、強化をはかる。3.国内関連諸団体と協力する。4.英語教育研究の理論、実践の両面での促進を計る。5.学会内の協力を緊密にする、というものであった。これらの希望は、本学会が創立30周年を迎えて、一層発展するうえにぜひとも必要なものであると信じるが故である。たとえば、上記に示した研究活動への展望もこのなかにはいる重要な項目なのである。創立40周年を本学会が迎えるのは2003年である。まさに21世紀の始まりであり、世界はそれまでに急速な変貌を遂げているであろう。その速度は我々の予想をはるかに上まわるものかもしれない。それをできるだけ予想して、学会がなすべき事業を手堅く進めたい。会員諸氏のご協力を切にお願いしたい。

# JACETと私

顧問 安藤昭一

今回このようなテーマを与えられて、自分の過去を振り返ってみたら、今までの私の人生が殊の外深くJACETと結びついていたことを知り、われながら驚いている次第である。実際、JACETあっての私の半生であった。

さて、そういう私の立場から見ると、JACETはone decadeごとに脱皮して、そのつど新しいJACETとなって生生発展を続けている。独断かも知れないが、私にはそのように思えてならないのである。すなわち、それをコンピューターの発達史になぞらえて言えば、1960年代が第一世代のJACET、70年代が第二世代、80年代が第三世代、そして90年代の現在が第四世代のJACETということになる。以下に簡単に説明を加えてみよう。

まず取りあえずは1950年代から一戦後間もない頃、わが国がまだ連合国に占領下に置かれていた1951年の3月に私は京大の英文科を卒業し、引き続き1年間米国のStanford大学に留学した。そしてStanford大学の雰囲気が、旧態依然たる象牙の塔の京大とは比べものにならぬほど明るく開放的で、しかも教育内容が京大の優に10倍位は充実しているのに驚き、日本の大学は根本的な改革が必要なのだと痛感した。また、わが国では戦争中、英語を敵性語として排斥していたのに、米国ではASTPで日本語のすぐれた特訓をして大きな成果を上げていたことを知り、これでは日本が負けたのも当然だと思った。このような留学経験から当時の私は、わが国にJACETのような組織が必要だ、としきりに考えるようになっていたのであるが、時あたかも50年代はJACETにとって、語研大学部会よりJACET独立に向けての胎動の時期であったのだ。

60年代—1962年、ついにJACET誕生。私は喜び勇んで東京外国语大学での第1回大会に出

席した。その直後、本格的な英語教育研究がなくてMichigan大学へ2度目の留学に出かけ、帰国してしばらくしたらJACET夏期セミナーが始まった。すぐ申し込んだが、留学経験者は遠慮するようにと言われ、その後は年齢制限が厳しくて受け入れられず涙をのんだ。その頃、三高での私の恩師であり、京大での同僚であった大浦幸男先生を中心に、関西の有志であり詰り、JACET関西支部設立に向けて尽力した。

70年代—72年に大浦支部長、多田幹事の関西支部が発足。その後10年間、他に支部はなく、秋の大会も関東と関西で交互に開かれるといった2人3脚のJACETであった。その頃より私は小川芳男先生や梶木隆一先生、星山三郎先生、芹沢栄先生、天野一夫先生らに大変親しくしていただき、先輩がたの親しみやすいお人柄と深い学識に大きな感化を受けた。

80年代—81年に支部長交替があり、私が選出された。その後90年代に支部長職を退くまで、関西支部長として私が第一に心がけたのは、JACETの一層の発展のため全国に支部網を張り巡らすことの必要性を説き、それに何がしかの貢献をすることだった。そしてそれは見事に実現した。また、次つぎと他支部が作られていく中で、先輩支部の意気を示すべく、関西支部に13のプロジェクトチームを作ったり、夏期セミナーを関西で引き受けたりした。

そして90年代一大谷新支部長にあとをお願いし、私は一会员に戻るつもりでいたら、感謝状を頂戴し、顧問にまでしていただいた。

今や第四世代に入ったJACET。しかし、コンピューターはすでに人工知能の第五世代に入っている。JACETも前途洋洋々、今後は世界中のJACETとして更に飛躍を続けるであろう。

# 九州・沖縄支部の創立期を顧みて

顧問 林 哲郎

大学における英語教育の改善を目標に掲げて発足したJACE-Tが今年で30周年を迎えたことは、喜ばしい限りである。顧みるに、東北支部、中部支部、中国・四国支部に続いて九州・沖縄支部が設立されたのは、昭和59年のことである。以来創設期の数年を微力ながら支部長として努めさせていただいたことは、私にとって誠に光栄であった。その間、ご支援を賜わった支部の運営委員、会員の皆様に厚くお礼申し上げる。

新しい組織の誕生は、希望に満ちて感動的なものである。「人間味あふれる支部づくり」を目指した昭和59年7月8日の本支部の設立は、まさにそのような典型的の一つであった。今は亡き元会長の小川芳男先生、そして現会長の小池生夫先生、理事の松山正男先生のご出席の下に、福岡市の「はかた会館」において設立総会が開かれた。支部規約の制定、役員の選出、活動方針案の提示の後、記念講演と「大学における英語教育の目的と目標」と題するシンポジウムがあり、夕刻の懇親会で盛会のうちに終了した。ここに支部運営の基礎ができ上がり、その発展の基盤が固まった。

本支部の実際上の産み親のとなった宮原文夫氏（九大）と岡秀夫氏（当時九大）の活躍は忘れてならない。1年以上も前から、両氏は設立準備委員会を作り、発起人を選出依頼し、支部規約の原案を定め、正式の支部設立へ向けて努力された。この間の両氏の熱意とご苦労に感謝したい。以来、両氏は最初の支部幹事を努め、続いて山中秀三氏と武井俊詳氏、名本幹雄氏と引き継がれて支部の発展に尽くされた貢献は特筆すべきである。

支部活動の中核となるものは、年次支部大会における会員の研究発表である。英語教育の新しい技術と理論の研究に関するものとともに、会員自身の授業体験の調査分析についての報告も有益であり、示唆に富るものであった。大会時のシンボ

ジウムについても、テーマの選定から講師の人選にいたる種々の配慮が必要であった。

毎年、秋か初冬に、著名な外国の学者を招いておこなう特別講演は、殊に好評であり有意義であった。第1回は語用論の権威であるG.リーチ教授（ランカスター大学）による「英文法研究の新方法」と題するもので、昭和59年11月、九大における開催は大成功であった。さらにD.クリスタル教授の英語の語法に関するもの、J.M.シンクレア教授の談話分析論、D.ブラジル教授のインストレーション論等は聴衆に感銘を与えた。

平成元年9月22日～24日、「英語教育の多様性」をテーマに掲げ、第28回全国大会を九州・沖縄支部の担当として、福岡市の西南学院大学において開催した。九州における大会は初めてのことであり、1年前から支部の運営委員はそのまま大会実行委員となって、企画・準備・実施に当たった。その時の大会事務局として、開催校の村上隆太氏と武井俊詳氏のご苦労は大変なものであった。研究発表52、報告2、ミニ・シンポジウム3、ワークショップ3、特別講演2という盛澤山のプログラムを滞りなく実施でき、盛会裡に終ったことは、支部役員・会員一同の調和と協力によるものであったと感謝している。

発足より6年が経過し、本支部の発展が軌道に乗った時点で、私は体調のこともあり、支部長を辞任せていた。そして現在、支部長に福田昇八先生（熊本大学）、副支部長に宮原文夫教授（九州大学）が就かれ、事務局も西南学院大学から筑紫女子学園大学に移っている。九州・沖縄支部がJACE-Tのなかの若い支部として、清新な気風を漲らせ、会員たがいの深い親睦と協調の下に充実し発展していくことを期待している。

# J A C E T と私

顧問 片山嘉雄

J A C E T 創立 30 周年と知つて今さらながら時の流れの速さに驚いてゐる。その頃ブリティッシュカウンシル スコラーとして一年間ロンドン大学で研究を終えて帰国したばかりであったので欣然入会したことを憶えている。したがつて会員歴から言えば最長の一人かも知れない。しかし参加学会が日本英文学会、中四国英文学会、世界音声学会など余りにも多すぎ、J A C E T 会員として十分貢献しないままに年を重ねてたのが実状であった。たまたま小川芳男会長が岡山県出身であることから評議員に指名され、東京での大会には毎回出席するように努めてきた。岡山からの会員で最も熱心であった一人が橋内君であったが、彼から必要な情報を提供されて学会の活動を知るという程度であった。

昭和58年岡山大学から国立津山工業高等専門学校長に転出した。この頃若手の大学の英語教員が集つて、J A C E T の中四国支部を結成しようという動きがあり、昭和59年6月ノートルダム清心女子大学で創立大会が開かれ、思いもかけず私が初代支部長に推舉された。各種学会の会長を辞任して少しのんびりした生活を望んでいたので極力固辞したが結局会員の諸氏に説得され、それ以後3期6年にわたり支部長を務めることになった。この間橋内事務局長、ついで中村事務局長を始め幹部会員の熱意と努力により各種研究会、例会を開催して J A C E T 中国支部の名を低下させないよう努力してきたつもりである。特に平成元年夏 J A C E T 全国大会を中四国支部、主管四国学院大学で開催できたことはわれわれの記憶に新しい。四国学院大学での長期に汎る諸準備とご苦

労、支部幹部の呼吸のあった協議と協力、さらに J A C E T 本部からの適切な支援とアドバイス、これらが結集され、第三者的に見てもはずかしくない全国大会であったと自負している。このことに協力実行していただいたすべての人々にあらためて感謝の気持を表したい。

平成2年夏東京神田外国语大学で J A C E T 全国大会が開催された。小川芳男先生が学長である当大学が主管大学で、しかも新しいタイプの大学ということで、会員全員この大会を心から期待していた。ところがその直前小川初代会長の赴報に接し支部会員悲しみに打ちひしがれた。先生が勲二等ご受章の際東京の京王ホテルまで馳せ参じお祝いを申しあげたことを思いだし、心から悲しみと哀悼の気持で先生の死をいたんだことである。

平成2年3期6年の任期を終了し、中四国支部長の職を愛媛大学の井門氏にバトンタッチした。年若く有能な新支部長のリーダーシップにより更なる飛躍が期待される。このような状況で神田外大での全国大会に参加したが、その際 J A C E T の顧問に推舉され梶木会長から立派な記念品を頂いた。光栄の至りである。

J A C E T の目を見はるような拡大と発展は、東京本部役員の献身的貢献によるところ極めて大である。それとともに小川、梶木、そして小池の三氏の会長、それを支える本部、各支部、会員の抱く健全で良識のある教育哲学、英語教育観の故であろう。30周年を第2のジャンプ台として日本の大学英語教育および中等英語教育の心づよいリーダー集団として J A C E T がさらに発展していくことを希望するものである。

# J A C E T は私の研究里程碑

顧問 直井 豊

私は学会創立時は評議員であった。'64年夏、当時の事務長比屋根さんから大会で研究発表せよとの御言葉、いたく感激、早速、米国留学 ('50-'53) 中からの研究問題から Communication & Personality, Culture & Language, Learning Foreign Languages & Intelligence を提出、役員諸氏の選ばれたのが第三の問題であった。大会での研究発表はこれが最初の企画であった。

発表は問題を知能に限定し、行動心理学の知能特殊因子論を否定し、“Gestalt” Psychology の視点より知能と外国語学習との特殊的相関関係の無意を、南山大学生を被験者として実証、知能の総合性を主張した。（'64年度学会会報参照）

言語の communication 機能を明確にするには、culture の究明が必要であることを前提として、当時大学使用教科書を分析、この分野における貧困を指摘したのが第17回大会 ('74) であった。最近、米・英・日文化に関する教科書が多く出版される傾向は慶賀すべきであるが、未だ文化本質論、特にわが文化の深層にまで及ぼぬのは残念至極である。（J A C E T 通信'75、特に'89、No.73 参照）

知能の問題は Wundt の実験心理学の発達に伴ない、大陸では Kofka, Koher (“Gestalt” Psychology) は知能総合力を実証した。米国においてこの心理学を認める学者に Sapir, Whorf, Neisser, Rivers がいる。

“Gestalt” Psy. とともに行動心理学を否定する心理学に Cognitive Psy. がある。これには二学説がある。一は materialism による Bartlett の説である。かれは思考を脳の活動であることを実証し ('32-'58)、Neisser はこれを継承し、その著

“Cognitive Psy.” ('67) は現在もなお米国はじめ、諸国の大学研究者の必読書となっている。本書を私に紹介されたのがかの Dr. Lado であった。

かれは Chomsky の Theoretical Cognitive Psychology ('68) である。かれは Descartes に従って materialism を展開したが、やがてこれに満足せず、Miller に心理学的実証 ('64-'67) を、Lenneberg には神経学的検証 ('64-'67) を求め、Descartes に別離を告げ、かれの二元論を構築するに致った。かれに影響を及ぼしたのはかの Pragmatism の主唱者 Peirce である。Behaviorism を除き、かれはすべて思考を問題解決—仮設、検証—科学的論理とする点において一致する。

私は従来の教育法に Cognitive Psy. を導入し、私の学際科学を構築、英語検定試験一級受験志望者を対象として実験を試みている。実践に当っては学習者の motivation, modularity, learnability, schemata の啓発に努め、文化、言語、思考、世界の相対論、普遍論の解明も忘れていない。その成果については J A C E T 中部大会において発表している ('90, '91)。発表に当っては、特に英語表現に及ぼす日本の論理（相対論）の negative transfer を指摘し、Cognitive discipline の重要性を強調して止まないのである。

なお、J A C E T の名称決定の時 ('56年、第5回大会) は日本人の「名」を尊ぶ心理を考慮し、ColLege を University とすべきであると修正案を提起したが、拒否された。これが最近改めて論議されているが、実に感無量というべきである。

要するに、J A C E T は私にとり研修機関であり、大会討論には積極的に参加することに努めた。実に、J A C E T は私の一面である英語教育者（かれは大学教育）の歩んだ道程であり、学会を通じ、友人に恵まれたこととともに感謝せざるを得ない。

## 英語教育への関心

顧問 大浦幸男

私は元来文学畠の者だが、その私が何ゆえ英語教育に关心を持ったか、をまず語りたい。私は昭和6～9年に旧制三高、昭和9～12年に京都大学で学んだが、共に英米人の先生がいた。従って英語のヒアリングは一応出来たが、スピーチになると、さっぱり駄目であった。それを身に沁みて感じたのは、終戦後に進駐軍が来たときであった。さっぱり会話が出来ないのだ。それで、わが国の英語教育は何處か欠陥があるのではないかろうか、と考え始めたのである。

私は昭和21年に三高教授、同25年に京大助教授となつたが、その頃から積極的に外人教師と接触し、努めて英語を使い始めた。また、自分でもoral methodで授業したこともある。

当時、アメリカも日本の英語教育には大いに关心を持ち、昭和37年にはアジア財団が出資し、京大でintensive courseが行なわれた。京都の国際ホテルで14人の学生が6週間滞在し、米人の先生の指導の下に集中訓練をするというデラックスなプログラムであった。

このプロジェクトの世話をした私と、もう一人の京大の教官が、その後アジア財団により3ヶ月米国に派遣され、各地の大学で英語教育を視察した。そのときUCLAでPrator教授の“Manual of American English Pronunciation”的授業を見たが、今までにない実際的な教科書なので大いに感心し、帰国後それを翻訳、『アメリカ英語発音教本』として出版した。幸い好評で、今でも版を重ねている。

その後、昭和44年にJACETの評議員になり、同47年に関西支部発足と共に支部長になり、同56年まで勤めた。私のJACETへの关心は常に日本の学校、特に大学における英語教育を如何に改善するか、に在った。もっとも、私は英語学者ではないから、理論的な改善はもちろん不可

能である。従って、日本での従来の訳読法偏重に代わって、もっと実用的に英語の能力をつけさせる教育法に关心を持ったのである。

昭和38年に米国の大学で語学教育を視察した際に感銘を受けたことは、クラスの人数が少なくそのためたびたび指名されることであった。日本でもクラス・サイズを小さくせねばならぬ。しかし、それには先生がたくさん要る。だから、teaching assistantの制度を作ることが必要だが、こういう制度上の改革は日本では容易に出来ぬ。結局、大学での英語教育の不備を補うために、市中に会話学校が数多く出現し、native speakerを使って少人数で授業している。私自身も、昭和44年より京都イングリッシュ・センターという会話学校で理事兼顧問となった。

日本の大学では外人教師の数が少ないので、会話の授業はまともにやれない。京大では新学年の最初の授業には学生が数百人来て、教室の後ろにまで立っていることが多かった。ところが、間もなく激減してしまうのである。外人教師の不足を補うためLLSが必要となる。私は京大ではずっとLLSを担当していた。プレイヤー『アメリカ英語発音教本』を主教材とし、副教材としてジェムコより購入した16ミリの映画を使った。かつて東京学芸大学にてJACETの大会があったとき、「映画利用の英語教育」というシンポジウムをした。

また、大学の入試試験は英語教育の癌であると、私はかねがね考えていたので、昭和50年過ぎに共通テストの実験が始まると、私も関西における10人の委員の一人として参加した。

以上、私の英語教育との関わりを述べたが、すべて個人的な思い出に過ぎぬ。しかし、元来文学畠の私には、これが精一杯なのである。

## 中部支部の明け方

顧問 佐藤一夫

中部地区の黎明の頃、大学教育・英語教育が専門で現在なおこの地方の英語検定関係の中心におられる直井豊先生と名大の村松正先生が評議員を勤めておられた。その頃の英語教育として特記すべきは、愛知県立大学外国语学部で日本語を全然使わない英語教育が担当教官の総意に基づいてすでに行われていたことで、この実験授業の報告は'72年J A C E T創立十周年記念の立教大学に於ける大会で、県大の担当者の一人丹下省吾先生によって発表され、大きな反響を呼んだ。'71年村松先生の名大定年退職の後を佐藤が引き継ぐことになったが、その後暫くして、中部支部結成の兆しがあると考えられて東京から小川芳男会長・松山正男・田中春美の先生方（お名前はABC順、以下同じ）が来名され、南山大学で懇談会が持たれ、南山側としては学長代理のラ・フホルジ神父、今川憲次先生、会員では井上亮治、池稔夫妻、直井豊等の先生方と佐藤が参加した。この会合は支部発足の非常によい刺激となった。会員の主な人達はLLAや語研の役員を兼ねており、その経験から支部大会の開催だけは可能と思われたが、学園紛争の折でもあり、会員が余りにも少なかったので支部創立はためらわれた。このかなり前にいくつかの支部結成推進の仕事をしておられた本部の小池生夫先生は池稔先生の案内で直井豊先生を訪ねられ、後日他の先生方との話し合い、また偶々LLAの大会で落ち合った池稔・丹羽義信先生との話し合い等のことがあった。

'77年佐藤定年後は名大からは荒木一雄先生が評議員になられた。その少し前'76年に東京で支部結成の経緯をよくご存じの田中春美先生が南山大学に着任され、八王子の夏期セミナー参加の経験のある池稔・小野経男等の先生方もおられたことで支部結成の機が熟し、'82年に荒木一雄・池稔・村松正・直井豊・小野経男・白川正男・田中

春美等の先生方と佐藤の26名連記で趣意書が配布され、翌'83年6月東京から小川会長・小池生夫・田辺洋二の先生方を迎えて南山短期大学で第1回支部大会が開催された。最初は支部長を置かず、池・直井・小野・田中の先生方と佐藤の5名による合議制であったが、「88年支部長制が採用され、直井豊先生が初代支部長となられ、次いで田中春美先生が二代目支部長となられた。'85年には第24回全国大会が相山女学園大学で開催され、同大学の柴田正・田中幸子等の先生方には懇切なお世話を頂いた。またJ A C E TとLLAは相補うものであるという考え方を当時の丹羽義信LLA支部長も持っておられて、両学会の連繋が非常にうまく行っていたことは当地方にとっても幸いであったと思う。

この初期の頃から特に活躍頂いた方々に前にお名前の出ている方の外に例えれば、古沢宏輔・八田重雄・羽澄英治・本名信行・堀部憲夫・堀内俊和・池ヒサ子・金田正也・黒川新一・松井恵美・長崎恵博・大橋勇・大谷正義・境賛二・清水克正・菅原光穂・住本哲子・津田早苗・月山秀夫・吉川寛・舌津清等の先生方がおられた。特に女性の先生方はかなり煩瑣な力持的な仕事をよくして頂けたので支部運営が成り立ったのだと思う。支部会員の一人として厚くお禮を申し上げたいと思います。猶Quirk, Leech, Di Pietro, Scott, Ross, Labov, Rivers, Crystal等の先生方の警咳に接し得たことは支部結成のお蔭であったし、また結成の当初からの本部の方々のご支援には心から感謝したいと思います。

最初評議員をお引き受けしてから丁度二十年。昔をふり返ってみて直井豊先生には折にふれ大変お世話を頂いたことを有難く思っております。

## 第二部 J A C E T の諸活動

### 1. 委員会・研究会

#### (1) 全国大会運営委員会

全国大会の大会テーマは、J A C E T 大会の内容はもちろんのこと、その時々の日本の英語教育・大学英語教育がどのような状況にあるのか、また何がいま英語教育の中心的論議となっているかをよく分からせてくれる。全国大会にテーマが設けられたのは、記録によると第 20 回（1981 年）からである。この 10 年の全国大会のプログラムの中に、英語教育（特に大学英語教育）に携わる者が教育改革による嵐の中で、社会の要請（ニーズ）に答えるべく様々な試みを実践している様子を垣間見ることができる。

全国大会のプログラムは年々膨らんでいる。1988 年度の第 27 回大会を例に取ると、講演 2 件、研究発表 59 件、VTR による授業公開 6 件、シンポジウム・ワークショップ 11 件と極めて多彩なプログラムになっている。そして、第 30 回（1991 年度）記念大会はこれまでの枠組みのプログラムにさらに、「英語教育の集い」のプログラムを加えた。

さて、ここ 10 年間の全国大会は規模・内容等が大きく様変わりしてきたことがうかがえる。開催日は例年秋となっていたが、会場校での授業等の都合から 10 月開催というのは難しくなってきて、ここ数年は早まって 9 月になる傾向がみられる。大会の規模が大きくなればなるほど、組織やその運営に係わる人員、そして大学の施設の使用、増加する一方の費用等々が問題として今後検討されなければならないであろう。さらに次の 3 点から全国大会を見てみたい。

第 1 の規模と内容であるが、大会日を 3 日間とした当初は、第 1 日目を VTR による授業公開「私の授業」のみのプログラムであった。ところが 3 日間をぎっしり埋めつくすほどのプログラムが組まれるようになり、その上、並行して行われるプログラムも多くなっている。プログラムなどの印刷物に関しては、第 23 回（1984 年度）

に初めての試みとして「大会プロシードィングズ」を発行して、大会発表を収録していた。しかし、作成に要する時間がかかり、また相当の費用を必要とするため、第 26 回（1987 年度）大会から「大会要綱」（第 24・25 回は「大会案内」）発行に切り替えた。

また第 30 回（1991 年度）大会では、「大会要綱」に発表者が大会当日の会場で参加者に配布するハンドアウトもしくは資料を収録し、256 頁の大冊となっている。また大会ポスターを作成したのは第 28・29・30 回である。

内容に関しては、VTR による授業公開「私の授業」、「講演」、「研究発表」、「シンポジウム」、「ワークショップ」、そして大会最終日に行われる「全体シンポジウム」などがほぼ固定したプログラムとなっている。これに大会テーマによる「課題研究」や自主企画の「シンポジウム」が加わることになりプログラムとしては多彩を極めている。第 30 回（1991 年度）大会では、30 回記念として「英語教育の集い」を催したのは、本学会の初めての試みである。この集いは会員ではないが英語教育に関心ある人達に対して参加を呼びかけて、講演とシンポジウムを開催したものである。大会の参加者にとって教材・機器に関する情報を得られるのも大会参加の楽しみの一つでもあるが、賛助会員の協力による書籍・教材・機器の展示も毎回平均 50 社余りになり、大会に彩りを添えている。

第 2 の組織と運営について大幅に変わったのは、第 28 回（1989 年度）大会からである。これまで代表幹事が責任者を務めていたのが、新たに大会運営委員長を会長委嘱で置くこととなった（初代運営委員長：石川祥一）。新たに設けられた学会会則内規により、全国大会運営委員会（本部・支部）を組織してあたることとなっている。全国大会運営委員会の構成は、大会委員長（開催担当

支部長)、大会担当理事(第23回より田辺洋二)、大会運営委員長、大会運営委員(実行委員)の役割と責任が明確にされた。

第3の費用と施設については、印刷費やアルバイトの入会費が年々嵩む一方にあることは紛れもない事実である。しかし、学生等のアルバイト料は巷間のものとは比べものにならないほどの開きがある。学会全体の総収入を考慮すると、大会に支出できる額は限度があるので致し方のないことである。大会の総支出が500万円を超えたのは第30回大会である。例年300万円程度に抑えってきた大会費用は、会場校が国公立大学の場合は、関係機関からの援助を期待できないので、今後益々増えていく傾向にある。今後、大学の施設を会場として借りる場合でも、大学からの多額な援助は期待できないことに加えて、大会の総経費を予算の枠の中だけで賄うことには多少無理がでてくることも考慮する必要があるだろう。

しかし、支出が多額になるわりには、大会時の広告費、贊助会員の展示贊助金などの収入も相当の割合を占めている。また1991年度(第30回)から大会費用の一部を補ってもらうかたちで、参加者から大会参加費として2,000円を戴くことになった。

大会開催については会則内規に規定されているように、毎年開催することと、本部が3年に1回担当することになり、他の2年は各支部が持回りで担当することが原則となっている。

各大会の開催日、開催会場、大会テーマ、基調講演、主なシンポジウムのトピックスは次の通りである。

#### 第21回 1982年10月29日～31日

同志社女子大学(京都府)

テーマ：「多様化の中に原点を求めて」

講 演：「比較教育学の視点からみた日本の教育」(小林哲也)、「Dynamism in Language Learning」(Henry G. Widdowson)

シンポジウム：「大学英語教育の実態と展望」

#### 第22回 1983年10月8日～10日

東北学院大学(仙台市)

テーマ：「大学英語教育の理想を求めて—現状と展望—」

講 演：「大学入試からみた英語教育」

(加藤陸奥雄)

シンポジウム：「大学英語教育の理想を求めて—現状と展望—」

第23回 1984年10月19日～21日  
上智大学(東京都)

テーマ：「転換期の英語教育—いかに対処すべきか—」

講 演：「これから大学教育」(天城勲)

'Linguistics and Foreign Language Teaching' (R. H. Robins)

シンポジウム：「問われる大学教養過程の英語教育—中・高教課程の学生を迎えて—」

第24回 1985年10月25日～27日  
桜山女学園大学(名古屋市)

テーマ：「教育改革と大学英語教育」

講 演：「教育改革と英語教育」(飯島宗一)  
'The Communicative Approach to Foreign Language Teaching' (Keith Johnson)

シンポジウム：「現代の学生とこれからの英語教育」

第25回 1986年9月19日～21日  
慶應義塾大学(東京都)

テーマ：「世界平和と英語教育」

講 演：「これから社会と教育」(石川忠雄)  
'The International Communicative Role of English' (Sir Randolph Quirk)  
'Recent Development in EFL Dictionaries' (Gabriele Stein)  
'From Linguistic Competence to Language Proficiency: Changing Goals for TEFL' (Richard W. Schmidt)

シンポジウム：「国際理解と英語教育」

第26回 1987年10月9日～11日  
京都産業大学(京都府)

テーマ：「大学英語教育と社会の要請—国際語としての英語教育—」

講 演：「世界の中の日本人」(岡本道雄)  
'How does Applied Linguistics Contribute to Language Teaching?' (Frank R. Palmer)

シンポジウム：「English as a Foreign Language or as an International Language?」

- 第27回 1988年9月23日～25日  
四国学院大学・善通寺市民会館(善通寺市)  
テーマ：「日本とアジアの英語教育」  
講演：「高等教育の国際化について—諸外国との比較的考察ー」(喜多村和之)  
'The Role of English in Singapore: Implications for Teaching'(Catherine Lim)  
特別シンポジウム：English Education in Japan and in Other Asian Countries
- 第28回 1989年9月22日～24日  
西南学院大学(福岡市)  
テーマ：「英語教育の多様性」  
講演：「これから高等教育の展望と問題点—活性化と多様化をめざしてー」(田中健蔵) 'The Role of Grammar in TEFL' Roderick Ellis  
シンポジウム：「英語力の多様性—社会的環境、学習者、テストとの関連においてー」
- 第29回 1990年9月6日～8日  
神田外語大学(千葉市)  
テーマ：「高等教育における外国語(英語)を考える」  
講演：「高等教育における外国語(英語)を考える—これからの大学教育の方向性と関連してー」(戸田修三)

- 全体シンポジウム：「いま、あらためて大学英語教育を考える」  
第30回 1991年8月23日～25日  
北海道大学(札幌市)  
テーマ：「英語教育と国際化—地球市民への教育に向けてー」  
講演：「国際化と教育の役割」(大来佐武郎)  
'Language, Culture and Education'(David A. Wilkins)  
小講演：'Unnatural Language Learning'(David A. Wilkins)  
'Memory Models and Language in Action'(Wilga Rivers)  
'Cross-cultural Communication: Attitude or Platitude?' (Ronald White)  
シンポジウム：「大学設置基準の大綱化と外国语教育(1)—大学英語教育改革についてー」「大学設置基準の大綱化と外国语教育(2)—大学の英語教育改革にどう対処するかー」  
全体シンポジウム：「英語教育と国際化—地球市民への教育に向けてー」  
英語教育を考える集い：「国際語としての英語—同時通訳者の体験からー」(村松増美)  
シンポジウム：「学校英語は役に立つか—国際理解とコミュニケーションー」  
(石川祥一)

## (2) 紀要編集委員会

大学英語教育学会紀要委員会は学会紀要創刊号以来、昨年の30周年記念北海道大会までに第22号を刊行してきたことになる。これもひとえにご多忙な公務の最中、毎年、数多く応募されてくる多岐にわたる専門分野の論文の審査を快くお引き受け下さった全国の論文審査員の方々を始めとして学会員各位のご協力の賜物と厚く感謝申し上げます。

既刊の学会20周年記念誌に本学会創設より20年間の紀要委員会活動の様子が紹介されておりますので、ここでは、その後10年間の紀要委員会活動のあらましを紹介したいと思います。

この10年間、紀要の本体は従来の編集通りで

あるが、その体裁は多少の変化をしてきた。第1号から第15号までの紀要卷末には本学会の年間活動状況を会員にお知らせするための「本学会活動状況」が掲載されておりましたが、「JACET 通信」が充実した情報を掲載するようになったことに伴い、姿を消すことになった。紀要奥付に編集スタッフ氏名と審査員氏名が明記されることになったのは第17号からである。また英語を母国語とする応募者が年々増加してきたことに伴い、原稿執筆要項が日本語版から英語版に変更されたことなどがあげられる。

紀要委員会活動の大きな変化としては先ず、紀要編集体制の発展的改革が挙げられる。1982年

(紀要第13号)から1986年(紀要第17号)まで  
は紀要編集委員は編集顧問の梶木隆一先生(前会長)を始め、全員JACET事務局に参画していた  
関東地区の研究企画委員で構成されておりましたが、1987年より学会の規模の拡大と支部の充実  
に伴い、全国各支部より各一名づつ紀要委員が選出され、全国紀要委員会が本格的に組織され、本  
学会紀要の掲載論文の質的向上を図ることとなつた。その変革に伴い、編集顧問制度を廃止、代わ  
りに紀要担当理事を置き、紀要委員会が編集スタッフとして組織化された。京都産業大学で第一回全  
国紀要委員会が開催されて以来、昨年までに6回の全国紀要委員会が開催されたが、過去6回の全  
国紀要委員会で討議された主な内容を紀要委員会議事録から再録し、広く会員各位に披露し、今後  
の紀要の充実と質の向上に資したいと思います。

#### 第1回全国紀要委員会 紀要18号発行

1987.10.9 (京都産業大学第1研究室棟会議室)

出席者:(紀要担当理事)小池生夫、(委員長)

鈴木博、(副委員長)原岡笙子、Dennis E.

Schneider; (関東)矢田裕士、矢野安剛、行広  
泰三; (関西) 大谷泰照; (中国・四国) 五十嵐  
二郎; (九州・沖縄) 山中秀三(宮原文夫代理)

##### (1)編集組織・体制について

紀要の充実のためには、編集委員は任命制と  
し、任期は3年とする。ただし再任は妨げない。  
編集組織体制は Executive Director; Editors;  
Reviewers で構成されるものとする。(紀要第  
18号参照)

##### (2)Advisory Boardについて

国内外の硕学を中心に Advisory Board を  
組織することが決定され、今後、紀要発行ごとに  
その内容、傾向、水準について専門的意見を  
頂くこととする。その人選については専門分野・  
国籍などのバランスを考慮し、学会としての正  
式な依頼状を送り就任していただく。

##### (3)応募論文の審査体制について

紀要の水準を国际的にするために応募論文の  
審査体制を更に整える必要がある。そのためには  
予め各専門分野毎に論文審査員を決めて、論  
文一点につき必ず複数の審査員が審査にあたる  
こととする。また論文審査を依頼する場合会長  
名で正式に依頼し、謝礼も差し上げるべきとい

う意見も出されたが、謝礼については学会予算  
の問題もあるので将来の検討事項とする。

##### (4)採用論文数について

一定の水準に達した論文のみを採用すること  
とし、その結果、採用論文数が少なく、紀要が  
薄くなてもよしとする。論文内容により理論  
編と教育編(応募編)に分けることも考えられ  
る。また執筆者の今後の励みとなるように非掲  
載の論文でも何点かは選外佳作として氏名と論  
文名を載せたらどうかとの意見も出された。

##### (5)印刷方法について

印刷方法を活版印刷からフィルム印刷にす  
ることとする。その結果、印刷費用の軽減が計  
られることや執筆原稿を直接印刷することになる  
ので、編集の際に校正が不要となり執筆者との  
トラブルがなくなる。また編集時間が大幅に短  
縮され、編集作業が容易になる。ただし執筆者  
が使用するタイプライターやワープロの機種に  
より活字の統一が計れず見苦しくなることが予  
想される。

##### (6)目次について

紀要第19号より執筆者の漢字氏名を目次頁  
に併記する。

##### (7)紀要発行回数について

差し当り年1回とする。しかし水準の高い論  
文が多数寄せられ、かつ予算的に余裕があれば、  
その時点で年2回発行の可能性について検討す  
ることとする。その他多くの重要案件が提出さ  
れたが、時間不足のため十分議論を尽くすこと  
ができず再度、12月に東京で臨時全国紀要委  
員会を開催することに決定した。

#### 第2回全国紀要委員会

1987.12.26 (JACET事務局)

出席者:(紀要担当理事)小池生夫、(委員長)

鈴木博、(副委員長)原岡笙子、Dennis E.  
Schneider; (北海道)牧野高吉、(東北)藤田  
孝; (関東)島岡丘、行広泰三、高橋貞雄;  
(中部)堀部憲夫; (関西)大谷泰照; (中国・  
四国)五十嵐二郎; (九州・沖縄)宮原文夫

##### (1)Advisory Boardについて

継続審議事項になっていた Advisory Board  
については、人数は10名程度とし、専門分野  
は英語教授法(言語習得; 教授法; 教材論;

Speech Education; 英語教育工学 ; LLなどを含む)、英語学 (言語理論 ; 音声学などを含む)、英米文学、応用言語学 (英語教育政策 ; 社会言語学 ; 心理言語学 ; 異文化コミュニケーションなどを含む) とすることになった。またその人選については外国人メンバーは原則として本学会の名誉会員であること、日本人メンバーは本学会会員であること。その任期は 5 年とする。金銭の謝礼はしないこととするが、その見返りとしてメンバーの出版物を JACET 通信などで優先的に紹介したり、海外のメンバーは訪日の際、学会としてお世話するということが決定された。

#### (2) 紀要応募論文審査体制について

応募論文審査員の候補者として本学会の理事、評議員及び研究企画委員の中から、専門分野などを考慮して総勢 94 名とすることを決定した。

#### (3) 応募論文の評価項目について

評価項目を次のようにすることに決定した。

1) 独創性、2) 内容と構成 (先行研究の把握、一次資料への言及、実証性の有無、統計処理の妥当性の有無等を含む)、3) 表現 (論旨の明晰さや英文の質など) の観点から点数制で総合評価し順位を決定する。

#### (4) 審査方法について

応募論文の審査にあたっては先入観や個人的な気持ちが反映されることの無いように、全論文執筆者の氏名を伏して審査員に回すこととする。(Blind Review 方式)

#### (5) 論文締切り日について

応募論文締切り日については毎年、全国大会開催期日が必ずしも一定していないので、全国大会当日に確実に全会員に配布できるようにするためには応募論文締切り日を多少変更する場合があることを決定した。

#### (6) 紀要論文の著作権について

掲載論文の著作権は学会に属することとする。

### 第3回全国紀要委員会 紀要19号発行

1988. 9.22

(四国学院大学 : ホテルサンルート瀬戸大橋)

出席者 : (紀要担当理事) 田辺洋二、(委員長)

原岡笙子、(副委員長) Dennis E. Schneider ;

(北海道) 牧野高吉 ; (東北) 欠席 ; (関東) 鈴木博、矢田裕士 ; (中部) 堀部憲夫 ; (関西) 大谷泰照 ; (中国・四国) 中村浩路 ; (九州・沖縄) 宮原文夫

#### (1) 論文審査について

- 審査論文は採用用紙のみでなく朱を入れたりコメントやメモを付した論文本体も返却して頂くこととする。
- 郵送ミスや審査員の都合により審査辞退のこともありうるので、審査員には依頼論文送付の際に返信用葉書を同封し確認をとる。
- 不採用論文にはその理由を公表するか否かの問題には長所短所があるが、トラブルをさけるため現状通りコメントしないこととする。

#### (2) 応募論文について

- 応募者が JACET 事務局宛てに論文送付する際は受領確認のために書留速達にする。また編集委員会からの問合わせができるように連絡先を付記してもらうこととする。
- 近年、共同執筆による応募論文が多くなってきたが、共同執筆の場合も、執筆者人数にかかわらず抜き刷りは 20 部とする

#### (3) 応募者には論文提出の時点で審査してもらいたい分野を各自記入してもらう

#### (4) 審査員のご都合もあるので毎年、審査依頼状を送付し、審査にあたってもらえるか否かの確認をとることとする

#### (5) 次号から奥付けも英語にする

### 第4回全国紀要委員会 紀要20号発行

1989. 9.22 (西南学院大学西新地校舎本館)

出席者 : (紀要担当理事) 田辺洋二 ; (委員長)

原岡笙子 ; (副委員長) Dennis E. Schneider 、矢田裕士 ; (北海道) 牧野高吉 ; (東北) 欠席 ; (関東) 鈴木博、高橋貞雄 ; (中部) 欠席 ; (関西) 大谷泰照 ; (中国・四国) 井門義男 ; (九州・沖縄) 岡秀夫

#### (1) 報告 1

今年より紀要編集作業日程マニュアルを作成し、それに従って編集作業を進めていったことを報告。(この紀要編集作業日程マニュアルは多少の日時の変更をすれば毎年利用が可能)

#### (2) 報告 2

今号よりフィルム製版印刷に変更したこと、印刷費用が昨年よりも約10万円軽減することができた。仕上り状態もさして問題がないので、来年度以降もこの印刷方法を採用することとする。

#### (3) 編集に際しての問題点

現在は執筆申込み締切り日が3月31日、完全原稿提出締切りが7月10日となっているが、年により全国大会期日が1か月近く早いこともあるので、完全原稿提出締切りが7月10日に固定されると審査や編集作業が日程的にきつくなるので、来年度は完全原稿締切り1月早め6月10日とする。

#### (4) 審査員体制について

現在は94名の審査員体制で応募論文の審査にあたっているが、審査員の都合により全員が審査を承諾されるとは限らず、また論文内容の学問分野が多様化したこともあり、現体制では不十分である。来年度より北海道支部7名、関東支部22名、関西支部20名、中国四国支部6名、九州沖縄支部7名の計62名の審査員の追加を決定した。審査員追加については紀要担当理事の田辺洋二氏に理事会で承認していただく手続きをとる。

#### (5) 紀要編集担当の支部持ち回りについて

毎年同じ支部が紀要編集担当するのは負担が大き過ぎるので、また全国紀要委員会が組織されて4年を経たので今後は編集作業を各支部に担当してもらったどうかとの提案がなされたが、現状では諸般の事情により不可能なので、来年以降の懸案事項とする。

#### (6) 審査員の専門分野一覧表作成について

審査員の専門分野一覧表を作成して論文審査をより迅速・確実にすることを決定した。(北海道支部牧野氏担当)

### 第5回全国紀要委員会 紀要21号発行

1990. 9. 6 (神田外国语大学2号館202室)

出席者：(紀要担当理事)田辺洋二、(委員長)  
矢田裕士、(副委員長) Dennis E. Schneider、  
上地安貞；(北海道) 牧野高吉；(東北) 藤田孝；  
(関東) 鈴木博、Erich Berendt、菅原安彦；

(中部) 堀部憲夫；(関西) 原田園子；(中国・四国) 井門義男；(九州・沖縄) 岡秀夫

#### (1) 第22号の紀要発行について

来年度は北海道大会が8月23日と例年よりかなり早まるが、編集作業上支障がないので、応募論文締切り日は6月10日とする。

#### (2) 掲載論文執筆者への抜き刷り部数について

掲載論文執筆者に対しての抜き刷り数は20部となっているが、部数を30部に増やしたらという提案がなされたが、予算との兼合いもあるので印刷業者に見積りをとり本部で検討することになった。

#### (3) 編集担当の各支部持ち回り制について

編集担当の各支部持ち回り制については昨年に引き続き再度、討議されたが、関西支部以外はまだその準備ができていないという理由から、継続審査事項とすることとした。

#### (4) 紀要応募要領の再検討

現行の英文の紀要応募要領の内容を不備の無いものとするため、見直しを検討することとする。本部に一任することで了承された。

#### (5) Book Reviewについて

Book Reviewを掲載するのは紀要の主旨に反するのではないかとの意見が出されたが、掲載論文の1,2点程度に抑えれば構わないということになった。

### 第6回全国紀要委員会 紀要22号発行

1991. 8.23 (北海道大学言語文化部504室)

出席者：(紀要担当理事)欠席、(委員長) 矢田裕士、(副委員長) 菅原安彦；(北海道) 牧野高吉；(東北) 藤田孝；(関東) 上地安貞、谷田恵司；(中部) 堀部憲夫；(関西) 原田園子(中国・四国) 大田垣正義；(九州・沖縄) 鈴木千鶴子

#### (1) 報告1

編集作業マニュアル日程表に従って紀要22号の編集過程を説明。

#### (2) 掲載論文執筆者への抜き刷り部数について

掲載論文執筆者に対する抜き刷りの部数を増加する件については本部研究企画委員会に諮った結果、予算的なことや受益者負担の原則などの理由で、従来通り20部とすることになった。

### (3) 論文審査員の拡充について

一昨年、各支部より数名づつ審査委員を追加していただいたが、なお審査員を補充する必要があれば本部で選出し各支部へ連絡することになった。

### (4) 紀要の版の拡大について

年々、掲載論文の中に細かい図・表が多くなり細か過ぎて読みづらくなってきたので紀要の版を拡大をしたらどうかということが提案されたが、さらに検討することとした。次号はとりあえず応募原稿提出の際に印刷時には原稿が78%位に縮小されることを念頭において図・表を作成してもらうことを応募者に連絡することにした。

### (5) 審査員の労に感謝する旨の挨拶状について

毎年、無報酬で応募論文の審査にあたって下さる審査員の方々に対して、本年度分から審査員の所属の上司（学長・学部長宛て）に JACET 会長名で審査の労に感謝する旨の挨拶状を送付することに決定した。

### (6) Advisory Board について

懸案の Advisory Board への英文依頼状を検討を了承された。またその人選については各

支部で再検討し、推薦したい方がいれば10月12日までに各支部より事務局宛てに文章にて連絡することとする。

### (7) 奥付について

奥付を次号から国際化時代に即応するように、従来の最終頁から表頁へと移すことが決定された。

以上がここ10年間の紀要委員会の活動のあらましであるが、紀要委員会としては今後さらに充実した学会誌にするために、積み残された問題を全国紀要委員会で時間をかけて討議し、学会の発展のためと会員諸氏の利益のための努力を傾注していくたいと考えている。

今後の課題としては1) 現状では諸般の事情で無理であるが将来は紀要編集の支部持回り制度の確立2)、国籍、分野などを考慮して Advisory Board を組織し、紀要出版ごとにその内容、傾向、水準について意見を貰い国際的な評価に耐えうる紀要編集を目指す、3) 水準の高い応募論文の増加に伴い、予算的に余裕があれば年2回の紀要発行の可能性等が挙げられる。

以下、過去10年の論文題名を列挙する。

(矢田裕士)

## J A C E T   B U L L E T I N

N U M B E R 13 (1982)

Models for Learning and Methods for Teaching .....	Robert J. Di PIETRO
Some Aspects of the Plural in English .....	Louis LEVI
An Observation of Development of Topics in First and Second Language Learners' Composition .....	Kyoko ISHIMARU
Different Issues on Bilingualism .....	Takeyoshi NABEKURA
English Grammar: The Role of Native Language Interference as Error Source .....	Junji MIURA, Joseph YOUNG
An Analysis of Perceptual Error -Effect of Learning and Mechanism of Hearing-	Mineo SUENOBU, Roy YOUNG,
	Kazuo KANZAKI, Shigeru YAMANE
A Study of American English at Word Boundaries .....	Mitsuo SHIMAZAKI
A Study of Listening Ability by Reduction From Tests .....	Masayoshi KINOSHITA, Jun ARIMOTO
BOOK REVIEW :	
Wilga M. Rivers, <i>Teaching Foreign-Language Skills</i> (Second Edition) .....	Kiyoshi TAJIMA

NUMBER 14 (1983)

- Classification Schemes and Empirical Study of Context Clues ..... Kinue HIRANO  
A Study of the Present Tense ..... Kyoko ISHIMARU  
The Effects of Attitudes and Orientation on Second Language Learning ..... Katsuko NAKACHI  
A Study of History of Bilingual Education and Teaching Tips ..... Youichi TOKUYAMA  
A Comparison of the Markedness of *Beat* and *Clobber* ..... James SWAN  
The Scope of Translatability ..... Yukio MURAKOSHI  
Strategies in Manipulating English Postnominal Modification Patterns  
Employed by the Japanese College Students ..... Chizuru MORI  
Translation and Structural Reading ..... Hajime OGINO  
Communicative Proficiency in Oral Skills  
—With Special Reference to the Function of Utterances— ..... Hideo OKA

NUMBER 15 (1984)

- The Acquisition of Relative Clauses in English: A Theoretical Synthesis ..... Yukiko K. NISHIMURA  
The Acquisition of Second Language Phonology:  
A Comparison with the Acquisition of First Language Phonology ..... Yasushi SEKIYA  
On Some Aspect of Semantics in the Transitive English Phrasal Verb ..... Akira OKADA  
Perceptions of English Polite Expressions by Japanese Students ..... Yuko IWATA & Saeko FUKUSHIMA  
On British English ..... Takami HATANAKA  
From Japanese to Japanese Americans: Acculturation in the Use of English ..... Kyoko Norma NOZAKI  
Intercultural Communicative Competence: Rationale of a Conceptual Framework ..... Satoshi ISHII  
Abuse of "Case" and "Patient" in Medical Papers Written by Native Speakers ..... Takeo HIKICHI  
The Need for a Cultural Adaptation Model  
in Creating a Humanistic EFL Classroom ..... Sandra S. FOTOS

NUMBER 16 (1985)

- A Psychological Approach to the Article System in English ..... Harumitsu MIZUNO  
Perceptions of Indirectness in English ..... Saeko FUKUSHIMA, Yuko IWATA  
An Experimental Study on the Reproduction of English by Japanese Students  
..... Mineo SUENOBU, Kazuo KANZAKI, Shigeru YAMANE  
Use of Pictorial Images to Facilitate Top-Down Processing in EFL Reading ..... Hiroko WATANABE  
Communicative Language Teaching through Problem-solving Activities ..... Toshiaki KOMURO  
A Note on the Confusing Synonyms: Mumble, Murmur, Mutter; Stammer, Stutter ..... Satoko IWASAKI  
The "Neutralization" of Deictic *That* ..... Kunihiro NAGASAWA  
Conversation Analysis: A Model of Structural Illustration ..... Akio YABUCHI  
On the Methodology of Quantitative Groupings of English Texts ..... Junsaku NAKAMURA  
A Tentative Proposal to the Analysis of the Imperative in English ..... Keiko ABE

## NUMBER 17 (1986)

- Teaching English as an International Language in Japan ..... Yoshihiro NAKAMURA  
A Study on the Effect of Linguistic Experience in Speech Perception:  
Identification of English Diphthongs by Native Speakers of Japanese and English ... Takuo HAYASHI  
Cross-cultural Differences in Rhetorical Patterning: A Study of Japanese and English ..... Kyoko OI  
The Information Needed for Comprehending Expository Prose ..... Taeko SATO, Hiroko WATANABE  
Discourse Level Language Transfer: A Study of Procedural Discourse ..... Robert M. DE SILVA  
Politeness Principles ..... Yuko IWATA, Saeko FUKUSHIMA  
Prenominal -ing Participles Accompanying Complements ..... Tsuruo HISAZUMI  
A Study of Returnee Students at Sophia University  
with Special Reference to Word Association Test ..... Felix LOBO, Yo MATSUMOTO

## NUMBER 18 (1987)

- Conversational Code-switching in Japanese/English ..... Shoji AZUMA  
What Facilitates Reading Comprehension in EFL? ..... Tetsuro CHIHARA, Toshiko SAKURAI  
Politeness Strategies In Requesting and Offering ..... Saeko FUKUSHIMA, Yuko IWATA  
Japanese Students' Use of Communication Strategies in Written Production ..... Kinue HIRANO  
Yes, I agree with you, but ... :  
Agreement and disagreement in Japanese and American English ..... Virginia LOCASTRO  
Foreigner Talk in Japanese: A Comparison of Ellipsis of Particles and Noun Phrases  
between Foreigner Talk and Speech to Native Speakers ..... Hiroko ONAHA  
Item Difficulty of English Language Tests for Japanese Students: The Rasch Model Calibration  
..... Kenji OHTOMO, Hiroshi ASANO, Tamaki HATTORI, Morio YOSHIE  
The Process of Reading: Elaboration or Distortion? ..... Masashi NEGISHI  
An Experimental Study of Intelligibility of English Spoken by Non-Natives  
..... Mineo SUENOBU, Kazuo KANZAKI, Shigeru YAMANE  
The Structural and Functional Approaches  
in Teaching English to Japanese Learners of English ..... Kiyoshi TAJIMA  
Eye-Voice Span of Foreign Language Learners ..... Masao TAKAHASHI

## NUMBER 19 (1988)

- A Study of the Imperative with the Overt Subject ..... Keiko ABE  
Universal Processing of Relative Clauses by Adult Learners of English ..... Chieko KAWAUCHI  
Testing Reading Skills-What the Students Report ..... Hitomi MASUHARA  
Constraints on the Representation of Ordered Events:  
Text Evidence from English and Japanese ..... Gary D. PRIDEAUX, Takashi YOSHIDA  
An Examination of the Monitor Model ..... Hiroshi SHIMATANI  
The Learning Order of English Grammatical Morphemes  
by Japanese High School Students (1) ..... Tomohiko SHIRAHATA  
Assessment of the EFL Learners' Dictionary Using Skills ..... Yukio TONO  
Fast Reading Proficiency of Japanese Students ..... Akio YABUCHI

### BOOK REVIEW: *Research Design and Statistics for Applied Linguistics*

- by Evelyn Hatch and Hossein Farhady ..... Junsaku NAKAMURA

NUMBER 20 (1989)

- Relationships Between Oral Performance  
and Written Performance of Japanese Learners of English (1) ..... Kazuko FUJIMORI  
A Study of the Measurement of EFL Writing  
— Can We Specify an Analytic Scoring Item Which Shows High Correlation With Impressionistic Scoring  
..... The JACET Study Group on the Evaluation of EFL/ESL Writing (2)  
Native and Non-Native Speaker Evaluation of Non-native English Students' Language Production (1)  
..... Takashi MATSUNAGA, Mark CAPRIO  
A Quantitative Study on the Use of Personal Pronouns in the Brown Corpus ..... Junsaku NAKAMURA  
Test-free Person Measurement in Tests of English for Japanese Students  
..... Kenji OHTOMO, Hiroshi ASANO, Tamaki HATTORI, Morio YOSHIE  
NP Order in the Sentence and Surprise Implication ..... Masatoshi TABUKI  
Reading Universals Hypothesis and Japanese EFL Readers (1) ..... Junichi YAMAZAKI, Kiyomi YOSHIZAWA

NUMBER 21 (1990)

- Avoidance of Relative Clauses by Japanese High School Students ..... Yukie AKAGAWA  
The Judgment of Noun Countability by Japanese College Students:  
Where Is The Difficulty? ..... Mitsuru HIKI  
Facilitating Learner Interaction: The Role of Proficiency Level in Grouping  
..... Keiko HIROSE, Hiroe KOBAYASHI  
Learning Strategies Research: Historical Overview and Critical Issues ..... Hiroyuki IZAWA  
Formulaic Speech and Creative Language In Child L2 Acquisition ..... Chieko KAWAUCHI  
Learner Preferences for Different Defining Styles in EFL Dictionaries ..... Daniel HOROWITZ  
Cross-Cultural Rhetorical Differences  
in Letter Writing: Refusal Letter and Application Letter ..... Taeko SATO  
BOOK REVIEW: *Reading, Schema Theory and Second Language Learners*  
by S. Kathleen Kitao ..... Machiko ACHIBA

NUMBER 22 (1991)

- A Study of the Collocational Restrictions on Get by Japanese ESL Learners ..... Kurumi HIKI  
The Effect of Mode of Discourse on Objective Measures of EFL Proficiency  
in Japanese University Students ..... Kinue HIRANO  
Cross-Cultural Communication and Conversational Style: A Case of Interruption ..... Kumiko MURATA  
The Relationships among Genres in the LOB Corpus Based upon  
the Distribution of Grammatical Tags ..... Junsaku NAKAMURA  
"Action Knowledge" Through Communicative, Process-Oriented Interaction in the EFL Classroom  
--- Some Issues in Douglas Barnes' *From Communication to Curriculum* ..... Keiko NONAKA  
An Inductive Analysis of English Language Videos  
for the Japanese University Classroom ..... Jay M. PYSOCK  
A Study of Second Language Communication Norms ..... Hiroko TAJIKA, Hisae NIKI  
Foreigner Talk as Audience Design ..... Yoshiki YOKOYAMA

### (3) 月例研究会

1971年4月8日 研究企画委員の勉強会（世話人 五十嵐康男、田島穆、久泉鶴雄氏）として始まる。その後、委員会組織となり関連雑誌、新聞に予告を出すとともに 関東甲信越地区の会員に連絡している。夏期セミナー・大会などの時期をのぞき毎月最終土曜日に定期的に研究会が開かれている。発表者、所属大学、題目は下記の通り。

第67回(1981.11.21): Charles Scott (Wisconsin Univ.) 'On the 'Best Method' of Learning a Foreign Language'

第68回(1982. 1.30): 森戸由久 (東京電機大学)  
'Notes on Current British English and American English'／升川 潔 (I C U)  
'What the Communicative Approach Meant to Me'

第69回(1982. 3.20): Samuel Shepherd (North Pacific College) 'Cultural and Linguistic Background Knowledge Necessary to English Teachers'

第70回(1982. 4.24): 中田清一 (青山学院大学)  
「文法理論と抽象記号——英語の疑問文をめぐって——」

第71回(1982. 5.29): 中村 敬 (成城大学)  
「ウェールズにおける言語問題」

第72回(1982. 6.26): 杉田 洋 (東京学芸大学)  
「ミクロネシアの英語教育と母国語教育」

第73回(1982. 7.31): Bernard Choseed (Georgetown Univ.) 'Impressions of English Language Teaching in the People's Republic of China and the Philippines'

第74回(1982. 9.25): 谷本誠剛 (静岡大学)  
「英語から日本語(文化)へ——いま一つの『国際人』教育」

第75回(1982.11.27): 小島義郎 (早稲田大学)  
松田徳一郎 (東京外国语大学) 「ラジオ英語講座を担当して」

第76回(1983. 1.29): 梶木隆一 (明星大学)  
「学外の英語学力検定制度—実用英語検定

試験について—」浅野 博 (筑波大学)

「筑波大学の英語検定制度」

第77回(1983. 3.26): 山崎真稔 (玉川大学)

「オーストラリアの英語」／五十嵐康男(成城大学)「日本人にとって必要なイギリス英語—特にロンドンについて—」

第78回(1983. 4.30): 吉田研作 (上智大学)

「日本人話者の英語音韻習得に関する研究」  
笠島準一 (上智大学)「会話行為分析の考え方とその応用」

第79回(1983. 5.28): John Oller (Univ. of New Mexico) 'Recent Development in Language Testing'

第80回(1983. 6.25): Tazuko Monane (ハワイ大学)「英語教育への提言—日本語教育の立場から—」／今村茂男(青山学院大学) 'College English—Why and How?'

\*特別講演会(1983. 7.24): William Labov (Univ. of Pennsylvania) 'Recent Developments of Sociolinguistics in U.S.'

第81回(1983. 7.30): John Fanselow (Columbia Univ.) 'Recent Trends in the TEFL of the United States'

第82回(1983. 9.24): 楠瀬淳三 (上智大学)  
「オーストラリアの英語と文化」／島岡 丘 (筑波大学)「最近の音声学・音韻論—U C L Aで学んだこと」

第83回(1983.10.29): 清川英男 (和洋女子大学)  
「J A C E T 基本語第二次案について」／淀縄光洋(都立教育研究所)「中学・高校・大学の英語教育における語彙の関連について」

第84回(1983.11.26): 成田成寿 (大妻女子大学)  
「大学の一般教育の英語」川澄哲夫 (慶應義塾大学)「鎖国時代の日本人の英学体験」

第85回(1984. 1.28): 岡田 啓 (関西外語大学)  
「コンピューター利用による英語研究—現状と展望」

第86回(1984. 3.31): 金谷 憲 (東京学芸大学)  
「Error Analysis とその教育的意味」

- 第87回(1984. 4.28): G. Graziano (上智大学)  
 'Simplifying Technological Applications to Language Acquisition' / 田島富美江(東京立正女子短期大学)  
 「視聴覚教具の内的イメージに及ぼす影響——英語学習との関連において——」
- 第88回(1984. 5.26): 村田 年(千葉大学)  
 小谷悠紀子(東京電機大学) / 吉田研作(上智大学) シンポジウム「学生にやるきをおこさせる英語の授業」
- 第89回(1984. 7.28): Derek Bickerton (Univ. of Hawaii) 'Japanese Immigration and Contact Language Phenomena in Hawaii'
- 第90回(1984. 9. 1): Michael Garman (Univ. of Reading) 'Recent Developments in Language Acquisition'
- 第91回(1984. 9.29): 天野一夫(大妻女子大学)  
 「Speech 学科創設へ」/近江 誠(南山短期大学)「Oral Interpretation…音と心と身体による英語教育…」
- 第92回(1984.10.27): 神保尚武(早稲田大学)  
 「アメリカにおける最近の英語教育理論の動向」/平野絹江(新潟県立女子短期大学)  
 「Context Clue の活用と未知語類推について」
- 第93回(1985. 1.26): 池上恵子(成城短期大学)  
 「片仮名語と英語語彙学習」/伊村元道(玉川大学)「英語教育における語彙指導について」
- 第94回(1985. 3.30): Jeffrey B. Jones (横浜国立大学) 'Error Evaluation' / 久泉鶴雄(大妻女子大学)「一般性と非一般性を表す現在分詞の前置修飾」
- 第95回(1985. 4.27): 三宅 鴻(法政大学)  
 「ハロルドE. パーマーの現代的再評価」/隈部直光(大妻女子大学)「パーマーと日本の英語教育」
- 第96回(1985. 5.25): 田中茂範(茨城大学)  
 「Lexical Core の英語教育における示唆」/吉田研作(上智大学)「Communicative Approach の Reading 指導への示唆」
- \*特別講演会(1985. 7.27): Daniel P. Dato (Georgetown Univ.) 'Neurolinguistics Aspects of Bilingualism and Second Language Learning' / David Crystal (前 Univ. of Reading) 'Current Problems in English Usage'
- 第97回(1985. 9. 7): Reoul N. Smith(Northeastern Univ.) 'Lexical-Semantic Relations and Semitic Primitives'
- 第98回(1985. 9.28): 阿部 一(独協大学)  
 「基本動詞を手掛かりにした文法指導の試み」/星野幸子(大東文化大学)「英語読解過程の分析と英語教育への応用」
- 第99回(1985.11.30): 村川久子(国際武道大学)  
 'Japanese Recognition of English Sounds from Phonetic Aspects' / 佐藤 寧(明治学院大学)「語彙音韻論」
- 第100回記念月例研究会(1986. 1.18): 井上尚美(東京学芸大学)「大学生への読解指導—実践的文体論への試み」/Felix Lobo(上智大学)「二重言語と文化—帰国子女の調査」
- 第101回(1986. 3.29): 野中慶子(東海大学)  
 「Halliday & Hassanの枠組に基づくReference 研究とその英語教育における示唆」/武井信義(立教大学)「実践的音声学を目指して—私の歩んだ道—」
- 第102回(1986. 4.26): 鈴木 博(東京大学)  
 「英語らしさとプロソディ」/高橋作太郎(東京外国语大学)「大学生に教える文法について」
- 第103回(1986. 5.31): D. Hough (国際コミュニケーション研究センター) 'Curriculum Development for College Students' / 中地克子(東京外語専門学校)「コミュニケーション的な英語教育とカリキュラム」
- 第104回(1986.6.28): 高島敦子(青山女子短期大学)「日本語の非相互性について—英語との比較考察」/John T. Dorsey(日本大学) 'Teaching English, Learning Japanese'
- 第105回(1986. 9.27): 朝尾幸次郎(東京外国语大学)  
 「日米のコミュニケーション行動の比較」/清水由里子(独協大学)

- 「『外国語教育に関する学生の実態調査報告』から」
- 第106回(1986.10.25): 田部 滋(筑波大学)  
「英語の談話構造: 結束作用について」／中島平三(東京都立大学)「変形文法と談話文法の接点」
- 第107回(1986.11.29): 清川英男(和洋女子大学)  
「リーダビリティ研究の最近の動向」／大島真(都留文科大学)「リーディング研究—ハリディー理論と談話(文学)分析」
- 第108回(1987. 1.31): 門井昭夫(小学館辞典編集部)「辞書と読者」／村田 年(千葉大学)  
「単語の意味と辞書の記述」
- 第109回(1987. 3.28): 橋内 武(ノートルダム清心女子大学)「'the' から『ザ』へ」／田辺洋二(早稲田大学)「『カタカナ英語』考」
- 第110回(1987. 4.25): 佐藤妙子(鶴見大学)  
「Writingの構造と指導について」／森住 衛(大妻女子大学)「Pidgin English の簡潔性 Esperantoとの対比を中心に」
- 第111回(1987. 5.30): Kenneth Chastain(Virginia Univ.) 'The Listening Process'／Lee, Kok Cheong (National Univ. of Singapore) 'Language and Society with Reference to Singapore, Southeast Asia'
- 第112回(1987. 7.25): Paul Angelis(Southern Illinois Univ.) 'The Setting of Objectives in EFL and ESL Situations'／Louis Arena (Univ. of Delaware) 'Trends in Language Testing'
- 第113回(1987. 9.26): Gerhard Nickel (Stuttgart Univ.) 'Contrastive Linguistics and EFL Teaching'／W.J.Herlofsky(千葉大学) 'The Japanese pronoun *jibun* and its English equivalents'
- 第114回(1987.11.26): 高橋富男(世田谷区立尾山台中学校)、緑川日出子(都立駒場高等学校)、伊部 哲(専修大学)「教育養成: 教育実習の問題点」
- 第115回(1988. 1.30): 浜田盛男(アメリカ・カナダ大学連合日本研究センター)「英語母国語使用者の日本語に表れる英語的特徴」
- Takahiko Hattori(日本橋女学館短期大学) 'Characteristics Found in Eye Behavior between Japanese and Americans'
- 第116回(1988. 3.26): 伊藤克敏(神奈川大学)  
「発達心理言語学と外国語教育」／Joseph F. Kess (Univ. of Victoria) 'From Syntactic Analysis to Discourse Analysis: The Contribution of Psycholinguistic Research'
- 第117回(1988. 4.30): 藤森和子(就実短期大学)  
「ナチュラル・アプローチの諸問題」／Minoru Shimozaki (Dokkyo Univ.) 'Skeletonization and Communicative Competence'
- 第118回(1988. 5.28): JACET 海外資料研究会  
「自由英作文の評価方法について」
- 第119回(1988. 6.25): Takashi Shimaoka (Tsukuba Univ.) 'J.C.Wells's Phonetics and Problems for Japanese Students'／Michael Leggett (Tsukuba Univ.) 'Crosscultural Communication in the Classroom: A Foreign Teacher and Japanese Students'
- 第120回(1988. 7. 4): Rod Ellis 'Classroom Second Language Acquisition'
- 第121回(1988.10.29): 大石五雄(成蹊大学)  
「アメリカ南部方言と英語教育」／長谷川潔(横浜国立大学)「大学読解教材としての The Story of English」
- 第122回(1988.11.26): 中島章夫(元文部省大臣官房審議官)「国際化と英語教育のあり方」  
大竹 清(福井高等専門学校)「コンピューターの利用による英語教育」
- 第123回(1989. 1.28): 長谷川瑞穂(東洋女子短期大学)「Integrated program(カールトン大学 ESL)と各能力の評価について」  
牧 雅夫(早稲田大学)「ベーシック・イングリッシュと英語教育」
- 第124回(1989. 3.24): 伊部 哲(専修大学)  
「和文英訳からの解放」／福原和子(東京女子短期大学)「聴解のためのスキルを養成する授業」
- 第125回(1989. 4.22): Michael Long (Univ. of Hawaii) 'Second Language Acquisition'

- Research: Some Implications for Language Teaching' Charlene Sato (Univ. of Hawaii) 'Discourse-Based Pedagogical Grammar'
- 第126回(1989. 5.27): 神保尚武(早稲田大学)  
「インプット理論を批判する」／佐藤史郎  
(跡見学園女子大学)「能力測定を志向した  
大学入試と英語教育」
- 第127回(1989. 6.12): Thomas Scovel (San Francisco State Univ.) 'The Role of Attention in Language Learning'
- 第128回(1989. 7.22): 小池生夫(慶應義塾大学)  
「最近の我が国の英語教育政策と大学英語教  
育」
- 第129回(1989. 9.17): Roderick A. Jacobs (Univ. of Hawaii) 'Pedagogic Grammar and Modern Linguistic Theory'
- \*特別講演会(1989.10. 7): Robert Lado (Georgetown Univ.) 'My Half Century Progress in Methods'
- 第130回(1989.10.28): 島岡 丘(筑波大学)  
「英語教育—発音指導の留意点—」／大坪一  
夫(筑波大学)「日本語教育と英語教育」
- \*特別講演会(1989.11.17): John C. Wells (Univ. of London) 'A New Dictionary of English Pronunciation'
- 第131回(1989.11.25): 笠島準一(上智大学)  
「Integrative Tests の問題点」／森戸由久  
(創価女子短期大学)「テスティングの諸問  
題—リスニング能力と文法知識との関係—」
- 第132回(1990. 1.27): 岩崎暁男(東京電機大学)  
「大学生のもつステレオタイプに関する日米  
比較」／西田ひろ子(静岡県立大学)「異文  
化間コミュニケーション」
- 第133回(1990. 3.31): 松崎洋子(鶴見大学)  
「言葉の理解から作品の理解へ—Dinner  
at the Homesick Restaurant (Anne Tyler)  
を用いて—」／John J. Nissel (Sophia Univ.)  
'Teaching English through Literature'
- 第134回(1990. 4.28): 古谷千里(長岡技術科学  
大学)「CALL の最近の動向について」／  
見上 晃(東洋女子短期大学)「P D P モ  
デルとヒアリング」
- 第135回(1990. 5.26): 菅原安彦(国土館大学)  
「聞き取りのプロセスに則した教材の選び方」  
／吉岡元子(国際基督教大学)「本学におけ  
るリーディングの教育」
- 第136回(1990. 6.30): Daniel Bisgaard (Nihon Univ.) 'Humor in Sanskrit Literature and American Literature' / Hideshi Sato (Showa Women's Univ.) 'English as a World Language & Learning of English in Japan'
- 第137回(1990.10.27): Kensaku Yoshida (Sophia Univ.) 'Levels of Conversation and What We Can Teach' / Hideaki Kan (Seitoku Univ.) 'How to Generate Peer Interactions'
- 第138回(1990.11.24): 平賀正子(放送大学)  
「認知比喩と比較文化」／前沢君恵(武蔵野  
音楽大学)「アジアの英語から—台湾」
- 第139回(1991. 1.26): 國吉丈夫(千葉大学)  
「英語授業でビデオをどのように活用するか」  
／清川英男(和洋女子大学)「実証的研究  
論文の読み方、書き方」
- 第140回(1991. 3.30): Tadaaki Kato (Kyorin Univ.) 'A Viewpoint on English Education in the Company' / Ann Jenkins (Nishi-Tokyo Univ.) 'Poetry in the English Language Classroom'
- 第141回(1991. 4.27): Dennis E. Schneider  
(Univ. of Tokyo) 'Extensive Reading'  
/ Yoshiko Aizawa (Tokyo Univ. of Art & Design) 'Analytical constructions — delexical use of common verbs'
- 第142回(1991. 5.25): 秋山高二(山梨大学)  
「日米 TV 広告の比較」／高橋みな子(名古  
屋短期大学)「'lady' は性差別語か—  
英語における男女のペアについて」
- 第143回(1991. 6.29): 田中慎也(文教大学)  
「大学審議会答申と JACET の課題」／森住  
衛(大妻女子大学)「大学審議会答申およ  
び改正、大学設置基準の解釈と対策」
- 第144回(1991. 7.24): John Sinclair (Univ. of Birmingham) 'Lexical Items and Lexical Sets'

- 第145回(1991. 9.28): 矢野安剛(早稲田大学)  
 'Critical Linguistics' / Ron While (Univ. of Reading) 'Write Beyond the Limit'
- 第146回(1991.10.26): 中尾正史(神奈川大学)  
 「英文読解とリズムの関係」/杉本豊久(成城大学)「現代英語の変異性再考——ビジン化、クレオール化現象の観点から」
- 第147回(1991.11.30): 高橋正人(茨城高専)  
 「直喻(Simile)のおもしろさ——強意的直喻の特徴、由来など」/Edwin Thumboo (Univ. of Singapore) 'New Literature in English'
- 第148回(1992. 1.25): 上村妙子(明海大学)  
 「日本人英語学習者の物語文創作にみられる

revision の分析」/Robert Gray (Weseda Univ.) 'Peer Error — Correction in EFL Composition: Outcomes and Attitudes'

- 第149回(1992. 1.28): David Brazil (Univ. of Birmingham) 'Discourse Intonation'
- 第150回(1992. 3.28): 梶田優(上智大学)  
 「動的な文法観の基盤」

記録作成に当たって村田年前委員長、大島真元委員長にお世話になった。現在委員は相沢佳子、神保尚武、笠島準一、清川英男、小谷悠紀子、前沢君恵、三好重仁、村田年、田島穆、加藤忠明、楠瀬淳三、今永巖、準委員 中尾正史。

(相沢佳子・今永巖)

## (4) 夏期セミナー委員会

### 1. 目的と歴史

夏期セミナーがどうして始まったかは、「20周年記念誌」で芹沢栄先生が記されているのを参照されたい。1967年にフルブライト委員会の好意により発足して以来1992年までに満25年間の歴史を持つ。

その目的は(1)留学経験のない若い大学英語教員に English Village 方式で英語を使って生活することにより Oral Practice のチャンスを与える。(2)中学・高校の英語教員を教育する大学の英語教員の研修により日本における英語教育の発展に貢献する。(3)特に、文学専攻の大学の英語教員に教授法に関心をもたせる、ことであった。

1967年の第1回から1991年の第25回まで参加者延べ1,200名、そして現在の JACE T の主要な会員がそこから育っていった。日本の英語教育と JACE T の発展に確実に貢献したと言える。

### 2. 運営と開催地

夏期セミナーと八王子の大学セミナー・ハウスの関係は特記する必要がある。セミナー・ハウスが25年間にわたり示した好意に心から感謝したい。過去25回のうち19回を八王子で開催したので「八王子セミナー」の別称がある。残り6回

*23 (1989)*  
 のうち、第11回(1977)第20回(1986)はハワイ大学、第18回(1984)は JACE T 関西支部が担当し、京都御車会館、第21回(1987)はシドニー大学、第22回(1988)はケンブリッジ大学チャーチル・コレジで開催し、第26回(1992)もケンブリッジ大学ダウニング・コレジ開催した。第1回は田中春美氏を事務局長としてフルブライト委員会の財政的援助を全面的にうけて開始された。第2回から第10回までは CCEJ, GECT, 学術振興会、Encyclopaedia Britannica, パエディアなどの経済的援助をうけた。だが第11回以降は日本が豊かになつたので財政的自立を求められ、4回にわたり赤字となつた。しかし、アメリカの後援は全面的に打ち切られたのに対しイギリスが British Council による講師派遣旅費を第25回まで援助して下さり感謝している。また毎回有志が無償で事務局を引き受け、合宿により、学習・研修とともに参加者の親睦をはかつてきた。第18回の京都セミナーの赤字に際し、JACE T一般会員に募金を求めたところ、必要金額の2倍以上集まり、第19回以後の基金になったことも忘れられない。それほど JACE T 一般会員の熱烈な支持を得ていたことが証明されたのである。

### 3. 開催記録

- 第1回から第15回までは「20周年記念誌」に記録されているのでそれ以後を記載する。
- (1)テーマ (2)主任講師 (3)その他の講師 (4)参加者数 (5)事務局長 (委員長)
- 第16回(1982.7.20~8.1) (1)Humanistic Communication (2)John Ross (3)Bernard Choseed, Erich Berendt, Edward Quackenbush (4)26名 (5)森戸由久
- 第17回(1983.7.26-8.5) (1)Socio.linguistics, and Teaching Methods (2)William Labov, John Fanselow (3)La Ray Barna, Teresa Labov, Fred Peng, 井手祥子、笠島準一、大友賢二、竹蓋幸生、追村純男 (4)33名 (5)大島真
- 第18回(1984.7.22-20) (1)Testing (2)John Oller, Jr, Derek Bickerton (3)Yvonne Bickerton, Danny Steinberg, Philip Williams, John Stoops, 豊田昌倫、辻井準一、駒井明 (4)36名 (5)多田稔
- 第19回(1985.7.24-30) (1)Applied Linguistics (2)David Crystal (3)Miho Steinberg, Danny Steinberg, Erich Berendt, 竹蓋幸生 (4)27名 (5)杉本豊久
- 第20回(1986.7.28-8.15) (1)ハワイ大学 TESOLセミナー (2)Kathleen Bailey, Thomas Scovel, Douglos Brown, Jane Power, Lynne Henrichsen. (3)Jim Cummins, Martha Pennington, Ted Plaister, Francis Johnson, Lynne Hansen (4)40名 (5)松山正男
- 第21回(1987.8.16-21) (1)8th World Congress of AILA (2)Wilga Rivers 他 (4)118名 (5)矢野安剛
- 第22回(1988.7.31-8.5) (1)Phonology, TESOL (2)John Wells, Thomas Scovel (3)武井信義、松野和彦、竹蓋幸生、島岡丘 (4)59名 日本余暇文化振興会と共に (5)神保尚武
- 第23回(1989.7.29-8.5) (1)English as an International Language (2)Sir Randolph Quirk, Gabriel Stein, Gillian Brown, David Crystal, Geophrey Leech, Peter Mathews, Derek Brewer, David Brazil, John Trim, Keith Morrow, Don Porter, Peter Hargreaves, Alan Maley (4)ケ

ンブリッジ・セミナー 63名 (5)神保尚武  
第24回(1990.7.30-8.5) (1)Cross.Cultural Communication and Language Teaching (2)Thomas Scovel, J. Hoffer (3)Erich Berendt, 小池生夫、佐藤秀志 (4)31名 (5)神保尚武  
第25回(1991.7.29-8.4) (1)Interactive Language Teaching and Communicative Competence (2)Wilga M. Rivers, Alan Maley (3)鈴木博、大友賢二、田中慎也 (4)32名 (5)上地安貞

### 4. 問題点と展望

夏期セミナー開催の目的であった3つの項目に過去25年間に変化がおき、いまや再検討を迫られている。(1)の英語教員養成に国家統制が強化され、教育系大学院の整備が整い、かつてのオープン制からクローズ制に移行した。その結果、教員養成を実質上担当する大学や教員の少数・専門化が進行している。(2)は1970年代から日本の経済力の向上とともに、大学英語教員の海外研修の機会が増大し、夏期に英米の大学や学会の研修に参加する者が増え、他方JACECTは寄付や援助を受けることが困難となり、若い人を優遇して参加してもらうことができなくなった。(3)の教授法にたいする関心は大綱化によりますます重視されつつあり、JACECT教育委員会が取り組んでおり、その面で、夏期セミナー的合宿は必要とされるであろう。

第18回以後は経済的面でも、参加者数でも、毎年これで最後かと覚悟し、委員の奉仕と参加者の熱意で現在まで支えられてきた。第26回はニコルズ氏の協力で思い切ってケンブリッジ大学で開催することに踏み切った。

過去25回の成果を振り返り、特に暖かい人間関係の育成を思う時、新しい工夫と努力で夏期セミナーが第27回(1993)以後も存続し、JACECTとともに21世紀まで生き残り、存在意義を堅持できることが期待されている。

(上地安貞・松山正男)

## (5) J A C E T 通 信 委 員 会

### I. 『通信』のあゆみ

本『通信』は1969年4月に発刊以来、会員相互に新しい情報や知識・見解を伝え交換する場所として、また結果として学会の足跡を記録する史的資料として、貴重な役割を担ってきた。その足どりは、いわば“ホップ・ステップ”を経て今日に至っていると言つていいだろう。

#### 1. ホップ期（創刊から学会創立20周年まで）

初代編集長の田中春美氏をはじめ諸委員の御尽力により、情報の発信のほかに「英語教育時評」「誌上討論」「私の授業」等の多様なコラムが設けられ、いたるところに発展期の学会の熱く燃えさかる情熱がほとばしっている。この時期のさらに詳しい事情は、『創立20周年記念誌』の田中駿平氏の記事を御覧いただきたい。

#### 2. ステップ期（21年目から奥津委員長時代）

1983年4月前委員長浅野博氏の後を継いだ奥津文夫氏は、第1回目の編集委員会から、誌面の内容の一層の多様化と充実を期して驚嘆すべき手腕とリーダーシップを發揮した。「巻頭言」や「JACET 時評」「支部便り」をはじめ、今日に受け継がれている諸コラムを固定したのは、氏の発想に負うところがまことに大きい。また親しみ易い誌面づくりを図って授業風景の“突撃レポート”や会員の懇親パーティーの記事、あるいは写真や広告が掲載されたのも、この時期である。

このような変革が可能になったのは、委員長の豊かなアイディアと広い人脈によるものと見てもよい。だが、編集会議や出張校正の帰り途に、氏が案内する旨味処や綺麗どころの居並ぶ店にお伴する機会に恵まれた、若い委員たちの情熱（？）に負うところも少なくなかった。

奥津氏が敷いたレールの上を、本格的に走り始めて本『通信』のスタイルをゆるぎなきものにしたのが、古川尚子委員長を中心とした時期（1984～85）である。新たに決った学会エンブレムが最終ページを飾ったおしゃれな号（No.56）や、全ページ英文号（No.58）が軌道に乗ったのも、この時期だった。古川委員長の円満な人柄の前で、

Noと言える委員は一人もいなかった。

#### 3. ジャンプ期（5年に及ぶ竹前委員長時代）

本務校での激職をこなしながら、本誌と本委員会を見事にオーガナイズしたのが竹前文夫委員長だった。わけても注目すべきは、全国の支部の委員の視野や意見を大幅に導入したことだろう。かくて「巻頭言」等のレギュラー記事の執筆者の選定を各支部に依頼したり、委員の全体会議をスタートさせ（88年）一層の衆知を集めることなどが、可能になった。氏はまた、本部との連係や委員会綱領作製等の難問を爽やかに決着させ、本委員会の基盤整備をほぼ完成させたのである。多忙極まりない中で、氏は高い識見を示しつつ、なお、釣りから花にいたるまで（そして当然ダンゴも）、語るところは自在で、委員たちは一様に新たな逸楽に耽りながら愉しく仕事を進めていた。

氏の激務の様子を察して、1991年、委員会は筆者にバトンを委ねた。幸い副委員長をはじめ有能で心優しい委員諸兄姉に恵まれているものの、今なお、カラオケで歌の上手い人の後にマイクを握らされ、茫然としているような思いでいる。委員の方々はもとより会員の皆様の益々の御高尊を心から願っている。

### II. 『通信』主要記事・執筆者一特に20周年以降

号 数	卷頭言執筆者	主要記事
年. 月	JACET時評	
1	小川芳男	星山三郎、英語教育サロン
11	朱牟田夏雄	“JACET 10年のあゆみ”
12-22	22・天野一夫	誌上討論：英語教育の目的
28	大谷泰照	改善懇特集：小川、芹沢ほか
34	梶木隆一	“JACET 活動の転機”
36-39	小川芳男	私の授業：小池生夫ほか
40	小川芳男	“創立20年に際して”
43	田辺洋二	“81年より82年へ”
44	(82年10月)	創立20周年記念事業報告
45	小川芳男	21回全国大会報告
46	田辺洋二	“昭和57年度の JACET”

47 83.6	安藤昭一 五十嵐康男	海外情報:島岡ほか、大学情報、教室訪問－早稲田大(全20頁)	66 88.3	T.Ono	Activities of Committee、Forum, OMLL Cornel Univ.
48 83.9	長谷川松治 浅野博	22回大会案内、中部支部創立、投稿、私の授業(全40頁)	67 88.6	梅田巖 田中駿平	朱牟田先生追悼:小川ほか、挨拶:鈴木、
49 83.12	原沢正喜	支部創立に向けて:中四国・九州沖縄、教室訪問一慶應大	68 88.9	片山嘉雄 岡野哲	事務所の活動・仕事、紀要のできるまで
50 84.2	田中春美 松山正男	シリーズ:60年度からの大学教養課程の英語(1)	69 88.12	藤田孝 中村浩路	瀬戸大橋を渡った JACET、英語教育と私－長谷川松治
51 84.6	片山嘉雄 奥田夏子	挨拶:國吉、委員会活動計画、英語教育と私－芹沢栄	70 89.3	T. Yasuda M. Ike	Poem:C.Lim, Showa Women's Institute Boston, On LEFD
52 84.9	佐藤秀志 上田明子	23回大会案内、教員養成問題について、AILA加盟報告	71 89.6	岩城禮三 村上隆太	挨拶:森住、英語教育改革の行政措置、支部企画(1)
53 84.12	梶木隆一 安藤賢一	(=会長挨拶)、小川芳男、英語教育と私－天野一夫	72 89.9	林哲郎 関宮子	星山先生追悼:梶木ほか、第1回応用言語学全国大会
54 85.3	小池生夫 比嘉正範	60年度からの大学教育課程の英語(5)、役員人事	73 89.12	直井豊 岡田伸夫	報告:役員会・大学審議会のヒアリング
55 85.6	林哲郎 田島穆	シンボルマーク決定、事務所移転	74 90.3	H. Sato E. Brendt	JACET Summer School in Cambridge, Akenohoshi Magazine
56 85.10	田中春美 多田稔	放送大学の英語、英語教育と私－小川芳男	75 90.6	井門義男 船津好平	全国理事会等報告、プレジャーリーディング
57 85.12	伊藤健三 中村道子	山田先生追悼:星山三郎、59年度決算、60年度予算	76 90.9	國吉丈夫 小野原信善	小川先生追悼:梶木ほか各支部より、音声分析機器
58 86.3	F. Lobo	Reports:I.Koike, Opinions from foreign teachers	77 90.12	畠中孝實 八田重雄	原沢先生追悼、JACET 新会則成立、大学審のヒアリング
59 86.6	畠中孝實 吉永光明	挨拶:奥津、外国語教育振興、英語教育と私－星山三郎	78 91.3	R. Iwaki T. Nakamura	CALL in the UK & US, Trialat Kyoto Seika Univ.
60 86.9	安藤昭一 橋内武	第20回夏季(ハワイ大)セミナー報告、北海道支部発足	79 91.6	宮原文夫 浅羽亮一	30回記念大会を迎えて、誌上討論－海外英語研修
61 86.12	五十嵐二郎 小木野初	25回記念大会:小池、書評欄を新刊紹介欄に変更	80 91.9	池 稔 木村博是	大会報告－役員の異動等、設置基準の改正と英語教育
62 87.3	Y.Nishimura	Report on the 25th Convention, Forum, New Office	81 91.11	30回記念 大会特集号	岩城ほか、講演・シンポジウム・ワークショップ要旨
63 87.6	福田昇八 佐藤一夫	Dr. Rivers の怪我、英語教育と私－清水謙	82 91.12	奥津文夫 大友賢二	挨拶:梶木・小池・田辺、シリーズ<大綱化>(1)
64 87.9	北村正司	報告:夏期(シドニーカンタベリー)セミナー・AILA 国際委員会	83 92.3	K.Cates. S.Okano	Revised Requirements for Accrediting Universities(2) (池内正直)
65 87.12	田辺洋二	シリーズ:私たちの試み(I)、英語教育と私－大浦幸男			

## (6) 大学英語学会賞選考委員会

### 1. 選考委員会

第2代会長小川芳男氏が1977年に学会の活性化のために寄付された百万円を基に「JACET賞」が設けられた。同年5月選考委員会が発足し、委員長に星山三郎氏、委員に田中春美、奥田夏子、井上和子、五十嵐康男、小池生夫、松山正男各氏が委嘱された。その後、田中、井上、五十嵐、小池各氏が辞任し、比嘉正範、羽鳥博愛、天満美智子各氏が加わった。1989年7月に12年間委員長の重責を努められた星山三郎氏が他界され、委員の一部交替があり、1992年4月現在は委員長に松山正男、選考委員会委員長に佐藤秀志、委員に(本部指名)安田哲夫、奥田夏子、浅野博、橋内武、(北海道支部)船津好平(東北支部)畑中孝実(中部支部)菅原光穂(関西支部)福本一(中国・四国支部)小林ひろ江(九州・沖縄支部)吉田一衛の各氏、12名が委嘱されている。

### 2. 大学英語教育学会賞規約

下記の初期の規約と、現在の規約(省略)とずれがあり、目下調整中である。

1. 本賞は大学英語教育学会賞(略称JACET賞)と称する。
2. 本賞は、わが国における大学英語教育の向上発展に資することを目的とする。
3. 本賞は、英語教育に関する高度の専門的研究、または実践面における活動を通じて大学の英語教育の発展に貢献した者に、毎年1回与えられる。
4. 本賞の選考のために、会長は理事会の意見を徴して選考委員若干名を委嘱する。会長は選考委員会の答申を受け、理事会の承認をえて受賞者を決定する。
5. 本賞の選考の詳細については、別に定める内規による。
6. 本賞に関する事務は、本学会研究企画委員会がこれを行なう。
7. 本規約の改正は、必要に応じて、理事会がこれを行なう。

8. 本規約は昭和53年(1978年)4月1日から実施する。

### 3. 受賞記録

以上の規約と内規に基づき、自己推薦は出来ないこととし、会長・副会長・理事・評議員・研究企画委員の推薦を毎年6月15日に締切り、秋の大会までに慎重・公正な審査のうえ、選考委員の圧倒的多数の支持があった者を受賞対象としてきた。第1回(1979)は『The Teaching of English in Japan』の編集者的小池生夫、松山正男、五十嵐康男、鈴木絃治の各氏に授与された。

第2回(1980)は『英語教育学ハンドブック』(大修館)著書代表垣田直己氏および“JACET Listening Comprehension Form A, Form B”に対し、JACETテスト開発委員会が受賞した。

第3回(1981)はICU言語科研究グループ・代表Linde氏が受賞した。

第4回(1982)は『英語学と英語教育』(大修館)の著者の伊藤健三、著者の島岡丘、村田勇三郎の各氏に授与された。

第5回(1983)は受賞者なし。

第6回(1984)は『ヒアリングの行動科学』等(研究社)の著者の竹蓋幸生氏に授与された。

第7回(1985)は受賞者なし。

第8回(1986)はJACET語彙研究グループが受賞。

第9回(1986)河野守夫氏の諸研究と、『日本人とアメリカ人の敬語行動』(南雲堂)の著者の井出祥子、荻野目綱男、川崎晶子、生田少子の各氏に授与された。

第10回(1988)は『日本語の意味、英語の意味』(南雲堂)の著者的小島義郎氏に授与された。

第11回(1989)は受賞者なし。

第12回(1990)は『英語読解のストラテジー』(大修館)の著者天満美智子氏に授与された。

第13回(1991)は『わが国の英語教育に関する実態と将来像の総合的研究』(代表小池生夫氏)に授与を決定したが受賞の辞退により、受賞者なし。

#### 4. 今後の問題点

JACET賞は選考基準が厳格なので、受賞対象が狭くなる傾向があり、今後はあらたに「大学英語教育功労賞」「教材開発賞」などを新設する

かどうか、検討を迫られている。1993年度から委員長に鈴木博(理事)が担当し、規約を改正し、学界の活性化に役立つよう改革する予定である。

(佐藤秀志・松山正男)

### (7) 応用言語学研究会

#### 1. 応用言語学研究会の沿革

本会はJACETの委員会組織として、1982年に正式に活動を開始した。同年6月19日に上智大学において第1回応用言語学研究会を開催し、次の諸氏が応用言語学の諸相をめぐって講演を行った。講演者と演題は次の通りである。小川芳男「応用言語学研究会発足に当たって」、小池生夫「応用言語学とは何か」、田中春美「海外における応用言語学の現状」、比嘉正範「応用言語学としての英語教育」。講演に続き、小池氏からここに至る経過報告がなされた。

同氏はこのなかで、JACETは応用言語学研究を通じてアカデミズムを高め、国内における言語教育と言語研究に貢献すべきであることを強調した。また、応用言語学研究会は大学の英語教師以外にも開かれたものにし、内外の応用言語学関係の情報の収集、提供、および交換の場とするという提案があった。さらに、近い将来、国際応用言語学会(AILA)との関係を強化したいという意向を表明した。

同年10月23日(於上智大学)にはさっそく第2回研究会を開催し、国広哲弥「日英語対照研究方法論」と寺村秀夫「聴き取り理解における予想の働きと外国语教育あるいは翻訳の問題」の講演を基礎として、活発な討論を行った。以後の研究会の模様は次の通りである。形式は講演をもとにしたフリー・ディスカッションであった。会場はいずれも上智大学であった。

第3回(83年7月2日)鈴木孝夫「国際英語と民族英語」、第4回(83年11月2日)井出祥子「待遇表現の日英比較」、小林祐子「身振り言語の日英比較」、第5回(84年6月30日)安井稔「応用言語学の諸問題」、第6回(84年11月24日)草薙裕「コンピューター言語学」。以上に加えて、

応用言語学研究会は小グループによる月例研究会をもち、さらにJACET全国大会においてさまざまなテーマのシンポジウムやワークショップを主催するようになった。

#### 2. JACETとAILA

JACETは応用言語学研究会のこのような活動を基盤にして、1984年9月に国際応用言語学会(AILA)の加盟国になった。ことのおこりはその数年前にイギリスおよびオーストラリアの応用言語学会会長が来日し、JACETに対してAILAに加盟するように正式に申し入れたことから始まる。

この要請を受けて、加入するかかどうかについては、理事会その他で慎重に検討を続け、日本の応用言語学研究の振興に貢献するのには本学会がふさわしいという結論に達した。すなわち、AILAは英語教育を中心とする言語教育とその関連分野の研究を目標に掲げて発展したことから、JACETと似た性格を中心部分にもっていると判断し、さらには本学会が国際交流をはかることにより、学会の発展に役立つということで、加盟に踏み切ったのである。

加盟の条件として、加盟国は各国一団体であること、会員は1人あたり4スイスフラン(約500円)の会費をAILA本部に毎年納入することなどがあった。その見返りは、AILA News, AILA Reviewの配布、そして世界大会の参加費の軽減などであった。理事会としてはJACET会員全員にこの500円の納入をお願いするわけにいかないので、応用言語学研究会を会員組織として、会員からこの500円に加えて国内の郵送料、運営費などをふくめた、2,000円の会費を頂くこととした。すなわち、JACET会員で応用言語学研究会に参加するメンバーはJACET会費6,000円

に応用言語学研究会会費 2,000円を加え、合計8,000円を支払うこととした。なお、JACET会員以外で応用言語学研究会のみに入会を希望する研究者には4,000円の会費を頂くことにした。こうして入会の募集をしたところ、当初約400名を越える入会があったが、現在は約350名に落ち着いている。

小池生夫副会長（当時）はJACETのAILA参加に臨む姿勢について次のように記している（「JACET通信58」1986年）。

JACET has...extended its activities to an international scale. We are now one of the 38 organizations affiliated with the International Association of Applied Linguistics (AILA) and have organized the Japan Association of Applied Linguistics (JAAL) affiliated with JACET. Since the AILA Board of Trustees in 1984 recognized JAAL as its representative organization in Japan, JAAL holds rights and obligations for the development of research in applied linguistics in Japan...

### 3. JAAL-in-JACET

その後、応用言語学研究会は英語名をJAAL-in-JACETとし、本格的な活動を展開した。委員会は拡大され、JACET各支部からの代表も入り全国的組織となった。86年には毎年1回のJAAL Bulletinの刊行を始めた。また、1987年には、シドニー大学で行われたAILA世界大会に120名の会員が参加し、20名以上が研究発表を行った。さらに、本会担当の小池生夫JACET副会長（当時）はAILAの副会長に選出された。

1989年5月には、AILA国際理事会が東京のJACET事務所で開催された。続いてJACET第1回応用言語学研究会全国大会が青山学院大学（渋谷キャンパス）に於いて開催され、参加者は500名に達した。また、理事会に出席した16カ国代表の多くが研究発表に参加して、さながら国際大会の様相を呈した。本大会のプロシーディングズは『応用言語学研究 1990 I』（和文）とProceedings: Studies in Applied Linguistics 1990 II（英文）と題した2冊本として、リーベル社より1990年に刊行された。

その後、本研究会はJACETを代表して日本

における応用言語学の発展を促進させるために、「JACET応用言語学全国研究会」を定期的に主催してきた。当分の間は、テーマ別の研究会として、主として会員相互の研究成果の交換を目標としている。以下、これまでの活動を記す。

第1回「言語接触」（90年12月1日於青山学院大学渋谷キャンパス）(1) Toshiyuki Doi, "Repidginization?: An Undocumented Case of Language Contact." (2) John Maher, "Philippines Creole: Notes on Food Talk in Chabacano" (3)秋山高二「非言語伝達行動の日米対象研究」講演：野元菊雄「簡約日本語をめぐって」

第2回「中間言語」（91年6月1日於白百合女子大学）(1)萩野博子「英語の音変化と日本人の発音」(2)中野美知子「Assimilation and Accommodation in Interlanguage Lexical Judgements」(3)新村朋美／林ブレンダ「The Acquisition of English and Japanese Demonstratives : This, Thatand Ko, So, A」(4)松浦浩子／岩田祐子「日本人英語学習者の中間言語に見られる transfer の要因について」講演：田部滋「中間言語研究あれこれ」

第3回（91年12月7日於成城大学）「談話分析」(Akiko Ishimaru, "When to Use 'We' and Why?") (2) Yuko Iwata / Seiko Fukushima, "Pragmatic Transfer: The Case of Requests and Offers." (3)上村隆一「日本語談話における言い誤りの分析：ハイパーテディア・コーパスを用いたアプローチ」講演：Erich Berendt, "The Tongue and Its Employment: Implications for Language Teaching."

第4回（92年6月27日於青山学院大学渋谷キャンパス）「現代社会とレトリック」(1)井上奈良彦「日本社会におけるディベートの受容」(2)古岩井嘉蓉子「童話の語りの視点と物語すること」講演：Ronald Wardhaugh, "Rhetoric in Contemporary Society: A Sociolinguistic Point of View."

### 4. 今後の展望

JACETの研究活動はもともと範囲が広く、応用言語学の分野に入るものが非常に多い。応用言語学研究会は、英語関係者以外でもこの分野にかかわる研究者の入会を歓迎している。今後はさ

らに、さまざまな分野の研究者にも積極的に働きかけ、活動をひろげる努力をすることが必要である。JACETがAILAに加盟したこと、本

学会ならびに本研究会は、日本における応用言語学研究の進展のために努力する責任と義務をおつたのである。

(本名信行)

## (8) 教育問題研究委員会

本委員会の前身は英語科教員養成問題検討委員会である。最初は余り人気がなかったようで、JACET通信No.51には「教員養成問題《田辺》組織し直す。関心ある人を広く求める」とある。しかし活動の中身は濃く、昭和58年12月10日瀬戸山文部大臣にあてて「教員の養成及免許制度の改善についての答申」中の英語科の「教科に関する専門教育科目」についての要望書を提出している。ちなみにその当時の委員長は小池生夫現会長である。

昭和60年度から委員会名を教育問題研究委員会と改め、教育問題全般（特に英語教育に関して）をテーマとして扱う委員会となった。

以下は各年度の主な活動内容記録である。

### 〈1985年度（昭和60）〉

委員長：石川祥一（防衛大）

委員：田辺洋二（担当理事）天野一夫、小池生夫、松山正男、國吉丈夫、伊部哲、金谷憲。

活動計画：(1)英語科教員養成のカリキュラム試案の作成

(2)大学の英語担当教員の養成についての研究

活動内容：臨時教育審議会あてに「教育改革についての要望」を提出。

詳細はJACET通信No.55参照。

### 〈1986年度（昭和61）〉

委員長：石川祥一（防衛大）

委員：田辺（担当理事）伊部、金谷、天野、國吉、松山、小池

活動計画：研究テーマ「外国語教育のあり方」

(1)初等教育での外国語教育（英語教育）  
(2)中・高・大の英語教育のあり方

活動内容：臨時教育審議会に「外国語教育振興に

関する要望」を提出。詳細はJACET通信No.59参照。

（ヒアリング出席者）

梶木会長、小池副会長、國吉代表幹事、伊藤健三評議員、大谷評議員

7月5日（土）上智会館にて「外国語教育を考える—英語教育の改善について」の懇談会を開催。

9月19日（金）JACET第25回記念大会にて「日本の外国語教育—未来への展望」のテーマで討論。

### 〈1987年度（昭和62）〉

委員長：森住 衛（大妻女子大）

委員：田辺（代表幹事）、小池、國吉、天野、松山、伊部、行広、田中

活動計画：(1)日本英語改善懇談会参加

(2)中学校、高等学校学習指導要領改訂問題検討

(3)新テスト導入問題検討

(4)教育職員免許法の改正問題検討

(5)教育問題研究委員会を全国組織にする件

(6)外国語教育のあり方を検討

活動内容：10月10日京都産業大学での全国大会において「臨教審答申をめぐって」をテーマにシンポジウムを開催。

### 〈1988年度（昭和63）〉

委員長：森住 衛（大妻女子大）

委員：田辺（担当理事）、小池、國吉、天野、松山、伊部、行広、田中、浅羽

活動計画：(1)教員養成免許制度改革問題検討

(2)中学校、高等学校の学習指導要領改訂問題検討

活動内容：9月24日四国学院大学での全国大会

において「教員養成免許制度は如何にすべきか」をテーマにシンポジウムを開催。

12月10日中島源太郎文部大臣宛に梶木会長及び森住委員長連名で「教育職員免許法の教科(英語)に関する専門科目についての要望」を提出。

本委員会は全国組織の委員会として活動する事に決定。本委員会と改善懇とを併合。

#### 〈1989年度(平成元)〉

委員長：田中慎也(東京女学館短大)

副委員長：浅羽亮一(明海大)

委員：五十嵐(担当理事)

北海道支部：栗原

東北支部：成沢

関東地区：天野、小池、國吉、松山、田辺、浅羽、伊部、森住、行広

中部支部：羽澄

関西支部：沢村、末延

中国・四国支部：門田

九州・沖縄支部：福田

活動計画：(1)本年度テーマ「一般教育課程に置ける外国語科目(英語)のあり方」

(2)アンケート調査

(3)全国大会でのミニ・シンポジウム企画

活動内容：アンケート調査実施(7月29日〆切)

9月22日本委員会全国連絡会を開催

審議事項：イ.改善懇の出席者について

ロ.カリキュラム資料収集の件

ハ.第2回アンケート調査の件

ニ.提言について

9月23日西南学院大学での全国大会において「大学教育における外国語(英語)教育のあり方」をテーマにミニ・シンポジウムを開催。  
(提案者)

福田昇八(熊本大学)

西田亀久夫(元文部省審議官)

大東百合子(明海大学)

#### 第2回アンケート調査実施(10月9日〆切)

10月16日大学審議会大学教育部会のヒヤリングにおいて「大学外国語(英語)教育改革の方策に関する意見」を提言。

(出席者)

小池生夫 副会長 田辺洋二 担当理事

森住 衛 代表幹事 田中慎也 委員長

#### 〈1990年度(平成2)〉

委員長：田中慎也(東京女学館短大)

副委員長：浅羽亮一(明海大学)

委員：五十嵐(担当理事)天野、小池、國吉、松山、伊部、森住、行広、栗原、成沢、羽澄、沢村、末延、上田、門田、小木野

活動計画：(1)第3回アンケート調査

(2)高・大連係についてのシンポジウム企画

活動内容：第3回アンケート調査を実施(10月1日〆切)。

9月7日神田外語大学での全国大会においてシンポジウムを開催：

テーマ「高校・大学の連携を考える」

(提案者)

川名幸雄(全英連会長) 田辺洋二(早稲田大学)

田中慎也(東京女学館短大)

10月16日大学審議会大学教育部会の第2回目ヒヤリングにおいて「大学教育部会における審議の概要(その2)」に関する意見を提出。

(出席者)

小池生夫(副会長)、五十嵐康男(担当理事)

森住 衛(代表幹事)、田中慎也(委員長)

#### 〈1991年度(平成3)〉

委員長：田中慎也(文教大学)

活動内容：「大学設置基準の大綱化」に対応した諸活動。

(田中慎也)

## (9) 教材研究委員会

教材研究委員会は1972年（昭和47年）に発足し、今まで一貫して大学一般教養課程における教材のあり方について研究調査を続けてきた。同時に実践的な仕事として教科書の編集出版も行ってきた。

初代田島穆委員長（最初は原沢正喜理事が委員長を兼ねていた）の時代は揺籃期であり、教材の理想像を求めて「試案」を発表したり、アンケート調査をしたりしていた。

いよいよ具体的にテキストを出版することになり、教材研究委員会は活気に帯び、陣容も次第に充実してきた。1977年に、樋口時弘委員長のもとで *Language and Culture* (のち Book One の出版により Book Two となる) を出版した。幸い多くの大学で採用され、おおむね好評であったと思われる。この第1作は大学中級用として編集したものであるが、実際にはかなり程度が高いとの批評もあった。

奥津文夫氏が委員長となり、今度は大学初級程度をねらって、1980年に *Language and Culture. Book One.* を出版した。幸いこれも広く用いられ、大学における講読用テキストとしての1つのモデルを提供することができた、と言ってもよいであろう。当時は、言語と文化についての多様な文章を集めたテキストは新鮮な印象を学生たちに与えたようである。

また1978年には想を新たにして、*Gems of English Prose and Poetry* (英米詩文珠玉選) を出版した。これはいやしくも大学で英語を学ぶ人達に知っておいてほしい英米文学・文化の精髓を集めめたものであり、大学の英米文学史や英米文学概論の教科書として歓迎された。

次にこれまでの研究調査と教科書の出版から得た情報・知識をもとに1981年に『大学一般教養課程における講読用教科書のあり方』を発表した。

本書は、講読授業の意義、授業方式、言語材料、素材内容、分量と構成、その他注釈、Exercise、教師用指導書にいたるまで、総括的に論述してい

る。特に、言語材料の中の習得語彙については當時何ら具体的なリストがなかったので、よいリストを作るために相当の努力を傾けた。その結果「J A C E T 基本語彙表」を完成することができた。本書における、大学一般英語のテキストについての初めての、総括的な議論は各方面に大きな反響を呼んだ。

この年度の教材研究委員は、古川尚子、原岡笙子、清川英男、栗原久江、楠瀬淳三、松阪ヒロシ、森住衛、中村匡克、奥津文夫、高木道信、田口孝夫、田村文子、田中英史、吉村紀子の14名、顧問は原沢正喜理事であった。

その後、1982年に森住衛委員長のもとで、その中の「J A C E T 基本語彙表」を改訂し、大学教養課程終了時までに習得すべき必要最低限の語彙リストの決定版を作ることになった。そして1983年の9月に『アンケート調査報告——「J A C E T 基本語第2次案』を中心にして出版すると同時に大会においてシンポジウムを開いた。この語彙表は、放送大学、教科書・辞書の編集、入試問題の作成、高校における語彙の指導、その他種々の分野で広く活用されている。

さらに、「J A C E T 基本語第2次案」が真に有用なものかどうかを検証するために、大学用テキスト、高校教科書、入試問題、海外出版社のテキスト、TOEFL・英検など各種のテスト、各種の内外の新聞・雑誌などによって、「第2次案」の Readability を測定し、1984年の大会でシンポジウムを組み、その相当高い程度の有効性を証明した。

1985年に村田年委員長になり、文法を中心とした総合教材の研究と出版をすることになり、全国から準委員を募った。総勢20数名の参加を得て、活況を呈した。同年10月の大会シンポジウムにおいて研究成果を「大学一般教養の英語における教材のあり方——特に文法事項の扱いについて——」として発表した際は、150部のハンドアウトがたちまちなくなってしまった。そして1987

年1月に『教養英語の総合演習——構文理解のために——』(English Workshop) を出版した。予想以上に多くの先生方に使用いただき、大きな反響を得た。

反響の1つとして、1987年6月に中国・四国支部においてこのテキストだけの講演会とシンポジウムが組まれた。

1987年度から1989年度(杉本豊久委員長)の時代はそれまであまりにも突っ走ってきたこともあり、じっくりと反省する機会を得た。English Workshopについてアンケート調査をし、その結果を踏まえて改訂2版を出版した。何とか「JACET基本語2次案」に意味・例文をつけて出版できないものかと何度も、検討したが、委員もそれぞれに忙しくなり、人数も減り、『単語集』出版は一時諦め、「シソーラス別語彙表」「頻度別語彙表」作成の仕事に取り掛かった。

1990年度に高橋貞雄委員長となった。English Workshopは相変わらず多くの方々に使っていただき、その結果の内容に関する意見も沢山いただいた。そこで全国の先生方のご意見とわれわれ

のアイディアを併せて改訂3版を決定版として出した。

杉本委員長より引き継いだ「JACET基本語第2次案」の別冊として「意味のシソーラス別語彙表・使用頻度別語彙表」の出版の仕事も順調に進んでいる。

新しい企画として、リーディング教材の研究と編集に取り組んでいる。広く委員・会員に働きかけて、基礎的な研究を積み重ねながら、最新の言語習得理論、教授法理論を取り入れた教材を世に問いたいと思っている。委員・準委員は多忙な人ばかりであるが、英語教育にかける情熱が人的エネルギーを生み出してくれるものと期待している。

1991年度における教材研究委員は、高橋貞雄、William O'Connor、相澤佳子、村田年、上地安貞、矢田裕士、杉本豊久、谷田恵司、竹前文夫、長谷川瑞穂、石川祥一、宿谷良夫の12名であり、準委員として、井原浩子、中村良廣、大澤ミナミ、佐藤久美子、戸田征男、三好重仁、森戸由久、その他多くの研究企画委員の協力を得ている。顧問は二代目の奥津文夫理事である。

(村田 年)

## (10) テスト研究開発委員会

テスト研究開発の成果については、3つのテスト—JACET-COLTD Listening Comprehension Test Form A, JACET Listening Comprehension Test Form B, JACET BASIC Listening Comprehension Test の作成ばかりではなく、大学入試試験に音声テストを導入する気運を作り出したことがあるといえる。上記の2つのテストは過去20年の間に完成を見たものであり、3つ目のテストは1983年から研究・開発を進め、1989年に作成、利用されている。この3つのテストの受験者は、全国の短大生・大学生を主として1992年3月現在約30万人に達している。

本委員会は1981年度の課題研究として「大学入試ヒアリング実施について—JACET案」を第20回全国大会で発表した。翌年の1982年度も同一課題に取り組み、聴解力テストに関する

調査と実施を行い、同年9月から10月にかけて次の3つの報告書を公表した。

(1)「大学入試における聴解力テストの実施の可能性」、(2)「入試における英語音声テスト—その実態と問題点に関する調査報告ー」、(3)「大学入試に音声テストはなぜ必要か」、であった。これらの報告書の内容を項目のみに絞って述べると、(1)「大学入試における聴解力テストの実施の可能性」、I.大学入試に聴解力テストを導入する気運……つまり「JACET 英語聴解力テスト Form A と B」を実施して、調査・研究にあたった。結果として、日本の英語教育の欠陥が音声面軽視であること、故に現状打開の最も効果的な手段として、大学入試に音声テストを導入する可能性を探る。II.物理的に均一な音響条件を確保……物理的に均一な音響条件を確保し、予想される問題に対処できる

設備について試案を作成した。III. 設備費用の見積……設備を設置する費用の概算（1981年10月付け）を出す。IV. テスト問題録音テープの製作費用概算（共通一次）……大学入試センター内部で複製の場合と外部発注の場合の概算費用。V. 問題点……物理的に均一な音響条件の確保が可能でない場合、その対策として、(1)騒音、(2)事故、(3)聴覚障害者、(4)試験監督者が面倒がることについて、(5)煩雜さの増大、(6)受験生の負担の増加、となっている。(2)「入試における英語音声テスト—その実態と問題点に関する調査報告—」については、I. 調査の目的……大学入試、及び公立高校入試における英語音声テストの実施方法、問題点とその対策。II. 調査協力機関数及び調査期日。III. 調査結果の概要：1. 調査対象、2. 音声テストの実施開始時期とテスト方法、3. 時間配分と配点、4. 実施上の問題点、5. 実施経験者の意見と提案、IV. 調査結果に基づく本委員会の見解……報告書「大学入試における聴解力テストの実施の可能性」で述べた提案にそって、共通一次に音声テストを導入することの必要性と、私立大学がその音声テストの結果を有効に利用できる制度の確立。V. 調査結果……問1から問13までの質問、となっている。(3)「大学入試に音声テストはなぜ必要か」については、まえがきにおいて、「大学入試に英語音声テストを導入すべきであるという声が年々高まってきた。……以下はさらに、大学入試に音声テストはなぜ必要なのかを再考し、本委員会としての見解をまとめたものである、と述べている。その見解は、1. 入試志願者の英語力は総合的、かつ的確に判断しなければならない：a) 言語の本質、b) ペーパーテストの限界、c) 言語テストの常識。2. 大学入試は中学校・高等学校の英語教育に与える大きな影響を考慮しなければならない：a) 高校英語教育の現状、b) 不毛の英語学習、c) 入試への音声テスト導入。3. これから日本人は英語を生きたことばとして学習しなければならない：a) ことばによる国際交流、b) 心と心の国際交流、などである。

この後、1983年から研究・開発に取りかかったのが、従来から利用されている「JACE T英

語聴解力標準テスト」のジュニア版としての「英語基礎聴解力標準テスト」（以下 BASIC テストと呼ぶ）であった。BASIC テストは、天野一夫氏の指導のもとに、小池生夫、松山正男、國吉文夫、大友賢二、鈴木博、原岡笙子、森戸由久、石川祥一の各氏が担当した。1989年2月に完成し、4月より全国の受験者に利用されることとなった。

この BASIC テスト作成にあたってまず行ったことは、1975年以来のテスト・データの分析であった。その結果、平均点は120点満点で35点前後に落ち着くことが判明した。これは減点方式をとっているためであり、平均的な学生にとっては難しいテストになってしまう傾向が表れている、と分析した。このようなことを考慮しつつ、BASIC テストは日本の大学生の実態を踏まえて難易度を設定し、基本的な英語の聴解力を試すために開発されたものである。

このテストの特質は、1) 信頼性を高めるために選択肢数をすべて4つとしたこと、2) 今までの音声のみの聴解力テストのほかに、絵や写真などの視覚的な要素を加えて、受験者に親しみやすくしたこと、3) 採点の方法を変えたこと、などである。この結果として、従来のマークカードと異なり、写真やイラストなども印刷可能なA4版のマークシートにあらためた。また、筆記用具では、従来不可としていたシャープペンシルの使用もシートに穴をあけないという条件で可能となっている。

受験者に通知する個人別カードへの得点の記入は、素点(raw score)、標準得点(SS=Standard Score)、正当率(Proportion of right answers)、順位(rank)、評定(grade)の5つの方法からなっている。評定はForm AとBが合格のAと不合格のB、C、Dの4段階であるが、BASIC テストは5段階方式の、S、A、B、C、Dの評価となっている。

「英語基礎聴解力標準テスト」の内容は次の通りである。

- Part 1 (10問)：絵や写真を見て答えるもの
- Part 2 (10問)：質問を聞いて答えるもの
- Part 3 (10問)：会話を聞いて答えるもの
- Part 4 (10問)：短いストーリィーを聞いて

答えるもの  
の4部の合計40問である。これまでの受験者は1992年3月現在、Form A: 172,253名、Form B: 106,282名、BASIC: 22,816名となっている。受験者総計は301,351名である。

BASICテストはプレイスメント・テストとしても利用できるように、また高校上級学年の利用も考慮して、語彙の面でも配慮したテストとなっている。さらに学期間の英語学力の伸長度を測る場合の利用が可能であるように、1989年4月

から平行テストの開発に取りかかっている。1992年3月現在において、ほぼ問題作成を終えたので、今後実験テストを行い、そのデータ分析の結果により手直しをしながら、来年4月から利用できることを目指している。

(現在のメンバーは、担当理事：國吉丈夫、委員：笠島準一、喜田慶文、松山正男、見上晃、森戸由久、中野美知子、大友賢二、高木道信、石川祥一である。)

(石川祥一)

## (11) 大学英語教育実態調査委員会

JACEは、1968年に第一回の調査報告書『大学英語教育改善を目標とする基礎実態調査報告書』を発表している。調査は、教材、教授法、教員の労働量、クラスサイズ、組織及びその運営など11項目で、108名の回答者によるものであった。

それ以来10年余が経過して現在の委員会が発足し、英語教育改善には何よりもまず現状を適確に把握する必要があると、大学英語教員に対するアンケート調査の具体的準備に入ったのがJACE創立20周年の2年前1979年であった。同記念誌には、当時の委員長伊藤嘉一氏が、「創立20周年記念事業の一環として一般英語（教養課程としての英語）教育についての実態調査を行うことになった。…すでに調査表は、実態調査委員会で原案を作成し、…」と記している。

多額の資金とエネルギーを必要とする事業であったが、関西支部と東北支部からを含め、12名からなる委員会が結成され、資金は、小池現会長の努力で慶應義塾大学を通して文部省の科学研究費補助金を得ることができることになった。この資金なしにはなし得なかった事業で、あらためて感謝の意を表したい。以後、延べ8年にわたって補助金交付を受け、会員を中心に、各方面から助力を得、4調査、5報告書を完成することができた。

報告書の概略はつぎの通りである。

### 1. 『大学英語教育に関する実態と将来像の総合

的研究(I)ー教員の立場ー』(昭和56、57年度文部省科学研究費補助金による)

大学英語教育の現状把握と将来像を求めて、調査・研究を始めた。研究母体は、実質JACEの大学英語教育実態調査委員会であったが、補助金の交付を受ける関係で、“大学「一般英語」教育実態調査研究会”、ということになった。研究代表者小池生夫氏、委員長は発足当初一氏、代わった升川潔氏がまとめの最後の段階で急逝、以後伊部哲が引き継ぐことになった。

調査したい項目が多いことと、アンケートの文言の決定などに苦労することになった。合宿を含め、討論を重ね、理事会、研究企画委員会のご意見を伺い、アンケート質問総数127という大規模な調査になった。構成は、次のようにあった。

あなたご自身／目的・目標／教材／授業など／教授メディア／クラス・学生／入試問題／組織／英語教育の展望／提言／英文要約

このアンケートを全国約2,910名にのぼる国・公・私立の4年制大学、短期大学、工業高等専門学校の一般英語担当の教員に1982年3月に送付、1,012名から回答を得た。膨大な資料を分析した本文269ページの報告書を、1983年3月付で発表した。

分かったことは、一般教育の中における位置付け、クラスサイズ、クラス編成、コース多様化、履修期間延長、教員の海外研修充実、など多種多様な問題があることであった。大きな反響を得た。

完成の最終段階で、万事を取り仕切っていた升川潔氏が急逝され、報告書が「升川潔氏の靈に捧ぐ」となったことが残念でならない。

## 2. 『大学英語教育に関する実態と将来像の総合的研究(Ⅱ)－学生の立場－』(昭和59、60年度文部省科学研究費補助金による)

『教員編』完成後直ちに、再度補助金を得て、直ちに全国の国・公・私立の大学、短大の学生対象の調査・研究に取りかかった。これに先立ち、慶應義塾大学の経済統計学専攻の蓑谷教授に調査・統計についてお話を伺い、学ぶことが多かった。

調査事項は計100、構成は次のようにあった。

あなたご自身／中学校入学以前の英語学習／中学校での英語学習／高校での英語学習／大学・短大における英語学習／その他／一般教育の英語と学生－その全体像／主な問題点と改善のための提言／Summary Report

アンケートは、1984年9月、全国の国・公・私立大学・短大105校の専攻別の2年次生対象に教室で行われ、回答者は10,381名であった。本文179ページの報告書は、1985年3月付けで発表した。

学生が、授業方法、教材、カリキュラム、などに不満をもち、学生自身は学習態勢が不十分である、などが分かった。

## 3. 『早期教育・中学校・高等学校の英語教育における実態と将来像の総合的研究(海外子女教育を含む)』(昭和61、62年度文部省科学研究費補助金による)

続いて、大学に至る前段階の高校、中学校、小学校の英語教育の調査の必要を痛感、さらに海外子女教育に携わった先生方の意見も聞きたいということで、研究を始めた。

中学校、高等学校についての調査事項は計70で、構成は次のようにあった。

あなたご自身／英語の授業／教材／教育メディア／生徒／大学の入学試験／教師自身および研修／外国人英語教員／英語教育全般と将来の展望／全体像／問題点と提言／英文要約

早期英語教育については36事項、海外子女教

育については33事項であった。

中学校と高校に関しては、全国の教員名簿とともにランダム方式で中学校英語教員約2,700名、高校の英語教員約3,100名を抽出し、1987年3月にアンケートを送付、それぞれ930名、1,415名から回答を得た。早期英語教育に関しては、小学校で英語を教えている教員約480名、海外子女教育に関しては、経験者約1,100名に同年同月それぞれ36、33項目のアンケートを送付、それぞれ104名、559名から回答を得た。中・高の教員は、英語教育の現状をよくないと見、中学校の時間数不足、クラスサイズ、生徒の意欲、教師の

“雑用”など、問題が多いが、改善の努力をしていること、海外研修を強く望んでいること、などが分かった。早期英語教育に関しては、担当教員が、必要である、教えるなら必修にすべき、生徒は興味をもつ、音声面に大きな効果がある、などと考えていることが分かった。海外子女教育経験者は、日本の英語教育の現状は悪く、指導法に問題、コミュニケーションを目標に、小学校から教える、英語以外の言語も教えるべき、などと考え、日本人の異文化に対する寛容性、自己表現力などに問題があるとしている、などが分かった。

本文222ページの報告書は、1988年3月付けで発表した。

## 4. 『職業人から見た英語教育に関する実態と将来像の総合的研究』(昭和63、平成元年度文部省科学研究費補助金による)

さらに、大学卒業の社会人が、受けた英語教育をどう思い、将来あるべき英語教育をどう考えているか、を調査したのが本報告書である。

調査事項は計34で、構成は次のようにあった。

あなたご自身／英語とのかかわり／大学生時代の英語学習／日本のこれから英語教育／全体像／提言／英文要約

アンケートは、国・公・私立23大学、短大の卒業生名簿で約1,200名をランダム抽出、1989年3月に送付、2,318名から回答を得た。結果からは、大卒社会人が、英語とかかわりが多いこと、中・高・大の英語教育は成果をあげていない、コミュニケーションを目的にすべき、大学時代に

「聞く」「話す」授業があればよかった、などと考えていることが分かった。

本文84ページの報告書は1990年3月付で発表。

5.『わが国の英語教育に関する実態と将来像の総合的研究』(昭和63、平成元年度文部省科学研究費補助金による)

本文182ページの本報告書は、4報告書の別冊をなす総集編である。

『大学教員編』後すでに10年が経過、動きの急な近年では再調査が待たれ、調査し残したもの、

深めるべきものなど、なすべきことは多い。現在、実態調査委員会は、今までの調査・研究に基づいて、21世紀に向けての提言を大修館『英語教育』別冊として発表すべく準備中である。

以上の研究に携わった委員は、現在の小池生夫、安藤昭一、石川祥一、石田雅近、伊部哲、國吉丈夫、竹前文夫、田島穆、多田稔、西村嘉太郎、古川尚子、松山正男、のほか、故升川潔、伊藤嘉一、田辺洋二、原岡笙子、朝尾幸次郎、成沢義雄、吉岡元子、の諸氏である。

(伊部 哲)

## (12) 英語教育メディア研究開発委員会

英語教育メディア研究開発委員会は1985年度より、音声教育研究とC A I研究を考えていた天野一夫、田辺洋二、國吉丈夫、原岡笙子、石川祥一、朝尾幸次郎の6名が中心となりこの二つの研究会を統合して英語教育メディア研究開発委員会として発足したのがその始まりである。当時、ニューメディアと言われた各種機器が教育の現場で実用化されつつあることを踏まえ、これらの機器を使用しての外国語教育の可能性を探り、またハードウェアの面では、機器操作の実際を学び、将来はソフトウェアの開発も目指そうと考えていた。また、音声教育の充実を目指して授業研究に取り組んでいくことも課題となった。

したがって、当委員会の発足年度(1985年)の研究テーマは文字どおり「授業の研究」であった。委員会のメンバーで、放送大学の「英語Ⅰ」面接授業担当講師でもあった松山正男氏(東京工大)、原岡笙子(昭和女子大)及び石田雅近氏(清泉女子大)の3名が、VTRやテープレコーダーを使用した授業をVTRに録画して、J A C E T全国大会(1985年)の「私の授業」で紹介したり、大会中に当委員会が主催する「英語教育におけるコンピュータの利用」に関するワークショップを開き、委員による発表と参加者を含めた活発なディスカッションが行なわれた。

発足2年目以降の研究テーマは主として「英語教育におけるコンピュータの利用」に絞られ、各

種のプロジェクトが登場する。

まず、1987年4月より一年間の予定で、コンピュータを利用した実験授業を実施した。授業担当者は古川尚子、実験対象は目白学園女子短期大学英文科2年生、パソコン使用機種はN E C P C - 9 8 0 1 U 2であった。そして、この企画は次年度以降(1988~89年)にも引き継がれ、田辺洋二氏が早稲田大学教育学部で、パソコンを5台配置しての実験授業を実施している。実験用ソフトは前年度当委員会が開発し、改良を加えたものを使用した。なお、この実験結果は1989年(第28回)全国大会にて、当委員会主催のワークショップ「英語教育におけるコンピュータ」で発表されている。

当委員会のもう一つのプロジェクトは過去数年間に及ぶ「パソコンの研修会」の実施である。これは、主として大学の英語教官にパソコンの最新の利用方法を学ぶ機会を提供し、高度な情報化社会に対応できる英語教育技術の一端を修得してもらうことを目的としたものである。ここ数年、この種の企画に参加を希望する会員が予想外に多く、毎回盛況で、希望者が定員を大きく上回るのが現状である。

この企画は、1987年6月27日に研究社英語センターで開催された、当委員会主催のワークショップ「英語教育とコンピュータ利用」に始まる。その内容は、1)パソコン入門(初心者を対

象にしたパソコンの解説と当委員会の実験授業で使用したソフトによる体験学習)、2)実戦研究報告(古川尚子(目白学園女子短大)及び山本涼一(GEMCO)の両氏が担当)、3)参加者全員によるディカッショントQ&A、であった。

これ以後、3回に及ぶ「パソコン研修会」が開催されており、この具体的な内容は以下のとおりである。

#### 第1回パソコン体験研修会

日 時：1988年3月28日～30日

場 所：研究社英語センター大会議室

参 加 者：28名

内 容：1) 英語・日本語ワープロ TwinStar を使用しての学習  
2) dBaseⅢによる成績処理法、R.D.Bの学習、市販ソフトの使用法についての討論  
3) Micro Typing Tutor等による授業用ソフトの学習、Ninja 2 によるカード型データベースの学習

#### 第2回パソコン研修会

日 時：1989年3月16日～18日

場 所：目白学園女子短期大学

参 加 者：25名

内 容：1) 機器の操作と簡単なプログラム、MS-DOS概論、タイピング  
2) 日・英両用ワープロ(TwinStar Release 2)の基礎から応用まで  
3) パソコン通信入門、関連ソフト(英語教育・研究用)

#### 第3回JACETパソコン研修会

日 時：1992年3月17日～19日

場 所：NEC教育システムプラザ

参 加 者：22名

内 容：1) パソコンの基本操作、ディスク・プリンター等の使用法、  
2) 日本語ワープロ「松」の入力・編集  
3) 日・英両用ワープロ「TwinStar (Release 2)」の入力・編集  
4) MS-DOS概論、ディスク管理  
5) 質疑応答

(杉本豊久)

### (13) 海外資料研究委員会

本委員会は、英語教育に関連した海外の価値のある論文を英語教育関係者に紹介することにより、日本の英語教育(特に高等教育レベルで)の実証的研究に貢献することを目的として1970年代から活動を始め、今日に至っている。最近6年間くらいはこれに加えてテーマを決め文献及び実証的研究も行っている。

以下大修館『英語教育』における最近の連載企画2種類——“EFL/ESL PROGRAMS ABROAD” 「海外論文を読む」の足跡を紹介する。なお、これらの記事の依頼、編集は小谷悠紀子(東京電機大学)本委員会前委員長が中心となってその任にあたられた。

“EFL/ESL PROGRAMS ABROAD” (1984.10—1987.7)

海外の言語学、英語教育関係者の大学院を紹介したもの。各記事の日本人執筆者はその大学院で実際にコースを履修した人であり、native speaker執筆者はその大学院プログラムの責任者であることを特色としている。

University of Hawaii 1984.10.11

(清川英男／R.Day, 石田雅近)

University of Essex 1984.12;1985.1

(J.T.Roberts/A.Spicer, 森戸由久)

Teachers College, Columbia University 1985.2.3

(J.F.Fanselow, 星野幸子)

- Western Kentucky University and Kentucky English Language Institute 1985,4,5  
 (M.A.Kearny, 鈴木三喜男)
- Center for Applied Language Studies, University of Reading 1985,6,7 (R.White, 西堀ゆり)
- University of Southern California 1985,8,9  
 (ローリー・パウエル, 鈴木博)
- The University of Texas at Austin 1985,10,11  
 (J.G.Bordie, 渡辺千秋)
- The University of New Mexico 1985,12;1986,1  
 (A. Hudson-Edwards, 牧野高吉)
- The University of London Institute of Education 1986,2,3 (H.G.Widdowson, 大澤ミナミ)
- The University of Michigan English Language Institute 1986,4,5 (R.D.Fraser, 山口聖子)
- Pennsylvania State University 1986,6,7  
 (J. Hinds, 野崎京子)
- University of East Anglia 1986,8,9 (菅原安彦)
- University of Illinois at Urbana-Champaign 1986,10,11 (W.B.Dickerson, 池田智)
- The University of Kansas 1986,12;1987,1  
 (G.Hughes, 中村良廣)
- Georgetown University 1987,2,3  
 (D.P.Dato, 笠島準一)
- University of Leeds 1987,4,5  
 (D.S.Taylor, 橋内武)
- Ball State University 1987,6,7  
 (H.Stahlke, 岩田祐子)
- 「海外論文を読む」 (1987,8-1992,3)  
 3年半にわたり英語教育に関する海外の実証的研究をとりあげ紹介したもの。4技能に始まり、テスト、異文化間コミュニケーション、言語習得、社会言語学、音声学等多岐の分野にわたり最新の問題点を分かりやすく提示している。
- Composing Process とは 佐藤妙子 1987,8,9
- T-unit 再考 三好重仁 1987,10,11  
 内容に焦点をあてた書き直しの指導  
 鈴木広子 1987,12
- Written English の特徴 鈴木広子 1988,1
- Reduced Forms を学習する効果 小谷悠紀子 1988,2
- 聴解力を伸ばす方法 小谷悠紀子 1988,3
- 診断的・治療的 Listening 指導の提言  
 山内 豊 1988,4
- Listening の構成要素と Material  
 山内 豊 1988,5
- 短期記憶と聴解力の関係 門田修平 1988,6
- 聴解力と語順の関係 山根 繁 1988,7
- 興味と予備知識の読解力に対する効果  
 野中慶子 1988,8
- 結束性と読解力の関係——認知心理学的考察  
 野中慶子 1988,9
- テクストと第二言語理解の関係  
 北条礼子 1988,10
- 2文以上の読解力とクローズ・テスト  
 北条礼子 1988,11
- これからリーダビリティ研究  
 清川英男 1988,12;1989,1
- 誤答分析の最近の方法 大井恭子 1989,2,3
- Information Gap Activity の効果  
 菅原安彦 1989,4
- Fluency を高める授業 菅原安彦 1989,5
- Group Work による Writing の指導  
 中村優治 1986,6
- スピーキングの指導——5つのポイント  
 中村優治 1989,7
- TOEFL と学業成績との相関  
 加藤忠明 1989,8
- 講義ノートの記入法 加藤忠明 1989,9
- 会話能力の間接的測定法：会話型クローズテスト 佐藤史郎 1989,10
- 設問選択型クローズテスト  
 佐藤史郎 1989,11
- 筆記発音問題の信頼性と妥当性  
 笠島準一 1989,12
- NRT と CRT に基づくテストの改善  
 笠島準一 1990,1
- 国際化再考——「異文化間能力」とは  
 岩崎暁男 1990,2
- 日本の英語教育に対する外国人の目  
 岩崎暁男 1991,3
- 対人コミュニケーション 西田ひろ子 1990,4

発話の冗長さと Pragmatic failure  
岩崎祐子 1990,5

会話の社会的ルール 岩田祐子 1990,6

リーディングのメタ認知方略訓練  
神保尚武 1990,7,8

応用的な観点から見た発話行為理論の問題点  
高橋貞雄 1990,9,10

日本語の談話におけるあいづち行動の相違  
霜崎 実 1990,11,12

談話分析から見た文法の問題  
大島 真 1991,1

談話分析から見たリーディングの問題  
大島 真 1991,2

ESL Classroom における母語の使用  
牧野高吉 1991,3,4

Apology : おわびのしかた 藤森和子 1991,5,6

L1 におけるスペリングの習得  
森 千鶴 1991,7,8

語彙学習——語習得の難易に関する要素  
相沢佳子 1991,9

句動詞の学習——Particle 中心の分類法  
相沢佳子 1991,10

三人称総称代名詞の使用状況  
高橋みな子 1991,11

男女ペア語の非対称性 高橋みな子 1991,12

強勢とイントネーション——言語学習に関する  
考察 萩野博子 1992,1

日本人英語学習者により強勢リズム産出と知覚  
萩野博子 1992,2,3

(三好重仁)

## (14) 文 学 研 究 会

### I. 発足

文学研究会は1976年に発足した。当時の研究企画委員のうち、鈴木紘治を中心に、文学を専攻する者が数人語らって始めたものである。一つには、大学英語教員の過半数、そしてJACET会員の半数近くがいわゆる文学専攻者であると推測された状況にかんがみ、そうした人たちの直接の関心に結びつく研究会部門がJACETにもあっていいのではないかと考えられた。また、大学の英語の授業にも文学的教材が多く使われているという状況もあり、英語教育と文学の関係といった問題はJACETとしても真剣に考えてゆく価値があろうし、そのための足がかりが欲しいという思いもあった。こうした意識は基本的には現在まで続いている。本研究会の存在意義を説明する基盤となっている。

そこで、とりあえずはメンバーの相互啓発をめざして、定期的に——1カ月に1度ぐらいのペースで——関係書物の輪読会をもつことになり、まず Northrop Frye, *Anatomy of Criticism* (1957)を取り上げて出発したのである。

### II. 研究例会

その後、この定期的な研究例会（一時は「読書会」と称したこともあった）は、夏休み等の長期休暇期間を除いて、年8回ぐらいのペースでずっと続いており、文学研究会の基本的な活動となっている。研究企画委員以外のJACET一般会員からも何人かの参加者を得ている。各回の出席者は10人未満という小規模な集まりではあるが、個々のメンバーにとっては得るところの大きい活動であった。この研究例会で取り上げた書物等の主なものを、ほぼ取り上げた順序で挙げると次のとくである。

- Northrop Frye, *Anatomy of Criticism* (Princeton U.P., 1957)
- H. G. Widdowson, *Stylistics and the Teaching of Literature* (Longman, 1975)
- Jane P. Tompkins (ed.), *Reader-response Criticism: From Formalism to Post-structuralism* (The Johns Hopkins U.P., 1980)
- Walter Jackson Bate (ed.), *Criticism: The Major Texts* (Harcourt Brace Jovanovich, 1970)
- C. J. Brumfit & R. A. Carter (eds.), *Literature and Language Teaching* (Oxford U.P., 1986)

Alan Duff & Alan Maley (eds.), *Literature*  
(Oxford U.P., 1990)

Alan Maley & Sandra Moulding, *Poem into Poem*  
(Cambridge U.P., 1985)

Ronald Carter & Michael N. Long, *The Web of Words: Exploring Literature through Language*  
(Cambridge U.P., 1987)

Ronald Carter (ed.), *Language and Literature: An Introductory Reader in Stylistics* (Unwin Hyman, 1982)

参加時期および期間はさまざまであるが、現在までの参加者（オブザーバーを除く）の名前を以下に列挙する。

伊村元道、加藤英夫、宿谷良夫、鈴木紘治、田口孝夫、田中駿平、田中英史、長岡政憲、中村匡克、日暮純子\*、松崎洋子\*、三宅敦身\*、谷田恵司、渡部祥子（50音順。\*印は研究企画委員以外のメンバー）

### III. 対外的活動

上記研究例会は、どちらかというと、参加者個人個人の啓発に資するものであるが、文学研究会にはもちろん、もっと公的あるいは対外的な活動も期待されている。各時期の実働メンバーの数があまり多くなかったこともあって、そうした活動はなかなか思うにまかせなかつたが、それでも次のような活動を行つてきている。

#### 1. 公開講演会の開催

外部から著名講師を招いて講演を聞き、ふだんの研究例会とは一味違った啓発の機会とすることをねらった。また、英語関係の雑誌に予告記事を載せ、東京およびその周辺の J A C E T 会員に開催通知を出すので、新たな研究会員を発掘する機会ともなった。名称は、最初期は「公開講演会」ではなく、単に「J A C E T 文学研究会」であった。開催日時、場所、講師、演題等は次の通り。

第1回  
1981年12月12日(土) 14:00-16:00  
大妻女子大千代田校

池上嘉彦（東京大）「詩学と文学の記号論  
——文学への言語学的アプローチ」

#### 第2回

1982年6月12日(土) 14:00-16:00  
大妻女子大千代田校  
由良君美（東京大）「Reception Aesthetics と Metafiction をめぐって」

#### 第3回

1984年9月22日(土) 14:30-16:30  
大妻女子大千代田校  
Neal Henry Lawrence(神父、歌人) 'English Tanka Poetry in Teaching of English'

#### 第4回

1988年3月12日(土) 15:00-17:00  
大妻女子大千代田校  
荒木正純（筑波大）「英文学研究・教育の制度性——新しいディスコースを求めて」

#### 第5回

1990年3月3日(土) 14:00-16:00  
研究社英語センタービル  
坂場順子（演劇研究家）「文化の紹介と言語のギャップ」

#### 第6回

1991年3月9日(土) 14:00-16:00  
研究社英語センタービル  
谷本誠剛（筑波大）「英語教育と文章論」

#### 第7回

1992年3月7日(土) 14:30-16:30  
研究社英語センタービル  
成瀬武史（明治学院大）「文学表現の解釈誘導子を求めて」

#### 2. J A C E T 大会等への研究会としての参加

第16回大会（1977年10月30日、於成城大学）でミニシンポジウム「文学と英語教育」を開催した。担当は次の通り。

司会 鈴木紘治

発題 田中英史 「文学教育の意義」

加藤英夫 「文学教育の実践」

田口孝夫 「作品鑑賞の方法論」

その他、何回かの大会におけるシンポジウムの発題や月例研究会での発表等に、請われてメンバーを派遣している。

### 3. 出版関係

ふだんの研究例会活動の副産物として、1987年3月、文学研究会編による研究論文集『読みの活性化に向けて』(弓書房、2000円)を刊行した。収録論文の執筆者および題は次の通りである。

- 鈴木紘治 「交流理論とは何か? —ローゼン  
プラットの読書論—」  
三宅敦身 「ジェフリー・ハートマンの批評に  
ついて」  
田中英史 「ブライシュの<主観的批評>」  
田口孝夫 「英詩鑑賞の方法論 —記号論の方

法を中心に—」

中村匡克 「言語と人間と教育 —旧約の知恵  
文学は何を語るか—」

なお、雑誌『英語教育』(大修館書店)の1992年4月号から1993年3月号まで、文学研究会として、「文学教材の扱い方 —新しい試み」という総題で連載をすることになっている。

### IV. その他

文学研究会の代表者(1988年度からは委員長)は、発足以来ずっと鈴木紘治であったが、1987年度から田中英史がこれを引きつぎ、1989年度からは田口孝夫を副委員長に補って、今日に至っている。担当理事は、1986年以来、松山正男が務めている。活動のメンバーは事実上、東京およびその周辺の者に限られているのが現状であるが、他の地区の志を同じくする人々との連携をいかに強めていくかが、今後の大変な課題の一つであろう。  
(田中英史)

## (15) 語 法

語法研究会は東京および周辺の語法に関心をもつ研究企画委員によって1985年に活動を開始した。初めは各委員の専門分野における研究発表を行ったが、1988年から類義語の研究を行った。基本計画では英語の形容詞、副詞、動詞、名詞について類義語リストを作成し、意味特徴を調べ、日本語と比較することであった。1992年の3月まで形容詞の類義語について形容詞+名詞のコロケーションについて検討し、名詞の意味のカテゴリーの違いによる形容詞との連語関係の可能性を探ってきた。この間、類義語に関する文献を収集してきた。英語のインフォーマントとしてティモシー・ライト氏に会の発足からずっと協力してもらっている。現在、Brown と LOB のコーパスを利用している。今後はCOBUILD等のデータベースの利用を考えている。最終的には英語の類義語のレキシコンを作成する予定である。1992年の大会で中間報告を行うことになっている。

## 研 究 会

1985年から1988年までの委員は、

久泉鶴雄、田部滋、田島穆、小谷悠紀子、森戸由久、楠瀬淳三。

1989年度は、久泉鶴雄、田部滋、田島穆、樋口時弘、楠瀬淳三、小谷悠紀子、神保尚武、森戸由久。委員長は森戸で、副委員長は久泉。

1990年度は、久泉鶴雄、田島穆、樋口時弘、楠瀬淳三、森戸由久。

1991年度は、田島穆、高木道信、樋口時弘、楠瀬淳三、中野美知子、森戸由久。

担当理事は田辺洋二、委員長は田島、副委員長は森戸。

1992年度は田島穆、高木道信、樋口時弘、楠瀬淳三、中野美知子、ティモシー・ライト、矢田裕士、宿谷良夫、森戸由久。

担当理事は村田年、委員長は田島、副委員長は森戸。

(森戸由久)

## 2. 本部・事務局

いつの時代にもそれぞれに大きな意義と問題がある。JACE Tが20周年記念誌を出してからこの10年も、英語教育や高等教育など教育界を見るだけでも、臨時教育審議会、中学英語週3時間、共通一次から大学入試センター試験、教員免許法の改正、中・高校学習指導要領の改訂、新大学設置基準など大きな変革があった。この潮流にあって、JACE Tは、以下に示すように、会員・組織などの拡大、会則の整備、伝統を受け継ぎながらの新旧交代・新方式の導入など、質・量共に成長し、いよいよ「壮年期」を迎えたといえよう。

### 1. 会員・会計の推移

この10年間で以下のようにほぼ2倍になった。

年度	全会員（一般会員）	年度決算額
1982	(不詳)	9,485,773円
1983	1393(1259)	11,434,460
1984	1617(1474)	11,184,017
1985	1506(1367)	14,129,888
1986	1741(1597)	14,728,763
1987	1738(1611)	18,942,296
1988	1879(1723)	18,924,961
1989	1966(1818)	22,031,962
1990	2094(1955)	21,269,753
1991	2145(2017)	23,853,819

本年（1992）4月24日現在の会員数は、2239名（一般2071名、団体48団体、賛助84社、特別36名）である。

### 2. 役員・役員会等

#### 1) 会長・副会長

16年間にわたって会長として指導下さった小川先生に代わり、1984年度から梶木先生（現名誉会長）に会長を8年間つとめていただき、1991年8月の大会を持って、小池現会長になった。また、1984年度から副会長制をとるようになった。

会長：小川芳男（'68-83） 梶木隆一（'84-91）  
小池生夫（'91.8-）

副会長：小池生夫（'84-91.8） 田辺洋二（'91.8-）

#### 2) 理事・評議員

理事は1982年度の11名から1991年度の18名になった。この増員は1989年度から各支部から支部長を含めて理事を2人選出するようになったことによる。全国理事会は春季と全国大会開催時の年2回、本部理事会は毎月開いてきている。

評議員は1982年の73名から1991年度の89名になった。この間、1987年度は119名の多い年度もあったが、その後、新規約の会員20名につき1名という目安に合わせるように調整している。評議員会は全国大会時に年1回を原則としている。

### 3. 訃報

この10年間に、以下の先生方をはじめ、JACE Tを興し、支えてくれていた諸先生方のご逝去があった。

山田和男理事（'85.12） 朱牟田夏雄初代会長（'87.10） 星山三郎（'89.7） 小川芳男第二代会長（'90.7） 原沢正喜理事（'90.8）

### 4. 会則の改正

1984年度と1985年度に部分的な改訂を行なってきたが、評議員会のあり方、本部と支部の関係、役員委嘱・選出の方法など抜本的に見なおすために、1988年3月に組織検討委員会発足。2年半の歳月を費やし、1990年9月の大会時の役員会・総会において現会則に改正した。また、新しく内規もつくった。新旧の会則は、46~48ページ参照。

### 5. 支部の設立

当初から研究発表をはじめ会員は全国に散らばっていたが、本格的な支部として関西（'72）、東北（'81）について、この10年間のうちに、中部（'83）、中国・四国（'84）、九州・沖縄（'84）、北海道（'86）の各支部が設立されて、活動をさらに充実・拡大した。

### 6. 本部事務局

#### 1) 代表幹事

当初の小池生夫、田中春美、松山正男、五十嵐康男の諸氏に統いて、この10年間は以下が担当した。

田辺洋二（'81-83） 國吉丈夫（'84-85） 奥津丈夫（'86-87） 鈴木博（'88） 森住衛（'89-）

## 2) 本部事務局

長らく<会計>と<渉外>の2部門を置いてきたが、1989年度からは、本部事務局を<総務>、<会計>、<渉外・広報>の3部門にして、それぞれに担当幹事を置いた。さらに1991年度からは<事業>を加えて4部門になり、本部幹事会(年7~8回)を持つようになった。なお、本年度から、<渉外>は国際部局を兼ねることになっている。

## 3) 事務員

鹿志村、大浜、阿部の三女史にこの10年間お世話になっている。特に鹿志村さんには語研の大学英語教育部会以来である。原則として、鹿志村さん週2日、大浜さん週2日、阿部さん週1日を担当してもらっているが、この4~5年は事務量が増えて、3人ともこの日数以外にも出勤してもらうことが多い。

## 4) 事務所

本部事務所は、当初の飯田橋のセントラルコポラスから、1985年に神楽坂のラインビルド神楽坂に、さらに1987年に同地の研究社英語センタービルに移した。

## 7. 研究企画委員会・プロジェクトチーム

### 1) 本部・支部を合わせた研究企画委員会

1983年度の119名から1991年の198名になった。

### 2) 本部ないし関東地区の研究企画委員会の数

1983年度の11から1991年度の15になった。

### 3) 支部のプロジェクトチーム

関西の10に続いて、中部が1990年度に2つ、1991年度には中国・四国、九州・沖縄も設立準備に入った。

### 4) 本部研究企画委員会

1990年11月から通常研究企画委員会と特別課題研究企画委員会の2つに分かれるようになった。前者は学会の運営や研究の大綱を、後者は特定の問題に集中して審議・議論を行っている。

### 5) 委員長会議

1991年度から本部では委員長会議を年に2~3回持つようになった。

## 8. 今後の課題と展望

### 1) 質・量の向上

会員・研究企画委員共に年を追うごとに増えてきた。今後もこの傾向を維持すると同時に、研究活動の活性化や教育実践の場への流布など、質に

おいてもさらに高めていかなければならない。

### 2) 負担の均等化

組織の拡大につれて、運営部門の役員・委員にService and Sacrifice の負担が大きくなっている。機器の導入、事務の合理化、役員・委員長の任期の回転などで、できるだけ均等にしていきたい。

### 3) 若手・女性の研究企画委員

研究企画委員の年齢が30年前と比べると著しく高くなっている。若い研究・教育者をもっと増やしていきたい。また、女性の研究企画委員が全体の17%で、割合としてはまだ少ない。30年たっても女性の理事が出ていない。

### 4) 復活・新設の研究委員会の必要性

J A C E Tの研究委員会の種類は、プロジェクトチームも含めて、広範多岐に渡っているが、古くて新しい問題である大学入試の検討および最近の大学設置基準でも問題になってきているF D(Faculty Development) や授業学に関する研究委員会などは復活ないし新設する必要がある。

### 5) 会計の基本方針

現在、予算・決算の収入のうち会費の占める割合が5割強で、残りは印税・広告料などで運営している状態である。この不安定要素依存の運営は健全とはいえない。いわゆる「貯金」である特別会計は現段階で約450万円しかない。今後はこれを増強して、世界大会の主催、国際学会への派遣、全国大会への自前の講師招聘、設備・機器の充実などに当たられるようにしたい。

### 6) 内外の学会・関係諸機関への働きかけ

内外の言語(外国語・英語・日本語)教育学会との連携や共同研究開発、また、文部省など関係諸機関への提言や要望などの提出、さらには先般('92.3)第1回を行なった中・高校教師向けのセミナーなど、外に向けた活動を一層拡大強化したい。

### 7) 法人化の検討

事務所が手狭である。将来的には自前の事務所を持てるようになりたい。できれば「J A C E T会館」も建てたい。そのためには、現在の<任意団体>から<法人>にすることも考えねばならない。

### [新旧の会則]

<1985年10月25日改正>

第1条 本会を「大学英語教育学会」(The Japan Association of College English Teachers)

- と呼ぶ。
- 第2条 本会は事務所を東京都内に置く。
- 第3条 本会は大学における英語教育の改善をはかることを目的とする。
- 第4条 本会は前条の目的を達成するために必要な研究、調査、討議、実験その他の事業を行う。
- 第5条 本会の会員は大学の英語科担当教員、その他本会の主旨に賛成するものとし、所定の会費を納めるものとする。
- 第6条 本会は毎年会員総会を開く。
- 第7条 本会は次の役員を置く。役員の任期は2年とする。再任を妨げない。
- 1. 会長 1名
  - 2. 副会長 1名
  - 3. 評議員 若干名
  - 4. 理事 若干名
  - 5. 監事 2名
  - 6. 研究企画委員 若干名
- 第8条 会長、副会長及び評議員は会員総会で選出し、理事及び監事は会長が委嘱する。研究企画委員は理事会の議を経て、会長が委嘱する。
- 第9条 会長は本学会を代表し、会務を総括する。副会長は会長を補佐し、必要のある時は会長の任務を代行する。評議員は理事と共に本会の重要事項について審議する。理事は会長を助けて会の運営に当たる。監事は会計の監査に当たる。研究企画委員は会長、理事の承認をえて、第4条に定める諸事業の企画、実施に当たる。研究企画委員会に代表幹事を置く。
- 第10条 本会に名誉会長及び顧問を置くことができる。
- 第11条 本会に支部を置くことができる。
- 第12条 本会は必要に応じ、理事会の議決を経て各種の委員を置くことができる。
- 第13条 本会の会則は評議員会の議決に基づいて改変することができる。
- (付 則) 1. 1984年10月19日改訂  
2. 1985年10月25日改訂

<1990年9月6日改正>

(名称)

- 第1条 本会は「大学英語教育学会」(The Japan Association of College English Teachers 略称 J A C E T) と称する。
- (目的)

- 第2条 本会は英語教育及び関連分野の理論と実践に関する研究を行い、大学における英語教育の改善と進歩・発展に寄与することを目的とする。  
(事業)
- 第3条 本会は前条の目的を達成するために次の事業を行う。
- 1. 全国大会及び支部大会、セミナー、講演会、研究会等の開催
  - 2. 「紀要」、「J A C E T 通信」等の出版物の発行
  - 3. 大学英語教育及び関連分野の理論及びその実践に関する研究・調査
  - 4. 大学英語教育の実践活動に対する協力・援助
  - 5. 内外の研究者・学術団体との交流
  - 6. その他必要な事業
- (会員)
- 第4条 本会の会員は一般会員、団体会員、賛助会員、及び名誉会員よりなる。
- 1. 一般会員は本会の趣旨に賛同する大学英語教員及びその他の個人とする。なお、一般会員の中には、学生会員、維持会員、及び終身維持会員が含まれる。
  - 2. 団体会員は本会の趣旨に賛同する大学・研究所・図書館その他の研究・教育団体とする。
  - 3. 賛助会員は本会の趣旨に賛同する企業等とする。
  - 4. 名誉会員は本会の活動に特別寄与した者とする。
- (会費)
- 第5条 本会の会員は所定の会費を納めるものとする。会費の額については別にこれを定める。  
(組織)
- 第6条 本会に本部と支部を置く。
- 1. 本部は会長、副会長、理事、監事、正副代表幹事及び会長の委嘱する若干名の研究企画委員で構成し、本会全体にかかる事業を遂行するための機関とする。
  - 2. 支部の組織については別にこれを定める。
- (役員)
- 第7条 本会に次の役員を置く。任期は2年とし、重任を妨げない。
- 1. 会長 1名 2. 副会長 1名 3. 支部

長 各支部 1名 4. 理事 若干名 5. 評議員  
若干名 6. 監事 2名 7. 正副代表幹事 各  
1名 8. 幹事 若干名 9. 研究企画委員 若  
干名

なお、名誉会長及び顧問を置くことができる。

(役員の選出)

第8条 本会の役員は次の方法により選出する。

1. 会長・副会长は理事会が候補者を選出し、評議員会において審議し、総会において承認を得る。
2. 支部長は支部において選出し、会長が委嘱する。
3. 理事は各支部の支部長と各支部の推薦する者1名、及び会長の委嘱する若干名とし、理事会及び評議員会において審議し、総会の承認を得る。
4. 評議員は本部、支部より推薦された者について理事会及び評議員会において審議し、総会の承認を得る。
5. 監事は評議員会の推薦により会長が委嘱する。
6. 代表幹事及び副代表幹事は、本部研究企画委員の中より理事会が推薦し会長が委嘱する。
7. 幹事は、本部及び支部の役員の中より選出され、会長が委嘱する。
8. 研究企画委員は本部または各支部より推薦され、会長が委嘱する。

(役員の任務)

第9条 本会の役員の任務は次の通りとする。

1. 会長は本会を代表して会務を総轄する。
2. 副会長は会長を補佐し、必要のある時は会長の任務を代行する。
3. 支部長は支部を代表して、支部の会務を総轄する。
4. 理事は理事会を構成し、会長・副会长を助け、本会の事業遂行に関する事項を審議・決定し、執行する。
5. 評議員は評議員会を構成し、理事会の諮問に応じ、また本会の組織、会計、活動方針などに関して、提案された事項を審議する。
6. 監事は本会の会計の監査に当たり、その結果を理事会、評議員会及び総会に報告する。
7. 代表幹事は研究企画委員会を主宰し、また学会全体の事務を総轄する。

8. 副代表幹事は代表幹事を補佐し、必要ある時は代表幹事の任務を代行する。

9. 幹事は本部または支部の研究企画を進め、事務を処理する。支部の幹事は本部との連絡も担当する。

10. 研究企画委員は研究企画委員会を構成し、理事会の承認を得て本会の事業の企画・実施に当たる。

(会議)

第10条

1. 総会は毎年全国大会開催時に開く。
2. 理事会は会長の召集により、春季及び全国大会開催時に定期の会議を開く。また、必要に応じて、随時開くことができる。
3. 評議員会は原則として年1回、全国大会開催時に開く。また、必要に応じて、随時開くことができる。
4. 支部総会は毎年1回開く。
5. 研究企画委員会は、理事会の承認を得て、各種の委員会を設置することができる。
6. 本会の会議における議決は出席者の過半数の賛成を必要とする。

(会計)

第11条

1. 本会の経費は会費及びその他の収入をもって充てる。
2. 本会の会計年度は4月1日より翌年の3月31日までとする。
3. 本会の決算及び予算案は、理事会がこれを作成し、評議員会の審議を経て総会の承認を得る。
4. 決算は監事がこれを監査する。

(本部事務所)

第12条 本会は本部事務所を東京都新宿区神楽坂1-2に置く。

(会則の改正)

第13条 この会則の改正は理事会によって提案され、評議員会及び総会の出席者の3分の2以上の賛成を必要とする。

(付則)

1. この会則は1990年9月6日より施行する。
2. その他本会の運営に必要な事項は別に定める。

(森住 衛)

### 3. 支部

#### (1) 北海道支部

##### 地区研究会時代（1972年～1986年）

北海道支部が昭和61（1986）年に設立されてようやく6年になる。30周年を迎える大学英語教育学会の歴史の中では、いかにも短く、また若い支部である。しかしながら、JACE-Tが設立されて10年経った昭和47（1972）年、つまり北海道支部が正式に発足する14年前から、「北海道地区研究会」として、北海道地区的会員活動はなされていた。そこで北海道支部の歩みを振り返るに当たって、まずこの時期の状況を取り上げたい。

##### 1 地区研究会の発足

道内在住の会員数も増えてきた昭和47年9月、今はすでない札幌国際ホテルで地区研究会発起人会が開催された。翌10月、日本英文学会北海道支部大会を機会に大学英語教育学会北海道地区研究会が発足した。第1回研究会は「大学における英語教育の問題点」をテーマにして同年11月18日に北大クラーク会館で開かれている。

この時の発起人であり、研究会発足後は地区研究会運営委員となった6名は、船津好平（北星学園大）、岩城禮三（札幌医大）、北市陽一（北大）、北村正司（小樽商大）、小林謙一（道武蔵女子短大）、武本昌三（小樽商大）であった。地区研究会事務局は北市研究室に置かれ、学会本部との連絡をはじめとするさまざまな事務を以後10年以上にわたって担当することになる。また研究会発足当時の北海道地区出身本部役員としては、福村虎治郎（北大）が評議員、北市が研究企画委員であった。

その後昭和54年からは、北市、武本が評議員、北市、武本、岩城、船津、山岸悦郎（道教育大函館）が研究企画委員となった。地区活動では研究会が年2回程度着実に開催され、いよいよ支部が結成される条件も整備されたかと思われた。

しかしながら、地区的会員数はこの時期まだ30名弱で終始しており、支部の設立には、会員数の増加をはじめ、強固な基盤作りがなお必要であると

判断された。そのやさきに、地区研究会活動の推進役であった北市評議員の死去（昭和57年）、武本評議員の離道退会（昭和58年）、山岸研究企画委員の死去（昭和58年）と地区会員には不幸な出来事が相次いで、支部結成の機運は一時頓挫することになる。

しかしこの大きな打撃に打ち勝つように、地区研究会の活動は変わりなく続けられ、会員の研究発表、本部役員、外国人研究者などの講演に多数の非会員まで参加することもまれではなかった。昭和60年に開催されたウイルガ・リヴァーズ教授の講演会には120名を越える参加者があり、急きょ会場を変更したほどである。

地区運営態勢も昭和59年からは、評議員の岩城、船津、研究企画委員の船津、岩城、小林、栗原豪彦（北大）、牧野高吉（道教育大鉄路）、森永正治（道教育大旭川）、浪田克之介（北大）が運営委員となって、拡大強化された。その一方で、小林研究企画委員の死去に至って、地区研究会発足当時の運営委員6名のうち3名までが支部結成の日を見ることなく、若くして世を去ったことは残念なことである。

##### 2 支部設立発起人会

昭和60年に入り、いよいよ支部結成の機運がみなぎったと判断した地区運営委員（研究企画委員）は支部設立準備委員会を設置した。事務局を札医大岩城研究室に置いて、在札委員が事務局員となる。61年1月10日には第1回準備委員会を開催して、発起人の依頼、規約、役員推薦候補、設立総会次第など今後のスケジュールを検討。その結果、3月29日には36人からなる支部設立発起人会の開催にまでこぎつけた。

新会員の勧誘のために、発起人会は入会を呼びかける趣意書「大学英語教育学会北海道支部設立のご案内」を道内大学・高専英語教育担当者258名全員（『英語年鑑』1986年版による）に送付した。ちなみに同年3月末の道内会員は53名で

あったが、支部設立時まではほぼ100名に達した。

### 北海道支部時代（1986年～）

#### 1 支部発足

昭和61（1986）年8月2日、道内会員から久しく待望されていた大学英語教育学会北海道支部が、従来の地区研究会を発展的に解消して、ようやく発足した。もちろん本部役員諸氏や先輩の各支部からの助言と励ましが長い期間にわたってあつたことは言うまでもない。

本部から梶木会長を迎え、70名を越える会員参加のもと、北海道大学言語文化部を会場に、午後1時より設立総会は始まった。支部結成にいたる経過説明、支部規約案と予算案の審議の後、支部役員が選出された。

支 部 長 北村 正司（小樽女子短大学長）

副支部長 岩城 禮三（札幌医大）

岡野 哲（北大）

幹 事 船津 好平（北星学園大）

運営委員 金谷 茂（道教育大函館）

栗原 豪彦（北大）

牧野 高吉（道教育大釧路）

森永 正治（道教育大旭川）

浪田克之介（北大）

監 査 三島 出（駒沢大北海道教養部）

佐藤 行敏（道工業大）

役員選出後、北村支部長の挨拶、続いて梶木会長からの祝辞があつて、設立総会はめでたく終了した。

設立総会に引き続いて、支部発足記念講演会が開催された。

##### 1. "Rhythm, Stress and Intonation"

W. S. Jones（北海道大学）

##### 2. 「社会言語学としての英語教育」

比嘉正範（放送大学）

#### 2 支部活動

支部活動としては、年1回の支部大会、講演を含む研究例会、ニュースレターの発行、会員名簿の作成等が主なものであるが、これらの活動の円滑な運営のため運営委員会を年数回開催する。ま

た幹事勤務校に事務局を置くこととし、支部結成後2年間は北星学園大に、その後は北大言語文化部に置かれている。支部大会では会員の研究発表、シンポジウム等に加え、外国人研究者、本部より派遣された日本人講師による講演があることが多い。研究例会は年数回開催され、支部会員の研究発表、外国人講師の講演が中心となっている。

これまで支部のために来道した外国人講師を挙げれば、Frank Palmer(1987), Bernard Saint Jacques(1988), Michael Stubbs(1989), R. A. Jacobs(1989), J. C. Wells(1989), Rod Ellis(1990), John Trim(1990), John Sinclair(1991), Patricia Wetzel(1992)などがいる。

ニュースレターは昭和63（1988）年2月に創刊号が出て以来、平成4年3月までに5号が発行されている。B5版10頁ないし12頁の横組で、年1回の刊行である。各号第1頁の題字にある北海道支部のマークは船津初代幹事の考案で、他支部には見られないものである。

#### 3 新役員の選出

上記のニュースレターの第2号（1989年3月発行）の巻頭を、はからずも北村支部長への追悼の文章で飾らざるを得なくなった。先生は北海道地区研究会時代の運営委員であり、昭和61年に北海道支部が正式に設立されると初代支部長に就任し、支部の基礎固めに努力しておられたが、平成元（1989）年1月23日に急逝された。享年78歳であった。

その後、この年の支部総会で、支部長を代行していた岩城副支部長を新支部長に、またその後の副支部長には船津初代幹事を選出した。なお北海道支部から本部役員としては、岩城支部長と岡野副支部長が理事に、また評議員としては船津、金谷、栗原、牧野、浪田が就任している。この新たな陣容でいよいよ2年後の第30回記念全国大会の開催に臨むことになった。

#### 4 全国大会開催（平成3年8月）

第30回記念全国大会の開催に向けて、まず平成2（1990）年1月20日に支部運営委員を中心とした全国大会準備委員会が設置された。委員会は9月末までに6回開催され、同年10月にはこの委員会を拡大して、全国大会実行委員会に切り

替えた。同委員会委員は以下の通りである。

大会委員長 岩城禮三（北海道支部長）

大会実行委員 阿部晃夫、新井良夫、坂内正、船津好平、伊藤治男、要春光、金谷茂、清瀬健、栗原豪彦、九津見明、牧野高吉、丸川桂子、丸田謙二郎、三島出、森永正治、浪田克之介、新岡利朗、西堀ゆり、岡野哲、佐藤行敏、下宮英治、高井収、寺島善五郎、渡辺一郎、山口富夫

さて、北海道支部担当としてははじめての全国大会に、第30回記念大会としてどのような性格と企画を持たせるとよいのか、この点をめぐっては本部と度重なる協議が必要であり、石川全国大会運営委員長（本部）には、支部での実行委員会に参加していただいたこともある。さいわい大会を性格付ける大会テーマとしては「英語教育と国際化—地球市民への教育に向けてー」という支部の案が採用された。

実行委員会は総務、会場、事業、記録などの部会に分けられ、7回にわたる全体委員会とさらに各部会を通して具体的な準備が進められた。

大会テーマにふさわしい講師の選定、記念大会として一般市民を対象とした公開プログラム「英語教育を考える集い」の設定等には長い時間がかかり、大会プログラムの印刷直前まで本部とともに検討が続けられた。また、全国大会としてははじめて地元機関や団体の協力を得ることとし、北海道教育委員会、札幌市教育委員会の後援、北海道英語教育研究会の協力があった。

## (2) 東 北 支 部

東北支部設立総会及び大会が東北学院大学を会場にして開催されたのが1981年9月12日であったから、東北支部としては、支部設立以来ちょうど丸10年の活動を振り返る時期に到達したことになる。1991年9月13日の支部大会は、例年6月に行われている支部大会の時期を敢えてこの日にずらしての10周年記念行事であった。

10年間の活動状況は概略後記の通りである。支部設立間もない1983年には第22回 J A C E T 全国大会を引き受けた。「J A C E T 東北支部通

大会会場と開催時期については、1年前の準備委員会においてすでに決定していたが、問題は北海道としては観光シーズンであるこの時期に、参加者の宿舎と交通機関を確保することであった。旅行代理店に実務を委ねてはいても、結局この点は大会終了まで終始気を使うことになった。

実際の大会は、8月23日から25日までの3日間にわたって北海道大学を会場に開かれた。さいわいにも充実したプログラム内容、好天、そして予想をはるかに上回る参加者に恵まれて、無事大会を終了できた。このことはまだ支部会員の記憶に新しく、最も若い北海道支部としては、今後の発展のためにたいへん貴重な財産を与えられたことになる。

### 5 支部の今後

全国大会の開催を契機に、支部には10数名の新会員が加わり、北海道支部の会員総数は平成4年3月現在で、110名を越えている。支部活動としては、従来からの支部大会、研究例会、ニュースレターの発行などを一層充実させることは言うまでもなく、広い地域に会員が散在する悪条件を克服して、共同研究を積極的に導入したいと考えている。すでに平成3年度の支部予算にはそのための費用を計上した。今後早い機会にそうした企画の成果が全国大会や学会誌などに発表される日がくることを期待している。

（浪田克之介）

「J A C E T 東北支部会報」は、1982年3月に創刊され、最近号は1991年3月発行の第12号である。支部大会及び例会での研究発表、講演、シンポジウムなどの要旨がその都度掲載、紹介されている。第13号は支部設立10周年記念号となる予定である。

会員数は年々着実に増加の傾向にあるが、より多くの方々の参加を得て、研究活動、情報交換を活発にしていきたい。

この10年間、支部長として我々を暖かく御指導下さった長谷川松治先生は、昨年支部長を勇退さ

れた。1993年の全国大会は再び東北支部を会場にして開催される。畠中孝實新支部長の下、支部としてすでにその準備に取り掛かったところである。

#### 1981年度

9月12日 東北支部設立総会・大会（於東北学院大）シンポジウム「実りある英語教育」 司会：西村嘉太郎（福島大）、講師：久松豊（東北学院大）、成沢義雄（宮教大）、桑原義一（盛岡短大）、佐藤滋（東北工大）、小木野一（東北大）、講演「今後の大学の英語教育」 小川芳男（JACET会長）

#### 1982年度

6月12日 支部大会 シンポジウム「英語教育と変形文法」 司会：藤田孝（山形大）、講師：佐藤暢雄（秋田大）、山口登（福島大）、早坂高則（宮城高専）

12月11日 例会 「韓国大学英語教育学会主催国際英語教育学術大会に参加して」 成沢義雄（宮教大）

#### 1983年度

4月23日 例会 「その後の The Survey of English Usage とロンドン大学の英語学関係の講義」 畠中孝實（東北学院大）

10月8日～10日 第22回 JACET全国大会（於東北学院大）

12月17日 例会 「英国における日本語教育」 藤田孝（山形大）

#### 1984年度

6月9日 支部大会 シンポジウム「新教育課程と大学の英語教育」 司会：久松豊（東北学院大）、講師：花渕恵子（仙台市五橋中学校）、佐藤茂男（岩手県教育センター）、高梨庸雄（弘前大）

7月14日 例会 「大学生の英作文能力」 山口常夫（山形大）

11月24日 例会 「国際応用言語学会（AILA）に出席して」 西村嘉太郎（福島大）

12月15日 例会 「コンピュータを活用した英語指導」 成沢義雄（宮教大）、講演 「Linguistic Theories and TEFL」 M. Dobrovolsky (Calgary Univ., Canada)

#### 1985年度

4月20日 例会 「入試にあらわれた問題点」 勝畠鶴子（尚絅女学院短大）

6月10日 講演会 「The Interactive Approach」 W. M. Rivers (Harvard Univ.)

9月28日 例会 「Communicative English Teaching to Large Classes」 M. MacManus (宮教大)

12月7日 例会 「学生から見た大学英語教育」 西村嘉太郎（福島大）

#### 1986年度

4月1日 例会 「東北地区大学生の英語語彙調査について」 西村嘉太郎（福島大）

5月17日 例会 「英国の大学における英語教育」 関宮子（宮城学院女子大）

6月7日 支部大会 「表現のための類義語辞典——unbalance と imbalance をめぐって」 加藤和男（岩手医大）、「オーストラリアの言語政策の転換」 成沢義雄（宮教大）、シンポジウム「The Gap Between What We Should Do and What We Can Do」 司会：高梨庸雄（弘前大）、講師：R. Murphy (福島大)、C. Foster (宮城学院女子大)

7月12日 例会 「山崎豊子の『不毛地帯』の英訳について」 藤田孝（山形大）

8月30日 例会 「俳句について」 Joan Giroux (桜の聖母短大)

9月25日 講演会 「The Complexity of English Adverbials」 R. Quirk, Lady Quirk (University of London)

12月13日 例会 「英語による対話能力を構成するもの——大学英語教育教材へのひとつの試み」 三浦清進（青森明の星短大）、「JACETハワイセミナーに参加して」 小田三千子（東北学院大）

#### 1987年度

4月4日 例会 「あらためて問う、何をどう指導すべきか」 高梨庸雄（弘前大）、畠中孝實（東北学院大）

5月2日 例会 「最近のアメリカにおける音韻論」 遠藤裕一（東北学院大）

5月29日 講演会 「On Grammatical Construction — Toward the Theory of Construction Grammar」 C. J. Fillmore (U. C. Berkley)

7月11日 例会 「Meritocracy の語釈について」  
加藤和男（岩手医大）

8月1日 例会 「Echoic or Verbal」 西村  
嘉太郎（福島大）

9月19日 例会 「オーストラリア応用言語学  
会について」 小田三千子（東北学院大）、尾  
形良道（米沢女子短大）、西村嘉太郎（福島大）

10月24日 講演会 「Context and Discourse  
Constraints on the Grammar of Ordered Events」  
G. D. Prideaux (Alberta Univ., Canada)

11月7日 例会 「Halliday の言語理論研究」  
山口登（福島大）

12月5日 例会 「Minimum Essentials の再評  
価」 川嶋順（東北学院大）

#### 1988年度

4月2日 講演会 「Psycholinguistic Principles  
of Sentence Comprehension」 J. F. Kess  
(Victoria Univ., Canada)

5月7日 例会 「パプア・ニューギニアの言語  
事情」 栗田博之（東北学院大）

6月4日 支部大会 「幕末に活躍した通詞・ジョン万次郎と立石斧次郎に学ぶ」 岡田洋子（桜  
の聖母短大）、「80年代におけるシェイクスピア劇」 下館和巳（東北学院大）、シンポジウム「大学英語は高校英語と連繋しているか」司会：西村嘉太郎（福島大）、講師：阿部正祐  
(仙台南高校)、大場時也（東北学院大）

7月9日 例会 「Metaphor と Mental Lexicon  
: ballast and leapfrog」 加藤和男（岩手医大）

8月6日 例会 「大人の外国語習得能力につ  
いて」 中山和男（山形大）

10月1日 例会 「『ペオウルフ』の翻訳につ  
いて」 衛藤安治（福島大）

12月3日 例会 「小説にみる女性の暮らし—  
George Gissing の The Old Women から—」  
関宮子（宮城学院女子大）

#### 1989年度

4月1日 講演会 「Some Implications of Second  
Language Acquisition Research for Language  
Teaching」 M. H. Long & Sato (Univ. of Ha-  
waii)

5月6日 例会 「英語教育と教育行政」 佐藤

茂男（東北学院大）

6月10日 支部大会 シンポジウム「高等学校  
の『オーラルコミュニケーション』について」  
司会・講師：高梨庸雄（弘前大）、講師：小  
池生夫（慶應大）、千葉元信（仙台東高校）

7月8日 例会 「Language Acquisition」  
P. Scott (桜の聖母短大)

8月21日 例会 「教授者—学習者間の手書き  
文字情報の相互方向の伝達を可能にする外国語  
教育システム」 中西達也（山形大）

11月16日 講演会 「How to Improve your  
English Pronunciation」 J. Wells (Univ. Col-  
lege, London)

12月2日 例会 「文化的内容の指導について」  
横田勉（東北学院大）

2月3日 講演会 「Mistranslations」  
J. Vardaman Jr. (東北学院大)

#### 1990年度

4月1日 例会 「言語相対論—異文化理解の  
ために」 川嶋順（東北学院大）

6月9日 支部大会 シンポジウム & デモンスト  
レーション「英語教育におけるCATの効果的  
利用について」 講師：久松豊（東北学院大）、  
成沢義雄（東北学院大）、早坂高則（宮城工専）

7月7日 例会 「英作文能力の測定方法につ  
いての一考察」 富田祐一（福島大）

8月4日 例会 「コミュニケーション研究の一  
側面」 岡田毅（山形大）

11月10日 例会 「Using Dialogue Journals in  
College Classroom」 ブレンダ・林（宮城学院  
女子大）

11月26日 講演会 「Lessons from the 80's  
Directions for the 90's : How Language Cur-  
riculum Design May Evolve in the Current  
Decade」 R. White (Univ. of Reading, U. K.)

12月15日 例会 「語彙習得に関する一考察」  
佐藤香子（石巻専修大）

1月19日 講演会 「Communication & Cultural  
Problems in Team Teaching」 N. Tate (東北  
学院大)

#### 1991年度

5月17日 講演会 「The Communicative Grammar

- : The Case of the English Genitive」 G. Leech  
(Lancaster Univ., U. K.)
- 5月18日 例会 「『オーラル・コミュニケーション』指導確立の要件」 高田諭（東北学院大）
- 7月13日 例会 「The Place of Literature in the English Curriculum」 富良野純（桜の聖母短大）
- 9月13日 支部大会 「What is a "Drinking Man" anyway? — The semantics of pre-nominal present participles」 加藤和男（岩手医大）、「Dante の『神曲』と山川丙三郎——『地獄』の行方——」 下館和巳（東北学院大）、シンポジウム「日本語話者と英語」 司会：藤田孝（山形大）、講師：富田かおる（山形大）、中山和男（山形大）、板垣信哉（宮教大）、講演

- 「英語でわかってもらうということ」 田辺洋二（JACET副会長・早稲田大）
- 10月28日 デモンストレーション 「From Intention to Action : Achieving Your Objectives」「Meeting the Challenge of Multilevel Classes」 K. Graves (School for International Training in Brattleboro, Vermont)
- 11月9日 例会 シンポジウム「大学における外国語（英語）はどうなるか」 司会：成沢義雄（東北学院大）、講師：高梨庸雄（弘前大）、高橋紀子（桜の聖母短大）、久松豊（東北学院大）
- 12月14日 例会 「大学教育の改善と今後の学会活動」 遠藤裕一（東北学院大）  
(遠藤裕一)

### (3) 中 部 支 部

中部支部の発足は1983年であるから、今年の1992年は創立満9年になり、10周年もあと一歩というところまで来た。JACET30年の歴史の中で、本支部の活動期間は半ばにも満たないが、支部としての体制を作るずっと前から、現顧問の直井豊、佐藤一夫両先生をはじめ中部に在住または勤務する多くの会員が、会の恩恵を享受しながらその発展に寄与してきたことは言うまでもない。

支部の創設に尽力され、現在の支部長をつとめられる田中春美氏の記録によると、発足の時点で中部支部に所属する会員の数は約130名であった。9年後の今日では300名を越えたと推定される（1991年6月30日現在、本部登録数が291名）。これは関東、関西に次ぐ人数で、支部の研究教育活動も、この大世帯の会員に支えられて維持されているが、世帯の大きさが必ずしも運営の円滑化には反映せず、むしろ、機会の提供を均等にすることの困難を覚えることがしばしばである。その一因は（他支部でも同様の悩みはあると思うが）、会員の分布範囲が広く、おおまかに言って東海地区と北陸地区に分かれていることである。人数の比重から、どうしても名古屋を中心とした東海3県の企画に片寄り、静岡県や福井・石川・富山県などの熱心な会員に不便と不利を強いているので、この解決を図ることが一つの大いな課題であろう。

心とした東海3県の企画に片寄り、静岡県や福井・石川・富山県などの熱心な会員に不便と不利を強いているので、この解決を図ることが一つの大いな課題であろう。

支部の企画として行っているものに、大会のほかに年に2、3回の談話会、その間を縫って行う内外の学者による講演会がある。講演会の多くは本部や他支部の斡旋・協力によるものであるから、独自の企画とは言いがたい。したがって、支部の特色を發揮する事業が行われているとは言えないが、これは、支部役員の時間的制約と、財政面からの制約によるところが大きい。後者については、他支部に例が見られるように、支部独自の会計を設けて収入を画することも不可能ではないが、事業内容と経費の検討が、現時点ではそこまで行っていない。その中で、会員の有志からの提案をきっかけとして、1990年に誤文研究の、91年にはリーディング指導研究のプロジェクト・チームが発足して活動を開始し、本部からの援助も期待されることになったのは、喜ばしい前進である。

談話会は、毎回20～30名の会員の参加を見て、すっかり定着した感がある。主として研究企画委員から担当委員を委嘱し、研究企画委員全員

を含む役員会でテーマを検討しているが、カレントなトピックと、根本的な課題のかねあいの配慮がむずかしい。

役員の高齢化による関心の偏重を避けるため、まず研究企画委員（現在30名）の若返りを図っている。数年後には効果が現れるであろう。数年後といわず、2年後の1994年には、中部支部で全国大会を担当することになっている。支部としては2回目になり、早くも回ってくるのかという感を免れないが、前回が、器も中身も非常な好評を博しただけに、ひとしおの緊張を覚える。

支部所属の会員からはもとより、本部をはじめJACE T全会員からご指導とご協力を得て、中部支部の歩みをますます力強く進めて行きたいと願っている。

（丹下省吾）

### 活動の記録

中部支部結成——1983年

創立総会6月5日。（支部結成に至るまでの経過については、顧問の直井豊・佐藤一夫先生が別項でお触れになるであろう）

### 支部大会

第1回（中部支部創立総会とシンポジウム）

1983年6月5日（於南山短期大学）

役員——直井 豊、佐藤一夫、荒木一雄、村松 正、池 稔、田中春美、小野経男

支部会員数——約130名

シンポジウム「国際化時代と英語教育」

講師——小川芳男、直井 豊、小池生夫、西沢信正

第2回 1984年5月27日（於南山大学）

研究発表 6

シンポジウム「英語教育と関連科学」

講師——伊藤克敏、本名信行、柴田 正、金田正也

第3回 1985年6月8日（於南山短期大学）

（本年秋、名古屋で全国大会を開催のため、研究大会はとりやめ、総会のみ挙行）

JACE T 1985年度（第24回）大会

10月25日～27日（於栃山女子学園大学）

第4回 1986年6月1日（於愛知学院大学）

研究発表 5

シンポジウム「日本語教育と英語教育」

講師——水谷 修、駒井 明、鈴木 博

第5回 1987年5月31日（於中部大学）

研究発表 4

シンポジウム「大学と高校の英語教育のはざま」

講師——小金 潔、杉浦久也、森住 衛

特別講演 “Some Practical Classroom Applications of Theory and Research” 講師——Kenneth Chastain

第6回 1988年6月5日（於愛知淑徳大学）

初代中部支部長として直井豊氏を選出

研究発表 4

シンポジウム「英語による英語教育の是非」

講師——出山桂吉、佐藤秀志、Folkmar Koller

特別講演「第二言語習得研究の諸問題」

講師——田中春美

第7回 1989年5月28日（於中京大学）

研究発表 4

シンポジウム「英語教育と学生の海外研修」

講師——田中幸子、Matean Everson、三宅政子

特別講演 “The Place of Linguistics in a General Theory of Second Language Learning and in Language Teaching”

講師——B. Saint-Jacques

第8回 1990年6月3日（於愛知県立大学）

支部長交代——新支部長として田中春美氏を選出

研究発表 6

記念講演「Oral Communication の諸問題」

講師——直井 豊

シンポジウム「新しい形の Reading Comprehension」

講師——Peter High、Nancy Mutoh、後田忠勝

特別講演 “A Theory of Instructed Second Language Acquisition” 講師——Rod Ellis

第9回 1991年5月11日（於栃山女子学園大学）

研究発表 9

- シンポジウム「Writingについて—日本人教師と外国人教師の立場」  
講師—David Mayer、William Petruschak、  
田辺洋二
- 特別講演 “British National Corpus and Its Possible Educational Applications”  
講師—Geoffrey Leech
- 講 演 会**  
(中部支部創立以前)
- Randolph Quirk “British and American English” 1978.7.13 於南山大学
- Geoffrey N. Leech “Semantics and Pragmatics” 1980.7.26 於愛知会館
- Robert J. Di Pietro “Trends in Applied Linguistics” 1981.7.28 於名古屋YMCA
- Charles T. Scott “Linguistics and Language Teaching” 1981.11.19 於愛知厚生年金会館
- John Robert Ross “Human Linguistics” 1982.7.23 於愛知会館
- (中部支部事業)
- William and Teresa Labov “The Language of Cooperation and Commitment” 1983.7.31 於名古屋シャンピアホテル
- Derek Bickerton “Japanese Immigration and Contact Language Phenomena in Hawaii” 1984.7.20 於名古屋大学(名大総合言語センターと共催)
- John Oller “Relating Our Teaching to Testing” 1984.7.29 於名古屋シャンピアホテル(南山短大と共に)
- 加藤和光「アメリカから見た日本の英語教育」 1985.1.19 於南山短期大学(南山短大と共に)
- Wilga Rivers “Interaction as a Key to Teaching for Communication” 1985.6.8 於南山短期大学(南山短大と共に)
- David Crystal “Current Problems in English Usage” 1985.7.23 於王山会館
- 本名信行「国際英語の研究課題について」 1986.3.22 於栃山女学園大学(名古屋言語研究会と共に)
- John Sinclair “Discourse Analysis and Language Teaching” 1986.7.19 於南山短期大学
- Einar Haugen “Fashions in Foreign Language Teaching” 1986.11.4 於名古屋シャンピアホテル(ELECと共に)
- 西山 千「国際化時代の英語」 1986.11.15 於南山短期大学(南山短大と共に)
- 丹羽義信「英語教育と私」 1987.2.28 於栃山女学園大学
- 中村 敬「英語の見方、文化の見方」 1987.11.14 於南山短期大学(南山短大と共に)
- Adelbert Smith “Self-Instruction in Foreign Language Teaching” 1988.1.16 於名古屋大学
- Michael Long “Second Language Acquisition Research and Language Teaching”
- Charlene Sato “Sociolinguistics and Pedagogical Grammar” 1988.12.10 於南山短期大学
- Thomas Scovel “The Role of Attention in Language Learning” 1989.6.14 於名古屋YMCA
- Roderick A. Jacobs “Pedagogic Grammar in Relation to Chomsky's Current Framework” 1989.9.18 於名古屋YMCA
- Jan Svartvik “On the Study of Spoken English” 1989.11.14 於栃山女学園大学
- Jonh L. M. Trim “Communicative Language Teaching and Syllabus Design” 1990.7.24 於中京大学
- 竹蓋幸生「効果のあがるリスニング指導」 1990.10.13 於南山短期大学(南山短大と共に)
- 石井 敏「コミュニケーションとは何か—理論と実践」 1991.10.12 於南山短期大学(南山短大と共に)
- H. Douglas Brown “Dead Poets Society, Motivation, and YOUR English Language Classroom” 1991.10.30 於南山大学(同経営学部国際経営プログラムと共に)
- 談 話 会**
1. 「一般教養英語テキストを語り合う」 1983.12.17 於中京大学
  2. 「学生の学習意欲をいかに高めるか」 1984.4.21 於中京大学
  3. 「アメリカから見た日本の英語教育」(講演会に引き続き) 1985.1.19 於南山短期大学

4. 「大学英語教育の改革の方向」  
1986.1.18 於名古屋大学
5. 「英語教育と国際化」（講演会に引き続き）  
1986.3.22 於栃山女子学園大学
6. 「英語教育のあり方」（講演会に引き続き）  
1987.2.28 於栃山女子学園大学
7. 「英米人英語教師からみた大学での英語教育」  
1987.6.27 於栃山女子学園大学  
発題者 William Petruschak
8. "Why Do I Want to Teach English through English?" 1987.11.28 於栃山女子学園大学  
発題者 出山桂吉
9. 「1988年 Reading 大学研修会に参加して— Communicative Approach について」 1988.10.22 於栃山女子学園大学  
報告者 正岡和恵
10. "How I Got English Education in China" 1989.3.25 於栃山女子学園大学  
報告者 王 武雲
11. "Reading from Top to Bottom and Bottom to Top" 1989.6.10 於名古屋大学  
報告者 James M. Coady
12. "Our 'Pleasure Reading' Program for Building Students' Confidence and Fluency: Theory and Practice" 1989.12.16 於中京大学  
報告者 宇治谷映子、ナンシー武藤
13. "Reading between the Lines across the Curriculum" 1990.3.24 於栃山女子学園大学  
報告者 Andrew Wright
14. 「アメリカの中学校における English Composition —パソコン利用の実践報告」 1990.7.7 於栃山女子学園大学  
報告者 瀬光恵子
15. 「誤文の実体—予測・形成・防止のメカニズム」 1991.3.23 於栃山女子学園大学  
報告者 誤文研究プロジェクト・チーム  
(小野経男、松井恵美、宮田 学)
16. 「誤文の実体—予測・形成・防止のメカニズム」 —その2— 1991.6.15 於栃山女子学園大学  
報告者 誤文研究プロジェクトチーム
17. 「外国語（英語）のカリキュラム改革について」 1992.1.18 於名古屋大学  
報告者 菅原光穂、舌津 清、古橋 聰
18. "An Empirical Study on Learners' Acquisition of Reading Strategies and Its Effect upon Their Reading Competence" 1992.3.21 於栃山女子学園大学  
報告者 リーディング研究プロジェクトチーム  
(竹内政雄、深田 淳、木村 隆、増原仁美)
- 「誤文研究」 1990.11 設置  
メンバー—小野経男、松井恵美、宮田 学  
1991年度 J A C E T 大会（於北海道大学）にてシンポジウム実施  
「リーディング・ストラデジー研究」 1991.6 設置  
メンバー—竹内政雄、木村 隆、深田 淳、増原仁美

前書きにもあるように、広汎な地域を包括すると思われる中部圏では、支部創立以来10年近く、いろいろな理由で名古屋を中心とする東海3県のスタッフで支部活動を運営せざるをえなかった。その主な理由は、北陸3県の場合には遠距離であるために、役員になっていたいでも、各県3人の役員に旅費・滞在費を差し上げられるだけの経済的基盤が支部にないこと、また、静岡・長野の場合は、それに加えて、その両県にはすでに活発な英語教育関係の学会が存在していること、などである。しかし、だからと言って現状を肯定するわけではなく、支部創立10年を契機に何らかの解決策を考えなければならない。

それにつけても、支部役員会ではすでに次の支部大会（1992年6月20日）で支部長が私から小野経男氏（名古屋大学）に交代することが決まっており、それまでに上記の問題も一歩前進させたいと考えているところである。思えば、直井豊初代支部長から2年限りという条件つきで大任をお引き受けして以来、支部大会で正式に交代ということになったため、実質的には2年半に及ぶが、その間何も目立ったことはできなかったものの、何とか大過なく任期をまっとうできそうなのも、すべて支部の役員の先生方、特に直井・佐藤

両顧問と小野副支部長、そして丹下事務局長をはじめとする愛知県立大学の支部事務局の先生方の好意あふれるご協力・ご尽力のおかげである。JACE T本部役員の諸先生、他支部役員の先生方のご指導・ご協力と合わせて、ここに深く感謝申し上げる次第である。

なお、その小野氏（新支部長）を中心に、1年半ほど前から error analysis のプロジェクトチームが発足し、さらに昨年後半からは、reading strategy に関する2番目のプロジェクトチーム

が、竹内政雄氏（桜山女学園短期大学）と若い3人の方々によって発足し、秋の全国大会でそのテーマでシンポジウムも企画されていることは、真に喜ばしいことである。支部会員の中に特に若手の学究が、このような形で支部の企画に参加して下さることが、中部支部の発展のためにもたいへん望ましいからである。今後いっそうの中部支部の発展を祈りつつ、筆を置くことにしたい。

（田中春美）

#### (4) 関 西 支 部

関西支部は1962年のJACE T発足後、丁度10年経った1972年に発足した。もっともそのための準備活動はその2年前にさかのぼるし、結成の動きとなればそれより1、2年前からのことであったが、そのあらましについては、今年1992年6月に刊行された関西支部紀要1号（20年の記録）に記載させていただいたので重複を避けたい。ただ、設立に加わった者の一人として言えることは、設立に当たっては関西式リアリズムに徹し、万が一にも竜頭蛇尾に終わることのないように慎重に期し、後発の学会の支部づくりとして辞を低くして組織固めをしながら離陸したことは確かである。発起人集会をもった後、4回の研究集会を開き、それに共鳴する同好の士を核として、ようやく一年後に正式に支部発会式をもつたのであった。この4回の研究集会の内、お忙しい小川先生に2回も来ていただき、先生の広い視野と深い体験にもとづいたあの熱いスピーチをいただき、又その頃イギリスではじまった、Open Universityの話などを興味深く聴いたことでもあった。発会式には、会場として支部長大浦先生の勤められる京都大学が使用できず、（その前年の第2回研究集会でも、紛争のため、直前になり会場変更を余儀なくされていた）その代りに、京都市内の最も便利な位置にある平安女学院短大の校舎をお借りした。学会活動に極めて理解の深く気宇壮大、闊達な気性をもち、京都大学の職をさっさと辞して平安女学院院長兼学園理事長として活躍しておら

れたアメリカ文学の酒井健三先生がおられたからである。この亡くなられた小川先生、酒井先生の熱と愛の言葉で発会式は始まったのであった。

当時の大学英語教員の間で、JACE Tの知名度はまだまだ低かった。夏のセミナーに参加した人たちはともかく、一般には殆んど知られていなかった。学会のパンフレットと、小川先生の書かれた特色のある入会募集の案内書を、近畿7府県と岐阜、福井、岡山各県にある計約300の国公私立の大学・短大・高専の英語教員に発送し、宣伝これ努めたことでもあった。現在のように名票を封筒に貼るのと異なり、一人一人の名前を手書きで封筒に書く作業である。しかも事務員などはないからこうした仕事はすべて事務局の夜なべ仕事ということになった。その後入会していただき関西支部の有力な会員として活躍された方が、その頃行われた学会後の懇親会で洩らされた次の言葉は、恐らく当時の大方の大学英語教員が思っていたことであろうが、それにしても、その後長い間、その言葉は私の胸にずっとつきささつたままであったことも思い出す。この方は別に含むところがあつておっしゃったのではないのだが。「JACE Tというのは一体どんな人たちの集団なんですか？文学でも語学でもない中途半端な人たちの集まりだと思ってましたがね」

そしてこの気持は、その後コロンビアの Teachers College に行った時、コロンビア大学と Teachers College の間にある道路を指して The

widest street in the world と冗談まじりに言われた Director の言葉を聞いた時に蘇った。また U C L A の英文科の Vice-chairman プレイター教授の許で一年過ごした期間、faculty center での昼食で、T E S L Department のスタッフは固まって食事をとり、むこうの方で大勢で賑やかにやっている他の英文学専門のスタッフとは交流が殆どないのをつぶさに観察した時にも、何か釈然としない気持がしたものであった。日本の大学で英語を教える教員の大半が英米文学を専攻した人たちであることを思う時、改めて J A C E T の使命とその対応方法を感じさせられたのであるが、この問題を論ずるのは別の機会にゆすることにしたい。

ともかくこうして1972年6月、関西支部が発足し、2年後の1974年から全国大会を東京と交互に関西でもつことになった。1974年10月6日、再び平安女学院短大をお借りして5室18名の研究発表が行われ、「大学英語教育と制度改革」というタイトルでシンポジアムが開かれた。すでに発足していた筑波方式と、発足直前の大阪大学言語文化部が取り上げられた。（翌年には平泉・渡部両氏による英語教育論争があった）こうして1976年には関西大学、1978年には竜谷大学、1980年には当時はまだ関西支部の傘下にあった岡山地区、ノートルダム清心女子大において、1982年には同志社女子大で、隔年に関西で全国大会が開かれていた。1983年からは開催地は全国規模のものとなり、J A C E T の組織もそれに応じて飛躍的に拡大していった。又それまで毎年東京でやっていた夏のセミナーを1984年には京都で開いたこともあった。日本ではまだ比較的等閑視されていた Testing を中心テーマに据え、Stylistics や情報工学の最前線の研究者たちを講師に迎え、40人の受講者に満足していただけたセミナーであった。すでに支部でも発足以来10年を経過し、支部長も草創期の活動をリードしていただいた大浦幸男先生から安藤昭一先生に代っていた。1981年4月から1990年6月までの9年間は、J A C E T も成長期であったが関西支部も多忙な時期であった。春秋の支部大会に加えて毎年地区別に担当していただく談話会を年数回開くことになった。大会ではゆっくりと勉強できない

ことを、もっと地道に研鑽し合う会である。これに加えて、80年代になると、外国の学者たちがひんぱんに日本を訪ねるようになり、日本に来れば京都のたたずまいを一回見たくて彼ら、彼女らは必ず京都にこられた。関西支部ではこうした機会を捕らえて講演会を必ずもつことにした。評議員と研究企画委員とで構成する運営委員会を随時開いては、次々と講演会や workshop を企画して、会員の便に供していった。経費を節減するために British Council や J A L T 、L L A 、J E L E S 、そして大阪大・大阪外大・神戸大がメンバー校である日米文化系学術交流センターなども緊密な連絡をとって、共催にする会もしばしば持ったことである。多い年には1年で15～16回にも及ぶ講演会や研究会の案内を支部会員に発送したこと也有った。世界各国から来るこうした学者たちの講演会を聴くだけでも、欧米の学会の雰囲気が感じられたものである。

安藤支部長時代は、組織の拡大と共に専門分化の方向へも進んでいった。そもそもJ A C E T は、その目標として大学の英語教育の改善という大きな問題をかかえていたため、その会員たちの専攻分野も多岐に分かれていた。学園紛争の沈静化、社会の安定化、国際交流による学術研究の促進等々の理由により、分化発展が急速に進み、学問の専門化が強まってきたのである。学会も単に発表する場を提供するだけではなく、学会でなければ出来にくい専門分野に分かれた共同研究活動が望まれるようになってきた。そこで安藤支部長が発足させたのが10分野に亘るプロジェクトチームの結成であった。このプロジェクトチームは大谷支部長の時に再編成され現在に至っている。すでに各チームとも研究活動の中間発表を終えて finish の段階に入っている。

そして最後に出てきたのが組織・規約に関する提案であった。1987年の京都産業大学における全国大会の評議員会の席上提起されたこの問題は、その後何回にも亘って召集された規約委員会での労作が実を結び、1990年神田外語大での全国大会の総会で決定されたことはまだ記憶に新しいことである。関西支部にあっても、安藤支部長からの提案のあった支部規約が、1990年大谷支部長

に引き継がれ運営委員会の審議を経てあっさりと決定された。1990年7月20日付で施行されることになったこの規約では、支部役員の任期を一応2年と定め、幹事を複数化し、毎年1回総会を開くことを明文化して形をととのえることとした。実質さえあれば形式などはどうでもいいと言ってきた20年が経過し、大谷支部長が支部紀要1号で冒頭言っておられるように、これでやっと成人に達したということであろう。

1991年、はじめての北海道大会において、Mr. JACETともいべき、発足時から中心的役割を演じてきた小池生夫氏が第4代会長になられた。誠に結構なことだと思う。今やJACETも全国ネットワークを持ち形式・内容共にととのってきたと言えよう。新しい酒は新しい革ぶくろに入れなければなるまい。

しかしながら今や日本の大学における英語教育は、最大のまがり角にきているのである。カリキュラムの大綱化、一般教養課程の廃止、語学必修8単位の撤廃などにより、各大学の現場では、実質的には語学の教育担当者の軽重が問われているとも言えよう。語学教育における最終的な問題は「教師」であるように、JACETの究極の目標は日本の大学の英語教育の改善にあるのであれば、ここは一つ初心に返って現場をよくよく見つめるべきでもあろう。組織のみが拡大化しその内容たる「人」の活力が低下する時には、組織はきっと崩壊するものであり、崩壊する組織が最後に世に出す産物は、微に入り細に入った規程をもうけた組織の規約の改訂版であるときく。

自らかえりみて、この20年間にずい分色々な方にお世話になり又御教示にあづかったと思う。深く深く感謝するのみである。その教えを胸に畳みこんで自戒し、今後とも発展していくJACET会員の一人として、英語教師の仕事に取り組んでいきたい。

(多田 稔)

### 成年をむかえる関西支部

沖縄の日本復帰の翌月に発足した関西支部は、本年6月24日に満20年の誕生日をむかえる。支部も成年に達するとなると、当然それ相応の整備

が求められることになる。

### 支部規約の作成

関西支部は発足以来、規約というものをまったくもたなかった。支部長、顧問、幹事、評議員、研究企画委員の全員で構成する支部運営委員会ですべてがはかられ、それでさしたる不便はなかった。

しかし、支部会員が増え（本年4月現在423名）、組織が拡大し、支部活動も多岐にわたるにつれて、この種の直接民主主義もおのずから一定の限界をもつにいたる。平成2年7月、支部発足18年目にしてはじめて、全10条からなる正式の支部規約をもつことになった。

役員の任期を、はじめて2年と定めた。できるかぎり多様で有能な新しい人材を運営委員会にむかえ、支部活動をいっそう活性化するためである。幹事の複数化に踏みきったのも、支部発足以来ほぼ20年間、煩雑な裏方の仕事をほぼ1人で黙々とひきうけてこられた多田稔氏を、もはやこれ以上わざわざすることは忍びなかったからである。支部大会の際に、同時に支部会員が一堂に集う総会をもつことも正式に定められた。

### 研究グループの再編

年2回の支部大会、隨時行われる講演会と談話会のほかに、学会としての日常の研究活動を強化するために、昭和61年、主として運営委員の有志を中心にして、13の多様な研究グループが生まれた。この研究グループの成果は、すでに全国大会などでも、いくつかのシンポジアムを組んで発表された。

さらに平成2年10月には、この研究グループを改組して、広く支部大会の全会員に対して研究活動への参加を呼びかけた。今後は研究期間も1期を2年と限り、2年の期限の終了ごとに、各グループの研究成果を公表することを原則とした。早速、平成5年春には、その成果をまとめた100ページばかりの冊子を出す予定で、すでにその準備にとりかかっている。当支部のこんな研究活動が、さらに各支部相互の研究交流にも発展すればというひそかな願いもある。

各研究グループ名、参加者数と、その責任者名

は以下の通りである。

### J A C E T 関西支部研究グループ 第2期（1990—1992）

研究テーマ	人数	代表者
学習英文法	12	前川哲郎（滋賀大）
Oral Interpretation	6	上田依子 (平安女学院短大)
Discourse Analysis	20	橋内 武 (桃山学院大)
CAI	22	藤井健夫 (関西外国語大)
聞き取りテスト	9	杉森幹彦 (金蘭短大)
文学教育	16	山本利治（京都大）
海外の外国語教育	19	竹内慶子 (京都外国語大)
中学・高校・大学の連携	15	小田幸信 (同志社女子大)
英作文指導	10	一瀬昌夫 (帝塚山短大)
教材開発	19	浜田佐保子 (聖隸学園聖泉短大)
10グループ	計148名	

なお、1992年度より、これらの研究グループから各1名の若いアクティブなメンバーが研究企画委員に加わり、運営委員会も大幅に若返ることになる。すでに研究グループは、支部活動の事実上の大きな推進力になりつつある。

### 20周年記念行事

本年6月13日に開催の支部大会は、支部設立20周年記念大会となる。会場も、昭和46年2月、第1回支部設立準備会を開いた京都・御車会館にほど近い大谷大学とした。

研究発表のほか、各研究グループの中間発表も行われ、また当日の講演者にはRonald Carterをむかえる。シンポジアムは、とくに「中学・高校・大学の連携—英語教育の現状と展望ー」と題した。20周年の節目の年に、単に大学だけではなく、広く中学・高校とのかかわりにおいて、あらためてわが国外国語教育の探し方をふりかえり、あるべき行く末を展望しようとするこころみである。

この20周年を機会に、関西支部では支部独自の「研究紀要」を出すことにした。その第1号は、関西支部20年の活動の記録集として、20周年記念大会の当日に出来る予定である。

(大谷泰照)

## (5) 中 国 ・ 四 国 支 部

### 1. 支部の誕生とその背景

中国・四国支部が記念すべき第1回大会を開いて、関西・中部・東北に継いでの支部として産声を発したのは、1984年6月3日(日)のことである。だが支部誕生の背景には、2つの経緯があったことを思い起こさねばなるまい。

第1に、1980年10月25日(土)・26日(日)に岡山のノートルダム清心女子大学で第19回全国大会を開いたことである。それまで、全国大会は東京圏と近畿圏の間を交替で行き来していたのであるが、この年はじめて中国地区に開催地を移したのである。もっとも、当時はこの地区に支部はなかったから、関西支部が引き受けたものであり、主に開催校の小田朗美と橋内の両会員がお世話をさせ

てもらったのである。小川芳男会長の出身県ということもあり、地元岡山の大学関係者からの暖かい励ましと力添えが得られたのは、何よりであった。この大会を機に中国・四国地区の会員同士の輪は広がり、絆が強固なものになったかに見えたが、支部結成にまでには至らなかった。

第2に、合宿形成によるJ A C E T 夏期セミナー(八王子・大学セミナーハウス)を挙げなければならぬ。これに幾度も参加した熱心な会員が数人いたことである。そのような会員が支部結成には機動力を發揮した。具体的には、1983年の夏期セミナーに井門義男(愛媛大学)と橋内武(ノートルダム清心女子大学)が揃って参加していたが、小池生夫理事が支部結成を二人に強く要請した。

そこで両人の相談の上、8月中にしかるべき研究企画委員候補若干名（その中には八王子セミナーの経験者である今井光規、小田朗美、柏瀬省五、塩入徹、中村浩路や五十嵐二郎が含まれる）を推薦し、本人の内諾と理事会の了解を取りつけた。これで支部結成の準備が整った。

まずは、その年の全国大会前に研究企画委員による支部発足準備会議を開き、支部長候補を片山嘉雄に絞り、第1回支部大会の計画を立てた。それまでのいきさつから、橋内武が支部幹事（事務局）を引き受けこととなった。事務局を補佐する意味で井門義男と中村浩路にも幹事になっていただいた。

支部大会での研究発表は公募にすることにし、支部会員には「お知らせ」を送り始めた。3月に第1回支部大会に向けての準備会議を開き、プログラムを決定した。つぎのように研究発表・講演・シンポジウムを含むものであり、その後の支部大会の路線を敷いた。

## 2. 支部大会—第1回から第9回まで

第1回大会のプログラムは下記の通りである。

日時 1984年6月3日(日)

会場 岡山市・ノートルダム清心女子大学

講演 Leo Loveday, 'Sociolinguistics and the Teaching of English in Japan'

### 研究発表

(1) 田中廣明「程度副詞 completives について」

(2) 沼野治郎「New Journalism の特徴—'In Cold Blood' と 'The Executioner's Song' を読んで」

(3) 小田朗美「講読授業における対訳日本文について—一日英構文の転換と訳文の切れ目を中心にして」

(4) 小西廣司「中等英語と大学英語の連続性を求めて」

### シンポジウム

テーマ：「高校英語と大学英語の接点」

講師：安藤昭一、能登原昭夫、田鍋薰、小池生夫  
懇親会

本部からは小川芳男会長と小池理事が参加した。  
他の地区からも支部長（安藤昭一）や幹事（田中

春美・多田稔）や評議員（筧寿雄）などの有力会員が駆けつけ本支部の出発を祝福してくださった。

その後、例年6月上旬に大会を開いて今日に至っている。会場は、中国四国の各県の会員に平等に世話をもらえるよう、回り持ちの当番制を施している。以下、第2回大会以降については、紙幅の都合で日取りと会場と研究発表者、シンポジウムの題目と講師、講演の講師と演題のみを記す。

第2回：1985年6月2日(日)

会場 香川県志度町・徳島文理大学香川校

研究発表 小西、原田、那須、奥村、藤森

シンポジウム「コミュニケーションを目指した英語教育」（益田出、中村浩路、五十嵐二郎、横井義則）

講演 Wilga Rivers (Harvard University)  
'Interaction as a key to teaching for Communication'

第3回：1986年6月1日(日)

会場 山口県徳山市・徳山大学

研究発表 中光、田中（晶）、政村、塩入、井門、河口、松藤

講演 Glenn D. Hook (岡山大学)

'The militarization of language'

シンポジウム 「英語教育と国際理解」（橋内、宮崎、後藤田、石川）

第4回：1987年6月7日(日)

会場 愛媛県松山市・愛媛大学教育学部

研究発表 上斗、森、山田（純）、門田、塩入、塩見、山田（克）

講演 Kevin R. Gregg (松山商科大学)

'Can there be a second language acquisition theory?'

シンポジウム 「第二言語習得の理論と実際」  
(松畑、藤森、縫部、高島)

第5回：1988年6月5日(日)

会場 広島市・広島大学学校教育学部

研究発表 柳瀬、西田、柏瀬、吳、塩入

講演 Lawrence Schourup (神戸大学)

'Discourse connectives: overcoming obstacles'

シンポジウム 「談話分析と外国語教育」（橋内、西光、芝田、岡崎）

- 第6回：1989年6月4日(日)  
 会場 徳島県鳴門市・鳴門教育大学  
 研究発表 平岡、田中(廣)、Michel Higgins、  
 Kip Cates  
 講演 Richard Berwick (神戸商科大学)  
 'Task, talk, and teaching English as  
 a foreign language in Japan'  
 シンポジウム 「英語の授業：その研究と実践」  
 (田鍋、波多野、小田、国吉)
- 第7回：1990年6月9日(日)  
 会場 岡山市・就実女子大学  
 研究発表 毛利、藤森、井沢、R. Reinelt、柏  
 瀬、三宅(亨)、佐生、田淵  
 シンポジウム 「大学英語教育の原点を問う」  
 (片山、河上、田鍋、柏瀬、森住)
- 第8回：1991年6月9日(日)  
 会場 鳥取市・鳥取大学教養部  
 研究発表 越智、阿部、林、松藤、沼野、小西  
 シンポジウム 'Global Education, Foreign  
 Instructors and College English Teaching'  
 (Kip Cates, Michael Higgins, Michael Bedlow,  
 Jerry Fox, Rudolf Reinelt)
- 第9回：1992年6月21日(日)  
 会場 高知市・高知大学教育学部  
 発表 伊藤、小野、越智、清水、高垣、橋内  
 講演 Donald Wardhaugh (Univ. of Tronto)  
 How Conversation Works  
 シンポジウム 「大学の英語教育改革にどう対  
 処するか」 (柏瀬、太田垣、能登原、井門、伊  
 部)
- 第10回：1993年6月（日時未定）  
 会場 岡山市・山陽学園短期大学
- 第11回：1994年6月（日時未定）  
 会場 山口県下関市・梅光女学院大学  
 以上各大会のプログラムを列挙した。第3回の  
 松山大会以来、支部役員会のみならず懇親会を前  
 日の晩に行うようになった。前日のため帰りを気  
 にせずに懇親の宴がもて、当日の日程に余裕をも  
 たせることができるため、好評である。
3. 支部例会—第1回から第22回まで  
 支部大会の他に支部としては、例会と講演会を
- つぎつぎに開いた。まず、例会の記録はつぎの通  
 り、開催日と発表者（または講師）を記す。会場  
 は特に断らない限り、岡山のノートルダム清心女  
 子大学である。
- 第1回 1985年12月25日(水)  
 岡山オリエント美術館  
 井門義男、藤原  
 第2回 1986年3月8日(土)  
 林 英生  
 第3回 1986年5月31日(土)  
 有働真理子、石川祥一  
 第4回 1986年9月18日(木)  
 橋内 武  
 第5回 1986年12月26日(金)  
 藤森和子、宮脇弘幸  
 第6回 1987年3月7日(土)  
 中村純作、J. J. McGovern  
 第7回 1987年6月20日(土)  
 村田年、八村伸一、土家裕樹、田中広明  
 第8回 1987年9月19日(土)  
 橋内 武、John Wilson  
 第9回 1987年12月26日(土)  
 芝田征二、河上道生  
 第10回 1988年3月12日(土)  
 橋内武道、蘇 徳昌  
 第11回 1988年6月25日(土)  
 辻 星児、原川博善、Beveley Hong-  
 Fincher  
 第12回 1988年9月17日(土) 岡山女子短大  
 浦上典江、垣田直巳  
 第13回 1988年12月26日(土)  
 岩崎嘉蔵、能登原昭夫、遠山 淳  
 第14回 1989年3月11日(土)  
 沼野治郎、高塚成信  
 第15回 1989年12月26日(火)  
 小田朗美、赤松佳子、田淵博文  
 第16回 1990年3月18日(土) 岡山県立短大  
 柏瀬省五  
 第17回 1990年9月30日(日) 岡山県立短大  
 小西広司、田淵博文、能登原昭夫  
 第18回 1990年12月26日(水)  
 松谷 緑、能登原昭夫、橋内 武

第19回	1991年3月23日(土)	岡山県立短大 平岡禎一、中村純作	John R. Ross
第20回	1992年10月5日(土)	松山シャトウテル宿泊 シンポ「中高大の連携について」能登原昭夫 「大学の英語教育改革にどう対処するか」 太田垣正義、柏瀬省五	5月25日(月) Charles Fillmore 6月3日(水) Kenneth Christian 10月15日(木) Frank R. Palmer 11月8日(日) Gerhard Nickel 11月18日(水) Catherine Walter
第21回	1992年12月27日(土)	Saya Woods、鳥越秀知	1988年7月29日(金) John C. Wells 8月27日(金) Mark Landa 11月13日(日) Michael Long Charlene Sato
第22回	1992年3月28日(土)	岡山県立短大 橋内 武、橋高榮一、中村浩路 発表内容は、英語教育と応用言語学を中心とした つつも、英語学、英文学などの領域のさまざまな 研究発表・研修報告や講演・シンポジウムなどが 行われた。	1989年9月20日(水) 就実女子大学 Roderic A. Jacobs 11月3日(金) 岡山県立短期大学 Dumien Tunnacliffe 11月19日(日) 就実女子大学 Jan Startvik
		4. つぎつぎに講演会一合わせて36人の講師 来日した言語学者や語学教育の専門家を迎えて の講演会の方は、つぎの通りである。これも多い ので、開催日と講師のみ掲げる。会場は特記しな いかぎり、岡山のノートルダム清心女子大学。	1990年5月27日(日) 就実女子大学 Neil V. Smith 6月21日(木) 就実女子大学 Kathleen M. Bailey 7月7日(土) 岡山大学教養部 Eugene Winter
		1984年7月4日(水) Marjorie Harmann 7月21日(土) Dereck Bickerton 7月30日(月) John Oller 11月10日(土) Geoffrey Leech 11月20日(火) Michael Swan 11月30日(金) Jack Richards	1991年11月25日(月) David A. Wilkins 12月2日(月) 同上 鳴門教育大学 12月3日(火) 同上 愛媛大学教育学部
		1985年7月17日(水) David Crystal 9月17日(火) Peter Veney 10月31日(木) Keith Johnson	以上の記録から、1984年に6人、85年に3人、 86年に9人、87年に6人、88年に4人、89年に 3人、90年に3人、そして91年には1人（計36 人）の講師を中国・四国支部に迎えたことが分か る。このような講演会開催を可能にしたのも J A C E T の支部ネットワークが確立していたから のことである。資金の上では、ノートルダム清心女 子大学や就実女子大学などの大学や地元の団体の 御援助に負うところであった。記して感謝の意を表 したい。
		1986年1月17日(金) Alan Dundes 7月20日(日) 中国短期大学 John Sinclair 10月18日(土) Hermann Parret 11月9日(日) Einar Haugen 11月20日(木) Jeremy Harmer 11月25日(火) Martha Pennington 11月25日(火) Adrian Doff 11月28日(金) Michael Halliday 12月7日(日) 岡山YMCA David Brazil	5. J A C E T瀬戸大橋を渡る 「J A C E T瀬戸大橋を渡る」というキャッチ フレーズの下に、1988年9月23日(金)24日(土)25 日(日)には第27回全国大会を善通寺の四国学院大 学と善通寺市民会館で開催した。「日本とアジア
		1987年5月23日(土) 就実高等学校	

の英語教育」という大会テーマを掲げて、シンガポールと韓国から研究者（Catherine Lim、裴亮瑞）を招いて、講演やシンポジウムを行ったのは、JACE T史上正に画期的な出来事ではあった。この大会では本支部からはシンポジウムに橋内武、西沢嘉一郎、太田垣正義、五十嵐二郎が講師として参加、私の授業は中村純作が担当した。研究発表には、柏瀬省五、藤森和子、小林ひろ江、小西廣司、中原功一朗、Patricia Dissosway、Philip Popescu、Rudolf Rinelt が加わり、地元中国四国支部会員の活躍を目立たせた。

## 6. 年2回のニュースレター

ニュースレター（Newsletter）の発行も支部活動の一つである。総頁数10頁～34頁という小冊子であるが、85年7月以来、年2回定期的に7月と12月に発行されている。編集には、号にもよるが、中村・柏瀬・橋内のいずれかが当ってきた。以下各号の発行日と巻頭言の題目を記す。

- No. 1 1985年7月20日 (巻頭言なし)
- No. 2 1985年12月25日 駐英大使の年頭所感
- No. 3 1986年7月1日 支部活動を軌道に乗せ
- No. 4 1986年12月26日 サ・エ・ラ
- No. 5 1987年7月30日 会長に再任されて
- No. 6 1987年12月26日 善通寺で全国大会を
- No. 7 1988年7月29日 JACE T瀬戸大橋を渡る
- No. 8 1988年12月26日 「語学研修旅行」
- No. 9 1989年7月26日 第6回支部大会報告
- No.10 1989年12月26日 英語教師とコンピュータ
- No.11 1990年8月4日 大学英語教育の原点
- No.12 1990年12月26日 セミナーはJACE Tの命
- No.13 1991年7月20日 鳥取大会を振り返って

## No.14 1991年12月21日 裏窓から

小誌の内容は、基本的に支部活動（支部大会、例会、講演会）の記録であり、それに巻頭言、小論、提言、雑録が加えられる。だから、この「支部年代記」を書く上での資料として役に立った。

## 7. 支部長と幹事（事務局）の交代

ところで、支部長は第6回大会（1990年6月9日）の終了後に片山嘉雄から井門義男に引き継がれた。幹事（事務局）の仕事はそれより一足早く1989年3月末に橋内武から中村浩路の手に移った。この交代劇の結果、若干活動状況が変わったことは否めない。まず、年に4回（3月、6月、9月、12月）に行っていた支部例会が3回に減ったこと、講演会の年間開催回数も減ったこと、支部大会に講演が行われるとは限らなくなってしまったこと。他方、新たに宿泊シンポジウムを開いたり、同じゲスト講師が地区内の別々の大学で講演をしたり、というような新機軸が生まれた。支部大会の日取りを第1日曜にする原則も、会場校の都合で6月の適当な週末ということになった感がある。

支部発足後、今日までに支部会員は約100人から約140人に増えた。この間に2人の評議員（水田巖と増野正衛）と研究企画委員の加藤元文が他界した。

支部の学会活動は山陰2県・山陽3県・四国4県を含む9県という広域性と会員数140人という小さな規模だから、なかなか思うほど活発には行なえないものではあるが、全国大会や講演会などの受け皿として組織の力を發揮することができたのは、支部あってのことであったろう。記念すべき第10回支部大会を来年に迎え、さらなる発展を期したいものだ。

(橋内 武)

## (6) 九州・沖縄支部

設立以前：九州・沖縄地区的会員はJACE Tの発展と共に着実に増え、特に夏期セミナーが回を重ねるにつれて急速に増えていった。またごく早い時期に、九州大学教授であった渡辺春吉氏が評

議員になり、後には、福岡教育大学の吉田一衛氏も評議員に加わった。しかし地区会員の意志を集約するような組織的なものは何もなかった。

1983年10月2日(日)支部設立準備開始：

小池生夫理事から、福岡地区の一部会員に対し、支部を作る意志があるなら助力を惜しまないという話があり、これに応じた九州大学の宮原文夫氏と岡秀夫氏が研究企画委員に任命されて、支部設立の準備を会員に呼びかけ、10月2日に設立準備委員会を結成、以後2回の準備委員会を持って39名の発起人を獲得。

1984年3月20日(日)支部設立発起人会発足：24名の発起人が出席、以後2回の会合によって設立総会の準備を完了。

1984年7月8日(日)支部設立総会兼第1回支部大会：福岡市の「はかた会館」において開催。小川芳男会長、小池生夫、松山正男両理事を迎へ、九州・沖縄地区の70名を越える会員が集まつた。経過説明のあと、支部規約を採択、林哲郎支部長、福田昇八副支部長ほか19名の運営委員と2名の監事を選出。事務局担当は宮原文夫、岡秀夫の両氏とする。続いて活動方針を採択、支部予算を承認して総会を終了、このあと、小川会長の祝辞に続き、記念行事として福岡アメリカンセンター館長 William Crowell 氏の講演

"English : Is Just Learning the Language Enough?" および、小池氏、松山氏、藤田剛正氏、岡秀夫によるシンポジウム「大学における英語教育の目的と目標」を開催。

1984年11月11日(日)第1回学術講演会：支部最初の学術講演会は、英語学者 Geoffrey Leech 氏を招いて、"New Methods in the Study of English Grammar" という演題で、九州大学教養部で開かれ、九州各地から80名が参集。

1984年12月31日(日)支部ニュースレター創刊：

設立行事および講演会を中心にして8ページ。

1985年7月21日(日)第2回支部大会：

福岡市の市民会館国際会議室で開催。シンポジウム「大学英語教育における教材」（講師は吉田徹夫、畠山均、兼本円、中村春巳の4氏）のあと総会（本部より田辺洋二理事が出席）。特別講演は David Crystal 氏の "Current Problems in English Usage and Teaching"。約60名が出席。

1986年3月支部ニュースレター第2号発行

1986年4月20日(日)第1回研究会：

福岡市民会館小会議室にて「最近の外国語教授法理論—Krashen の Monitor Theory」のテーマで神本忠光、山本広基、Glenn Gainer の3氏が発表。

1986年7月28日(日)第3回支部大会：

福岡市の「はかた会館」において開催。シンポジウム「大学英語教育の実践 — リスニングを中心として」（講師は、柴田悦子、浜田洋子、Glenn Gainer の3氏）、総会（本部より奥津文夫代表幹事出席。役員を改選し、事務局に山中秀三、中村春巳、井戸修の3氏を選任）に続いて、John Sinclair 氏による特別講演 "Discourse Analysis — With Reference to Language Teaching" が行われた。

1986年11月23日(日)第2回学術講演会：

バーミンガム大学 David Brazil 教授による講演 "The Communicative Role of Intonation in English" を博多グリーンホテルで開催。

1987年3月支部ニュースレター第3号発行

1987年6月7日(日)第4回支部大会：

福岡市民会館にて開催。研究発表は、坂本育生氏の「鹿児島大学教養部：英語教育アンケート調査報告」、中村敦子氏の、「一般教養課程におけるコミュニケーション・アプローチ」、武井俊詳氏の「実務英語教育：英語の実践教育の機会」、入部兼治氏の「英語形態論の最近の動向」が行われた。総会（本部より奥津文夫代表幹事出席）について、ヴァージニア大学 in Kenneth Chastain による学術講演 "Examining the Role of Grammar Explanations, Drills, and Cognitive Exercises in the Development of Communication Skills" が行われた。

1987年12月6日(日)第3回学術講演会：

長崎大学の Ronald Gosewisch 氏による講演 "Comprehensive Skills Program in a University Curriculum" と AILA 名誉副会長シュツットガルト大学の Gerhard Nickel 教授による講演 "Contrastive Linguistics, Error Analysis and Their Relevance for FL Teaching" を西南大学にて開催。

1987年12月13日(日)第4回学術講演会：

イリノイ大学牧野成一教授による講演「日英両語の関係節の機能的分析」を福岡大学セミナーハウ

スで開催。

1988年3月支部ニュースレター第4号発行

1988年6月19日(日)第5回支部大会：

福岡市「KKRはかた」で開催。研究発表として島谷浩氏の「モニター理論の検討」、井狩幸男氏の「意味の獲得と外国語習得」、Tamah L. Nakamura氏の“*A Communicative Approach to the Japanese EFL Classroom*” 平良辰夫氏の「種々な社会的場面におけるCAI英語学習：ソフトウェアの研究開発」、中村良廣氏の「EIL再考：日本人学者にとってのモデルとしての目標」、森本陽子氏の“*Implementing Self-Access Pair Learning in a College Curriculum in Japan*”が行われた。総会（本部より奥津文夫理事が出席。役員を改選し事務局に村上隆太氏、武井俊詳氏を選任）のあと神戸大学 Dr. Lawrence Schourup 氏の学術講演 “*Connecting English : The Equivalence Problem*”が行われた。

1988年11月23日(水)第5回学術講演会：

ハワイ大学の Michael Long 教授による講演 “*Some Implications of the Second Language Acquisition for Language Teaching*” を福岡市早良市民センターにて開催。

1989年3月支部ニュースレター第5号発行

1989年9月22日(金)・23日(土)・24日(日)全国大会：

九州で初めて JACE 第28回全国大会が西南大学において行われた。「英語教育の多様性」をテーマに掲げ、特別講演・シンポジウム・研究発表等きわめて充実した全国大会であった。

1989年11月13日(月)第6回学術講演会：

ロンドン大学 J. C. Wells 教授による講演 “*A New Dictionary of English Pronunciation*” を福岡大学セミナーハウスで開催。

1989年11月20日(月)第7回学術講演会：

Jan Svartvik 教授による講演 “*On the Study of Spoken English*” を九州大学教養部で開催。

1990年3月支部ニュースレター第6号発行

1990年7月1日(日)第6回支部大会：

熊本商科大学にて開催。研究発表として林日出男氏の「ESL学習者の Learning Strategy」、森千鶴氏の「書き写し活動の諸相と英語力」、井狩

幸男氏の「心理言語学の今後の展望について」、金城守氏の「認知心理学の理論による俳句の国際的文学性の分析」、佐藤勇次氏の “*An Application of Speech Principles for the Development of Students' Communicative Competence*”、谷口雅基氏の “*English Speech Rate and College EFL Learners' Auditory Perception*”、Maw Paul 氏の “*Essential Intonation*”、Lee William 氏の “*Does a Western World View Exist?*” が行われた。総会（本部より松山正男理事出席。役員を改選し、支部長福田昇八、副支部長宮原文夫、事務局に名本幹雄、小木野初、中村良廣、谷口雅基氏の諸氏を選任）の後 John Honey 教授による講演 “*What's Happening to the Pronunciation of English?*” が行われた。

1990年7月8日(日)第8回学術講演会：

Dr. Eugene Winter による講演 “*The Meaning and the Metalanguage of English*” を西南大学にて開催。

1990年10月6日(土)支部プロジェクト検討委員会発足：

本支部の地理的条件を生かして、学生の英語力を韓国、中国の学生と比較検討する目的で検討委員会を発足させた。以後10回に及ぶ検討委員会を開いた結果、次の4点を骨子とするプロジェクト案を決定した。1. 教養課程の学生の英語力を聴解、読解、語彙、表現力の4面にわたって調査し様々な分析を行う。2. テスト問題としては、Educational Testing Service 発行の TOEFL 受験練習用 Test Kit を使用する。3. 日本、韓国、中国の学生に同じテストを実施して国際的な比較を行う。4. 学習環境、学習態度などの要因についても同時に調査して学力との関係を調べる。以上の骨子にもとづいて、実施に伴う様々な実際的問題をあらかじめ解決するため、1991年夏に、パイロット調査を行った。

プロジェクト検討委員会——

委員長 宮原文夫 事務局長 名本幹雄

委員 木下正義、村上隆太、山中秀三、山本広基

1991年10月13日(土)支部プロジェクトチーム発足：

この日の運営委員会でプロジェクト検討委員会の

原案が承認され、検討委員会のメンバーを中心とするプロジェクトチームが正式に発足した。そして直ちに JACE T 本部に請求する予算案を決定すると共に「日・中・韓三ヶ国における大学生の英語能力に関する総合的研究」として文部省科学研究費補助金の申請を行った。このプロジェクトの本格的実施は、1992年9月、10月に九州一円の大学の様々な専攻分野の学生と、韓国、中国の学生に行う予定である。

1991年3月支部ニュースレター第7号発行

1991年5月14日(火)第9回学術講演会：

G. N. Leech 教授による講演 “What is a text? — The case of Kentucky Fried Chicken” を九州大学にて開催。

1991年6月29日(土)第7回支部大会：

筑紫女学園大学にて開催。研究発表として、横山東氏の「早期英語教育の効果に関する一考察」、神本忠光氏の “Pragmatic Competence in Japanese Learners of English: A Replication of Beebe & Takahashi(1989)” 、東条加寿子氏の「ペア・ランナー英語教育における教室の制約の一解決法」、

有本純氏の「大学における一般教育としての英語教育」、横山彰三氏の「航空大学校における英語教育—実践と課題」が行われた。総会（本部より鈴木博理事出席）の後、シンポジウムは、福田昇八氏司会で、提案者として、矢の下良子、今林隆巳、村上隆太、篠田重見、コメントーターとして鈴木博の諸氏が「中・高・大の英語教育から見た大学入試」というテーマで行った。

1991年7月28日(日)第10回学術講演会：

ハワイ大学の D. J. Brown 教授による講演 “Designing Effective Test” を West Chester University にて開催。

1991年11月26日(火)第11回学術講演会並びに研究発表会：

D. Wilkins 教授による講演 “Speech and Oral Language Teaching” を福岡大学セミナーハウスにて開催。同時に支部プロジェクトのためのパイロット調査の一部が木下正義氏、山本広基氏によって発表された。この調査結果の全容は筑紫女学園大学国際文化研究所論叢第3号に掲載される。

(名本幹雄)

## JACE T の思い出

私が JACE T のお手伝いをするようになってちょうど30年になります。語学教育研究所の事務員だった私は、語研の大会で大学部が活動していた時からのおつき合いということになれば40年になるかもしれません。語研は私が入った頃は、神田三崎町のちっぽけな事務室にあり、語研の35周年を記念して各方面の寄附をつのり、ようやく神楽坂のセントラルコーポラスへ移転することができました。

その頃大学英語協議会が生まれ、語研から独立したのです。でもまだ会員も少ない小さな団体でしたから、事務はすべて語研の仕事の片手間みたいに私と他の人々とで手伝っておりました。語研の主事の比屋根先生は JACE T の発展にお心をくだいていらっしゃりいろいろとアドバイスしたり、私たちによく手伝うようにと指図なさいました。新しい事務所は会議室もあり、JACE T の

先生方もよく会合を開いていらっしゃいました。まだ宛名印刷機もコピーもなく、宛名を手書きにし、印刷物は原紙にタイプし、謄写版で刷りました。会員が少なかったのでできたのです。大会も JACE T は金・土、語研は土・日の時があり、受付を両方しなければならず、土曜には走り回って目のまわる忙しさだったこともあります。受付に妹と並んでおりますとにこにこ笑ってそばへいらっしゃり二人と握手をなさった小川先生のお姿や、いつも、ごくろうさまとねぎらって下さった朱牟田先生や星山先生のお優しいお顔も忘れられません。

最初の小さな JACE T が今日の2000人を超す大きな会に発展したのは、大勢の先生方の惜しみないご努力の賜と存じます。これからもますますご発展なさいますように。

本部事務担当 鹿志村百合子

## 第三部 JACETの将来への展望

### JACET創立30周年記念誌座談会

日 時 1992年3月14日

場 所 大学英語教育学会本部事務所

出席者	放送大学教授	比嘉正範
	桃山学院大学教授	橋内 武
	東洋女子短期大学助教授	見上 晃
司 会	早稲田大学教授	田辺洋二
記 錄	東京大学教授	鈴木 博

田辺 今日は、『JACETの創立30周年記念誌』の編集委員会が主催する座談会でございます。ご出席の先生は放送大学の比嘉正範先生、桃山学院大学の橋内武先生、それから東洋女子短期大学の見上晃先生です。

比嘉先生にはもう古くからJACETのことでいろいろとご指導をいただいておりまして、評議員でもいらっしゃいます。JAAL in JACETの第1回目の会でお話をいただいたり、そのほか本当にいろいろな場所でお話いただいている。橋内先生はやはり評議員で、実はこの30周年記念誌の委員でもいらっしゃいます。中四国や関西の方の生き字引みたいな方で何でも知っていらっしゃいますのでおいでいただきました。それから見上先生は、実は大学時代に理科関係にいらしたことがありまして、高校の経験もおありになり、外国でも勉強され、現在東洋女子短大におられる、言うなれば異色の先生です。若手でもいらっしゃいます。

#### 過去10年の活動

では本論に入らせていただきます。ここに『創立20周年記念誌』がございますが、それをこの30年目の時点で見ますとJACETが大きく変わっている感じがするのです。まず、発足以来われわれがお世話になった先生方がこの10年にずいぶん亡くなられたということなのですね。1981年には宮部菊男先生、85年には山田和男先生、88年に初代会長の朱牟田夏雄先生がお亡くなりになっ

ている。89年には星山三郎先生、90年になると小川芳男先生、その同じ年に原沢正喜先生というわけで、関東だけでもずいぶん世代が変わってしまったという感じがするわけです。

それから去年、7年半会長をなさった梶木隆一先生が勇退されて小池生夫新会長に代わりました。支部関係のことを言いますと、20年前の1972年に関西支部ができまして、81年に東北、83年に中部、84年に中国・四国、同じ年に九州・沖縄、2年後の86年に北海道というわけで、この20年から30年にわたるところで支部が大きく増えております。会員数で申しますと、設立の1962年には120名でした。それが20年後の1982年になると、ほぼ10倍の1,200名位になった。この20年から30年の10年間にほぼ倍になります、2,200名位になっているわけです。そのような事実を踏まえて、まず、過去10年間のJACETの活動について、ちょっと振り返ってみたいと思うのですが、ご感想を橋内先生からお願ひします。

橋内 地方の各地に支部ができたということは、地方でのJACETの活動が浸透して行って、英語教育に関わる大学のみならず、中、高などの先生方とのつながりとか連携というのもそのレベルでも強化することができたということがひとつあるかと思います。それからいろいろな講演会が上京しなくとも、地方で聴くことができるようになったというのは、やはり支部を結成した結果であり、何かと恩恵に浴することができるようになったと

皆さん喜んでくださっていますね。

見上 私はちょっと過去10年間と言われると困のですが、まだJACETに入ってから10年経つておりませんので。自分の周りを見ますとまだJACETの評価というのはあまり高くはないような気がするんですね。うちの学校は英語が専門ですから英語の先生はたくさんいらっしゃいますけど、JACETのメンバーはほんの1握りですね。それからJACETの活動といつても、学会全体としての活動なのか、それとも中心になっている方々の活躍というふうに考えるのか。それによっても評価が違うと思うんです。全体としてはあまりはつきりしないのではないかでしょうか。いくつか英語に関連する団体がありますけれども、その中のひとつというぐらいの評価しか、少なくとも対外的には受けてないのではないかという気がいたします。

それから橋内先生とちょうど逆のことですが、東京では、中高の連携というのはむしろ無いのではないかでしょうか。私は他にもいくつか学会に入っていますが、そちらで中高の先生とお会いすることのほうが多くて、JACETの中で中高の先生にお会いするということはありませんね。

田辺 ああ、これは大学英語教育学会ですからね。

橋内 ひとつには地方の場合にはどの学会であれ、学会活動自身が極めてまれにしか行われてませんから、そういう中にあってひとつイニシアチブを取る団体がありますと、そこへ集まって来るということはあるわけです。だから逆に言うと他の団体なり学会が地方レベルであまり活動をしてないところで、JACETの支部が強力に動き出すと、そこへ様々な方が参入して来るということはあります。

比嘉 私は別の観点からの発言となりますが、私の見る限りでは過去30年のJACETの活動のおかげで、英語教育学が学問研究の分野として日本でいよいよ独立してきたなという感じを持っています。日本の英語教育関係の学会というのはまず英文学会がありました。その英文学会の中に英語学、そして英語教育学がありましたが、英語教育学はいつでも縦子みたいな存在だったと思います。JACETができて英語教育に関する論文の発表が多くなってきていますので、私はこれはたいへん大きな発展だと思っています。会員が約2,200名までも増えてきたということは、そこに一

種の真空状態があったと思いますし、英語の先生にかなり欲求不満な状態があったと思います。それを満たしてきた具体的な結果がこの大きな会員数ではないかと思います。これから英語教育学が研究の分野として、そして学問の独立した分野として大いに発展していくのではないかと私は楽観しています。

田辺 さて、JACETはこの10年間、大会にメインテーマを掲げてまいりました。そのトピックを申しますと、国際化、多様化、英語教育の理想、過渡期であるということ、教育改革、世界平和、社会からの要請、アジアとの連携、最近2、3年は大学設置基準の大綱化ということが大きく取り扱われてきております。このような大きな社会の動きや、世界の動きがあり、その中でJACETの活動があるわけですが、われわれの活動とその結果がどんなふうに実際に評価されたのか。われわれはそれをどのように受け止めていったらいいのだろうか。このへんについてはどのようにお考えでしょうか。

橋内 JACETを含む日本の英語教育団体がその時代時代に、ここ20年の間にどのように対応しようとしてきたか、あるいは対応せざるをえなかつたかということを表わしていると思いますね。ただ少し口を悪く言うならば、その時の時代の、あるいは年のカレントなトピックにうまいことつなげるかたちでテーマは設定したものの、実際の大会の基調講演、研究発表、シンポジウムがそれに十分正面から向き合って対応していたかどうかについては若干疑問が残ります。

見上 研究発表自体は大会のテーマというのは関係ないのでしょうね。

橋内 基調講演とひとつぐらいのシンポジウムがテーマにつながっていて、他は必ずしもそうではないという面があつたと記憶しています。

比嘉 私もほとんど毎年JACETの大会に出て、学会外のお偉い先生方の講演を聞いてまいったわけですが、毎年毎年何か一種のギャップみたいなものを感じてきました。私自身そのギャップのために一種の欲求不満の状態になっています。そのギャップと申しますのは、日本の国際化のための道具である英語教育の改善、改革にJACETは尽くして欲しいが、あの国際化そのものはわれわれがやるからというような感じを受けることです。ところがJACETは、JACETそのものも率先して国

際化に乗り出したいという気持ちを持っています。われわれは基礎作りとか道具作りの役割だけを果たせばいいのではないかという社会的な見方がどこかに、特に政治的な指導者の中にあるような感じを受けます。極端に言いますと、君たちは日本の英語教育を改善、改革できないのに、国際化とか、教育の改革とか、そんな大きなことはあまり言うなといわんばかりのJACET外の先生方が何名かおられたと思います。

田辺 大会に出てきている先生方には、おそらくそれぞれ自分に興味のある分野がある。だから国際化とか教育改革というのは誰かがやってくれればいい。私は教員の1人としてこれだけをやればいいんだ。学会があまり政治のことなどを一生懸命やっちゃうと、もう私はついて行けない。このような感想を持つ先生方がおられるのも私は見受けたのですがね。

見上 かなり中途半端だと思うのですよね。もし本当にそういうふうにやって行くのなら、例えば大会をあるテーマでやり、これについてJACETはどう思うのかその大会できちんとまとめて、対外的にアピールして行くとか、または文書にして文部省へ陳情するとかしなければいけないですね。やらないなら徹底してやらないか、やるのなら徹底してやるかですね。

比嘉 一般的のレベルでも、英語の先生は本当に英語のできる日本人を教育し、養成してくれればもうそれで大きな仕事をなし終えているのではないかという見方もあるようですね。

### 日本の英語教育にもたらした影響

田辺 たいへん興味深い方向にお話が進んできたと思うのですが、これは今後の展望のところで進め方を考えていたらしくして、次の話題に進みたいと思います。実は小池会長が『創立20周年記念誌』の中に副会長としてJACETの運動のうねりということを言っているのですね。その中で2つのことを言っておられます。ひとつは夏期セミナーに参加した人々がこのJACETのパワーをつくってきている。それをJACETスピリットと呼んでいるんですね。もうひとつは「地の塩」の運動と言っています。マタイ伝の5章の「汝は地の塩なり」(You are the salt of the earth.)ですね。塩が食物の腐るのを防ぐことから、少数派であっても批判的精神を持って生きる人をたとえて言う。こ

れが「地の塩」だそうです。おそらく小池会長はこの「地の塩」というのはそういう意味で言ったと思うのですが、JACETが英語教育の中で「地の塩」になって腐るのを防ぎ、しかも批判的精神を持ってやろうじゃないか、という気持ちだったと思うのですね。果してこの10年間にわれわれはそういう活動ができたのかどうか。

橋内 八王子の夏期セミナーの参加者がJACETのパワーになった、あるいは活力の素になったということは、地方の支部で仕事をさせてもらった限りは言えていると思います。特に支部を結成するときには支部幹事とか、支部の研究企画委員などをお願いする場合にはそういう方たちとの間のつながり、連携、ネットワークが重要でして、それがあつて初めて誕生し得た。そのような連携が今日に及んでいると思うのですね。ただ近年の夏期セミナーは、どうも昔ほどの元気さがない。

田辺 なぜだと思いますか。

橋内 私は実は大学の教員になって最初の夏に行っていたのです。1970年の7月です。まだあの頃は大学紛争の余波があり、大学を何とかしなければならないという焦燥感がひとつあったし、2番目としてはいまほど簡単に海外に夏期研修に自ら行くことはできにくかった。それがいまでは、ある意味で非常に平和で豊かになりました。平和ということは無関心さを誘うという面もありますが……。研修の機会はいくらでもあるんです。3番目として言えるのは、当時様々なところからの資金援助があったわけですね。フルブライトとかブリタニカとか。それで確かに長いときは3週間もやったわけです。いまは資金不足という状況もあり、1週間足らずじゃないですか。

田辺 まだかなりの力にはなっていると思うのですけどね。質的に変わってきているのかもしれない。

橋内 ハワイで行うとかケンブリッジで聞くとかいうときには、いろんな方が見える。ただそのときには日本の英語教育を考えることよりも、ちょっと海外研修に行ってみようかとか、あるいは英米の英語教育学なり、応用言語学の同学に接したいという面もあって行かれるのでしょうね。

比嘉 実は私も約20年前にJACETセミナーに講師でまいりました。あの頃の皆さんの真剣さとたいへんな勉強ぶりに感心し圧倒されました。し

かしいま考えてみると、あの頃、20年ぐらい前は、言語の研究の世界は大きな発展を遂げている時代だったのですね。チョムスキーの新しい生成文法論とか、心理言語学とか、社会言語学とか、いろんなものが出てきて、日本の英語の先生方もこれらを知りたいと思っていたときでした。いまではおかしくも珍しくも何でもないような分野です。私は20年前の講義をいまやりましたら、みんなに石でも投げられるのではないかと思います。

もうひとつはいまのことに関連しますけれども、英語の先生方の英語の実力がたいへん向上してきて、自分で新しい知識を獲得する力ができてきしたことだと思います。出版社の編集者と話をしましたら、20年ぐらい前までは翻訳書が売れたようですが、いまではもう先生方が直接原書をお買いになって、読んでおられるということでした。それ以外は、先ほど橋内先生がおっしゃいましたけれども、もう自分たちの力であちらこちらに出て行かれているということです。

もうひとつは、先ほど「地の塩」のお話がありましたけれども、20年前、あるいは10年前までは私は英語の先生はやはり岩塩みたいなもので、「隠れ地の塩」だったと思います。私の一番最初のコメントとダブルのですが、私たちは英文学の中の隠れた英語教育学者だったということです。いまでは、英語教育学が堂々と表に出てきたということは、JACETがたいへん大きな自信を英語の先生方に与えてきた結果だと私は思っています。

田辺 実は私がこのような質問をしたのは、この同じ20年誌の冒頭に当時の会長の小川先生がこう書いていらっしゃるのです。まず時代的な背景として、「20世紀に入り、話し言葉が重視され、口頭教授法などが呼ばれるようになった。特に第2次大戦後は応用言語学の著しい発展と共に外国語の教授法が脚光を浴びるに至った。このような時代的背景のもとにJACETが生まれた」と書いてあるのですね。その中で大学の英語教育の占める重要性として、「大学の英語教育が日本の英語教育の源泉である」と書いてあります。大学の英語教育の重要性を言っているわけですね。よく小川先生がおっしゃったのは、大学教育は日本の英語教育の生殺与奪の権を握っているというのです。

それからもうひとつ制度面にも触れ、「英語教育の改善のためには制度面にも注意を向けなければ

ばならなくなる」とおっしゃっているわけですね。そんなこともあって英文学者の中でも「隠れ地の塩」的存在で来たという歴史がありますので、いまみたいな質問をさせていただいたわけです。

## 将来と展望

次にJACETの将来と展望についてご示唆をいただきたいと思います。まず私はこれをどのように伺つたらいいかと考えまして、これまで10年間の『JACET通信』の中で今日ご出席の先生方がおっしゃっていることを探してみたのです。そうしましたところ、比嘉先生が「応用言語学としての英語教育」（第1回応用言語学研究会報告通信臨時1982年）、『英語青年』8月号の筑波大学における外国語教育の現状と問題点に関し、1文を寄せられました。その中で、①言語学者と文学者が多過ぎる、②外国語教育学もまだ充実していない、の2点は全国の大学にはほぼ共通した問題だと思う、とおっしゃってます。これは10年前であります。日本の英語教育を真剣に考え、その中で独創的な知性を發揮できるのは究極的には日本人しかいないと私は思う、とおっしゃっていらっしゃいます。

それから、1985年の『通信』の時評では、「英語教育学教授」という題で、やはり同じように英語の教員、大学の教員の重要さをお話になっておられます。今日もこれから展望の中で英語の教員のあり方をちょっとお話しいただければありがたいと思っているわけでございます。

それから小池会長が、当時はまだ会長ではないのですが、1986年に「臨時教育審議会の外国語教育振興に関する提案」というのをしておられます。その後一貫して教育問題を取り上げ、今度の大学設置基準の大綱化についてもいろいろと対応してきているわけです。

実態調査委員会では、ご存じのように『大学英語教育に関する実態と将来像の総合研究』を行い、科研費を貰って調査報告を作ってきました。これは通年で10年を越える研究になります。これはJACETの大きな運動のひとつであろうかと思います。

それから橋内先生は児童英語の教員養成をということで、1984年の『通信』でお書きになつていらっしゃいます。もうひとつ夏期セミナーのあり方についても先生は投稿なさってますね。

橋内 ああそうでしたか。

田辺 ええ。日本人の教員も全部英語でやれと書いていらっしゃいます。それから第3の英語圏と新英語。これについては実は中国・四国支部担当で行われた第27回全国大会（1988年善通寺、四国学院大学）のときに橋内先生がずいぶん頑張られて、東南アジアとの連携も図られました。このようなことも、あとでお話いただけるものと思っております。

それから見上先生のご提案には、最近の海外情報として、'computational linguistics' また 'neuro-computer' と 'Parallel Distributed Processing' (PDP)、などについてがあります。コンピュータの世界がこれからどのように広がるかの問題であるかと思います。

橋内 将来展望をするときに、このあたりでJACETの性格づけというものをもう1度考え直していく必要があると思うのですね。ひとつの考え方としてはこれは歴史的経緯から言えば、JACETは語学教育研究所の大学部会から独立した。大学英語教育協議会と昔は言ったそうですが。そういう流れはあるのだけれども、その後会員数が倍々に増えていった結果、その中身、活動内容がはなはだ多岐にわたるようになった。一面において大学の英語教育の改善、これが要にあるわけですが、それにいまの実態調査で分かるように、中高の英語教育にももちろん関心を持って、調査をし、提言をしてきました。さらには応用言語学研究会がJACETの中にあるように、応用言語学の発展のためにもJACETは貢献してきたと思うのですね。

そうすると非常に実践的な傾向と、どちらかと言うと理論に傾いた研究の側面、この2つを両極にして雑食性動物のように何でも英語教育に関わるものを取り込んできた。そしてこのような大きな所帯、大学会になつていったというわけですが、果してこのような雑食性を今後もこのままやっていけるのかどうかという点では、若干危惧が出てきている。というのは組織の肥大化に伴って、個々の会員がその特定の一面にだけ関心を持って、全体までにはとても関わりたがらないとか、あるいは実際に関われないとかいうことで、全体の方向づけができない、そういう状況に来ているような懸念を僕は持っているのです。

田辺 雜食性動物であるがゆえに日本の非常に多岐にわたる英語の環境に合ってきたのだとも言えますね。

橋内 雜食性であるがゆえに日本の英語教育のあらゆる面にJACETは関わり、あるいはそれに積極的に対応したり、提言したり、あるいは運動の力のなってきたという面はあると思うのです。このまま雑食性で行けるのかどうか、そのパワーが、特に中核になる方たちが残念ながらはっきり言って初老に入っています。若い力がそこへ入り込んで行けば雑食性はそのまま維持することができるけれど、それが必ずしもそうでなくて、若い先生方はその特定の分野なり、ご自身の専門に関心が強いように見えるのですね。だから、この雑食性がうまいことこの先進んで行けるかどうかという疑問を持っているのです。

田辺 これは非常に大きな問題ですが、比嘉先生はどんなふうにお考えになりますか。

比嘉 私はさきほどは、JACETがここまで大いに発展したということを述べたのですが、これからのことを考えますと、やはり何かどこか一抹の不安を感じます。日本の英語の先生方が英語教育、あるいは英語教育学をこれからどういうふうに考えていかれるのかということは問題だと思います。西洋的な学問の分類に従って、英語教育学をサイエンス、つまり科学的な分野と考えるか、あるいはアート、つまり技術的な分野と考えるかが問題になります。科学であれば実証的でなければならないし、理論がなければならないわけですね。成果もなければなりません。技術ということになりますと、私はこういうふうにして英語を勉強したら上手になったとか、こういうふうにして教えたらしいと思うというような、まったく個人的な経験に基づいたものになってしまいます。

私はいまこのようなことを考えていますのは、ある意味ではこれまでの言語学の理論とか、外国语教育の方法論とかが決定的で普遍的な成果というのをあげていないからです。つまり何を応用しても、何を読んでも、誰に従っても、奇跡的な成果とか効果というのは出ていません。もし出ていれば日本の中学生、高校生、大学生はいま苦しんでいるはずがないのです。何にも役に立たない、どうしようもない、これからどうしていいかわからないというような絶望感を感じると同時に、もう一方では、ここまでやってきて、これから何か新しく、さらに実証的な分野として英語教育が充実して行くのだというような気概もまた出てくるような気がします。今後JACETが日本の英語教

育界に展望や希望を与えるとすれば、何とかして実証的な科学としての英語教育学をさらに発展させる役割りを果たすべきではないかと思います。

田辺 いまの科学としての英語という部分と関係があるのですが、これからコンピュータがいろいろ関わってくると思うのです。見上先生はご専門の立場から考えて、これから英語教育のハードウェアはどんなふうになるとお考えですか。

見上 コンピュータは間違いなく社会にも学校にも入ってくる、これは間違いないですね。それで例えばコンピュータを使って英語関係の研究をするとかいうことについては、僕はちょっと多少怪しいなというふうに思っているのです。というのはアメリカでやったときに一応これは英語教育の中の一部としていろんなことを教わってきたわけですね。日本に帰ってきて、日本ではやってないと思いましたら、これは英語とは関係のないところで比較的やられているのですね。情報処理学会みたいなところで、ニューヨーク・コンピュータとか、PDPモデルですね、そういうものをやってますし、人工言語の研究とか、自然言語の解釈とか、そっちの方でやっている。そうすると本来はlinguisticsですから、われわれ英語の教員がやっていてもいいようなところをどんどん喰い荒されている。私もちょっと興味を持ってやってみたいなと思ったのですが、ニューヨーク・コンピュータなんていうのは情報処理学会でやっているような先生はどうも比較的簡単に手にはいるみたいだ。ところがわれわれがいくらじたばたしても何百万かの機械は簡単には手に入らない。もちろんこれを使ってみて下さいと持ってきててくれる人もいない。どんどんそのへんは喰い荒されているのではないだろうか。

それから国語の先生方がどの程度関わっているかはちょっと分からぬのですが、例えばその国語の先生方がいまのワープロなんかの日本語の変換方法とか、そういうような部分にどの程度関わっていらっしゃるのか。あれはどうも国語的な発想というよりはコンピュータ屋さんができるだけ早く日本語を固定するためにこういう処理をしたらいいというような部分が結構あるのですね。そういうようなところをどんどん侵食されているのではないかということがひとつ。

それから先ほど橋内先生の言われた雑食性云々ですが、これは将来の危惧というよりは、だから

JACETというところに行かなければいけないと思うのですが、いわゆる個人としての雑食性が失われているということですね。団体としては雑食なのだけど、1人1人捉えてみるともうピュアーナーどころだけ突っ走っている。しかもみんなが違う方向を向いているということです。そこで、みんなこんなふうに違う方向を向いてますよ、自分の向いている方向だけじゃなくて人の向いている方向もご覧なさいというような情報の交換の場がなければ、これは別にJACETだけじゃなくて、英語教育界全体として危ういわけですね。個人が広い視野を持つことができるような場を作つてあげるというのがひとつはJACETの役割ではないかなという気はするのですね。

田辺 これは次のソフトウェア、英語教育の質の問題と絡んでくると思うのですが、いろんな情報をみんなの中で交換し合うような場を作る。そうするとハードの中のソフトの活動になってくるわけですね。

見上 結局はどんなことをやっても、例えばハードウェアがどんなに進歩しても最終的には人間なのですね。ですから人間に戻って来る段階で、情報交換であるとか、人間と人間の付き合いであるとかいうようなところがしつくり行かなければ、いくら1人1人がどんなにいい研究をしてもあいつのやったことなんか信用できないというふうになってしまったら無駄ですし、あれは私のやっていることと違うからといって誰も読んでくれなければそれも無駄ですし、最終的にはそういう場があって、あの人人がこんなことを言っているのだから読んでみよう、こっちではこんなことも言っているから読んでみようというふうにならなければ駄目だと思うのですね。

それに関連して、質の話がいま出たので、僕が高校の時に自分で教員をしていて一番ショックだったのは、教員養成をしている大学のいわゆる輪切りにしたときのレベルが低いのですね。だからといって大学の中身が低いということではないのですけれども、学生が将来の職業を選ぼうとか、将来自分の進む道を選ぼうといったときに、自分がちょっとでも教員になってみようかなと思ったときに、その教員養成大学のレベルが低いという社会的な評価があった場合に、ちょっと俺はもう少し良いところに行きたいなというふうに考えるのではないでしょうか。それが非常にショックだつ

たわけですね。これはもちろん教員養成大学を出て、立派な志しを持ってきちんとやっている方もいらっしゃるのでしょうけれども、いわゆる受験制度の中で大学というのは輪切りにされてますね。偏差値が比較的教員養成の大学は低い。予備校なんかが持つて来る資料を見ますと、一番下にその大学があれば、これは低いというふうに思われちゃうわけですね。パッと見た瞬間にここが低ければ、教員というのはレベルが低いんだと思われてしまう。そういう部分を改善しなければいけない。教員は例えはある程度自由な時間があって、中学校の先生でもゆとりを持って勉強ができますよとか、または給料も普通の会社に勤めるよりちょっとといいでですよ、というような条件が整備されてこないと、教員になろうという人が少なくなる。そのへんもJACETの仕事でしょう。やって成果が実ればこれは未来が開けますし、やらないでいたり、またやっても駄目だったりすれば将来ちょっと怪しいのではないか。危ういのではないかなという気がするところなのですね。

田辺 これはなかなか大きなことになってきました。比嘉先生、どうお考えになりますか。

比嘉 昔は、英語ができる人は英語の先生というふうに相場は決まっていたわけですね。ところが今は、英語の先生以外の人たちでも英語のできる人が多くなってきたという気がします。英語ができることはもう英語の先生の特色でなくなっています。こういう状態で、英語の先生がこれからどういう活路や活躍のしがいを見いだすかということが問題になってくると思います。私はやはり日本の英語の教師は日本人のための英語教育を独創的に研究すべきではないかと思っています。私は後輩の英語の先生にいつもこう言っています。英語の何が、なぜ、どのように日本人にとって難しいか、これを追求しなさい、そしてそれに対する答えを出しなさい、と。難しさの原因や要素が分かれば、もう易しくなるのだから、そうすることによって英語教育が進歩すると思うし、それは日本人にしかできない仕事であるということを言っています。独創的な英語教育学を発展させるためには、もっともっと具体的に、地道に、問題に取り組まなければならぬと思います。その手段として、統計分析をやるためにコンピュータを使うとか、ティーチング・マシンの役割をコンピュータに果たしてもらうとか、このような機械化は大

いに考えられると思います。

橋内 いまおっしゃってたことでひとつ抜けてるのは僕は他教科との関係、あるいは協同です。残念ながら英語の教師と国語の教師のコミュニケーションはよくないですね。学習指導要領なんかを比べてみても英語と国語はまったく相互に関係なしに作られてきて、大学に入つても別に国文学の先生と英語の教員が連携するわけじゃない。その結果どういうことが起きているかというと、英語教育の中だけでコミュニケーション能力の養成を目標とするわけだし、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育て、言語と文化に対する関心を養うこととかいうようなことを言うわけです。ところが国語のほうでは私の偏見かも知れないけれども、「解釈と鑑賞」的な匂いがまだ濃厚に残っている。そのために授業のやり方自体が違う。授業というものは講釈して、ノートを取るという昔ながらの講義形式が国文学、国語学では当たり前ですね。ところが英語の場合にはそういう講釈するような授業というのはそれこそ英文科生のための英語学概論とか英文学史ならあり得るけれども、外国語としての英語の授業ではそんなやり方をやっている御仁は非常に博物館的な、化石的な存在になりつつある。そのへんのギャップを何とか解消する必要があろうし、そうしないと英語の時間だけスキルとか、コミュニケーションとか言っても始まらなくて、われわれは学生の態度(特に言葉に対する関心や態度) やコミュニケーションの方法を何とか変えさせようとすることに時間とエネルギーを使ってしまって、なかなか英語の中身、英語の力をつけることにすぐ入つていけないという面がある。これは中学、高校までに形成された教育のやり方、つまり知識詰め込み式の学習と指導、それが尾を引いているのではないか。英語の時間だけで流れを変えようとするのは、非常な苦労を強いられます。

田辺 これは大きい問題です。フランス語、ドイツ語など、いわゆる英語以外の外国语の先生と英語の先生の考え方も違うし、これらの先生と国語の先生とはまたまったく違う。いまここで話す時間はありませんが、橋内先生がおっしゃるようにこれは大きい課題ですね。

比嘉 いま橋内先生が非常に重要なことを指摘なさいました。私も急に思いだして申し上げるのですが、日本はいろんな意味でアメリカナイズし

てきたようです。言語教育の面でもアメリカナイズしてきていると思います。どういうことかといいますと、アメリカ人は自分たちが外国語を習得するよりも、外国人に英語を教えて、外国人に言語学習の重荷を背負ってもらっているところがあります。英語の先生が日本人の子弟に英語を話せるように教育できなければ、日本語の先生が外国人に日本語が話せるように教育をして、日本語を通してコミュニケーションと国際化を進めようというわけです。

田辺 もうひとつ、コンピュータのことで危惧することがあります。例の 'Approach, Method, Technique' という論文がありますね。まず方向付けのアプローチがあってまたその中で理論をつけているのがメソッドである。テクニックというのはあくまでもそのメソッドを生かすための手段である。これは E. Anthony の1963年の論文なのですが、語学教育では L Lなんかが入ってきましたが、いつも L Lは言葉を教えるためのテクニックの一部でしか使われてなかったわけですね。それが今度は C A Iとか C M Iとかコンピュータの通信教育に変った。しかしこういうものが入ってきても、われわれが大学の英語教育で推進する英語そのものとの接点を見つけることは、なかなか難しいのではないかと私は考えてしまうのですね。

見上 かなり古いことをただコンピュータに乗っけただけというのがありますね。中学校用での典型的なのは問題を出してそれに選択肢で答えて、合ってたらファンファーレが鳴って、間違ってるとブザーが鳴って、正解または解説が出てきて次に行くというような、要するに普通の問題集と同じなのです。

田辺 むかしプログラム学習と言っていましたね。

見上 プログラム学習をただ機械に乗っけただけ。紙の上でやっていたことであれば、それからずーっと教育というのは発展しているわけですね。ところがコンピュータに乗っけただけで、コンピュータで新しくなった。それ新しくなったぞと言うのですが、中身はぼーんと古い時代に戻っているわけです。いままであったものを置き換えているだけ。L Lと同じことがコンピュータで起こっています。つまり一時期 L Lにさえ入れれば何とかなる、L Lが入ればこれで英語はできるようになるというふうに言ってましたね。あれと同じでコン

ピュータが入れば何とかなる。L Lとコンピュータは違うから、コンピュータさえあればいいというような言い方をしているわけですね。これから何年かしてコンピュータが学校に揃った段階で、もうコンピュータなんかうちの学校で眠っているよ、アメリカではコンピュータはもう古いと言うじゃないというような話が出てくるのではないかと思うのですね。つまり入れ物だけは新しくするのだけれども、中身を考えないで次から次へと入れ物を変えて行くというやりかたですね。

田辺 コンピュータを学会活動の中でうまく教育の本質につなげていくためにはどういう方法があるのでしょうか。

見上 コンピュータの使い方というのは教員にとっては2通りですね。つまり自分のために使うというのと学生のために使うというのがありますね。自分のために使うというのであればときどき東京外大の朝尾先生なんかが雑誌に書いていらっしゃるのですが、自分でコンピュータ通信をやってアメリカの人にいまここで分からることがあるので聞いてみる。そうすると誰かが読んで答えを教えてくれる。それを授業に使う。それから論文なんかを検索するのでもキーワードを入れていくと、一番新しいもののこれとこれとこれが読みたいというと、ぱっとプリントアウトができる。

学生向きには自分で教材をつくって、それを配布するとか、これはまだやってないと思うのですが、学生にレポートなんかを逆にコンピュータのファイルで出してもらって、それを自分で作ったプログラムでチェックするとか。特に作文などで有効だと思うのです。作文の問題をコンピュータで出して、学生はそれをワープロで見ながら修正を加えて提出するとか、または並べ替えをしてみるとか、論理の順番に並べてみるとか、そういうことをやってまたそれをファイルのかたちで先生に提出する。つまり紙を使わないでやるというような形ですね。

田辺 放送大学ではコンピュータとか最新の情報を駆使するわけですから、これからも教育には深く関わってくるのでしょうね。

比嘉 それを私も実際心配しています。放送大学は数年のうちに全国化するという予定ですが、全国化したときに、遠隔教育を通して、例えば、英語教育はどのようにしてなされるべきかというようなことが問題になってきます。それを考えま

すと、どうしても情報検索とか学習の記録の保持とかのためにコンピュータを使わなければなりません。

実は、カナダの放送大学を見学してきたのですが、電話で外国語教育をやっているのが印象的でした。教科書とテープを学生に送って自習をさせ、教授がその学生にときどき電話をかけて教科書の何ページを開けて、パラグラフの何番目を読めというわけです。先生はそれを聞いて、発音が良いとか悪いとかと言うんです。その記録をコンピュータに入力し、翌週指導するときにそのコンピュータ・データを参考にするのだそうです。

田辺 そうするとコンピュータを使えば全体から個に絞って行けるから、かなりそういう意味でこれからやっていける。

比嘉 コンピュータそのものが教えるのではなくて、やはり補助機器として使われていました。

橋内 ファックスを使った塾ができているそうです。

田辺 次の話題に移らさせていただきます。実は小池新会長が『通信』に「5つの望み」というのを掲げられました。これは会長の所信表明なのですが、1番に大学改革の時機にあって大学外国语教育、特に英語教育の改善に積極的に貢献する。2番目が国際交流活動の拡大、強化を図る。3番目が国内諸関連団体と相互の交流を図る。4番目が英語教育に関する理論及び実践に関する研究の一層の促進を図る。5番目が、本部、各支部との連絡協調を一層図る。この5つの柱を立てられました。

最後にもうひとつ、これから国際交流活動のあり方について今後どのような方向に活動したらいいのか、このへんのお考えを伺いたいと思います。JACETではこれまで英語圏だけじゃなくて、アジア圏に広げるとか、AILAと積極的に接触するとかしてきました。中国・四国支部が担当して開いた全国大会ではシンガポールのキャサリン・リムさんにも来ていただきました。JACETがこれから国際的に交流活動を進めていくためにはどういう視点に立ったらしいのか、そのへんのお知恵を少し拝借できればと思います。

橋内 僕が欠けていると思うのは東アジアですね。中国や韓国と日本をトライアングルと言うか、東アジアの関わりの中で考えていくということがあってもいいと思うのです。というのは韓国と日

本はよく似たところがあるのですね。あくまで外国語としての英語教育をして来たわけですね。旧英米の植民地でなかった国々における英語教育の実状についてお互いに情報交換をすれば、お互いの国の英語教育の発展に寄与するものがあろうかと思うのです。

見上 一般社会の動きを見ていると、例えばJACETが音頭を取ってやる場合にはうまくいきそうもないと思うのです。むしろ韓国なら韓国のはうでJACETに相当するような団体があればそこへ私たちのほうが積極的に参加をするというような形のほうがうまくいくのではないかでしょうか。

田辺 これまでは英語教育は英米の先生方、それからヨーロッパの先生方が多いのですが、アジアと言うとなんとなく気分的に乗らないところがあるのですね。ここどころが非常に大事なところだと思うのですが、比嘉先生はどんなふうにお考えになられますか。

比嘉 去年の12月にタイのチュラロンコン大学の国際英語教育学会に行ってまいりました。小池会長もそれに出席なさいました。タイもいろいろと手探りで英語教育の改善というものを考えていますが、問題点は日本のと似ていると思いました。いくら努力してもなかなか改善できないということです。タイの人たちも英語が下手で国際的に困っていると言っていました。

われわれ日本人は英語となれば、英語圏に目が向き、そこから何かを学ぶのが仕事であるというふうに考えてしまうようです。他の国にいわゆる同病あいあわれむ人たちがいるということをあまり意識しないし、その人たちと話し合おうという気持ちもあまりありません。英語圏以外の人たちと話し合って、何が純粹に日本的な問題点なのか、あるいはアジア的なものなのか、国際的なものなのか、ということをはっきりさせていければ、研究のやりがいもあるのではないかと思います。韓国に行きましたら韓国もたいへん似ているような気がしました。共通の問題意識を持つことが私は大きな国際交流になるのではないかと思うのです。

田辺 共通の問題意識でシェアーする。例えばシンガポールからキャサリン・リムさんがいらしたときには、東南アジアの事情を聞いて、確かにいろいろ問題があることが分かったのだけれども、われわれの英語教育とどこがつながるのかと疑問を持つ方がいるのですね。実際の教育の場では他

の国のことなんかどうでもいいんだよという声が聞こえてくるのですね。これはまずいのでしょうか。

橋内　まずいのみならず、それではやっていけなくなる。というのも最近外国人の流入、たいへんな数に登ってきていますね。それは広い意味での英語圏でしょうか、フィリピンやバングラデッシュなどから労働者が来ていますよね。そういう人たちとわれわれはつき合わなければならない現実なのですよ。もちろんそれに加えて、ペルーやブラジルなどからスペイン語やポルトガル語を話す人たちもどんどんやって来る。目の前の現実がどんどん先行しているのだけれども、われわれの外国语教育というのは旧時代的という面がある。このようなギャップをどのようにして埋めて行くかが課題でしょうね。私に言わすと外国语としての英語という考え方自身がもう古い。目の前にあるわれわれの日本の中で使われている英語のひとつがバングラデッシュの英語であり、フィリピン英語なんですよ。そこまで来ているのですよ。そういう人たちと毎日暮らさなければやっていけないのが、大都市の職場じゃないですか。

田辺　その現実はよく分かりますね。今後私たちが考えている学会としての英語教育をこの観点から捉えた場合に、どういうふうにやっていくか。

比嘉　いまのことに関して私も昔から考えているのですが、イギリスは経済と軍事の面で帝国主義を築いたわけですが、よくよく考えてみると、言語帝国主義も築いたわけです。イギリス人以外はみんな劣等な英語を話していると定義されてしましました。日本人はイギリスの言語帝国主義にいまでもかなり侵されているのではないかと思います。キングズ・イングリッシュを心のどこかではいつでも求めていて、それに近づいていない人は見向きもしない傾向があります。

田辺　JACETとしては視野を広くしていかなくては駄目なんですね。ありがとうございました。時間がきてしまいましたが、何か言い残したことがありましたら付け加えていただけませんか。

橋内　小池会長が言われた中の国内の関連団体との交流ですね。それから生殺与奪という権利との関わりについて言うならば、やっぱり大学入試というものに目をつむってはならないでしょう。

田辺　大学入試はJACETが創設された頃、大きな課題としてやっているのですね。

橋内　入試問題を検討して難問奇問を指摘し、

それらの除去を提言した。それが共通1次、あるいはセンターテストにつながって行ったという面もあるのではないしょうかね。

田辺　見上先生、何か言い残したことがありましたらおっしゃってください。

見上　先ほどのコンピュータを使った情報検索云々ということがありましたけれども、できればJACETが中心になって文献を集めてコンピュータに入れてもらえた方がいいなと思います。JACETが中高の先生方にも使ってもらえるような形で文献検索ができるようになれば、中学校の教科書を教えていて困ったことときはどういうふうにしたらいいでしょうというものまで入れた文献検索ができると便利じゃないかと思います。

橋内　そのことと関連しますが、確か開拓社から『英語教育年鑑』という文献目録が出てましたね。あれが廃刊になったあと英語教育関係の論文なり書物をどうやって検索しているのですか。そういうものをこれからはコンピュータにインプットしてデータベース化していくかないと、研究動向なり、動きなりを知らずに同じことを繰り返して調べてみるとことになってしまって能率が悪いと思います。(追記—その後の文献検索資料:『英語教育雑誌目次総覧』全4巻 大空社 1992年)

比嘉　私は2,200名の会員ができたのですから、JACETはこれから将来の展望を改めてみんなで機会あるごとにディスカッションしていかたらと思います。私は英語教育学はサイエンスでなければならないという気持ちをもっていますが、しかしアートでやっておられる先生方が今でも圧倒的に多いので、JACET大会での発表も3分の2は実証的な論文に、3分の1は経験的な論文にしてもよいのではないかと思うことがあります。

英語教育の成果があがらないのは、どの分野の教育でもそうですが、才能の問題があると思います。必修科目にしてみんなに英語を強制的に学ばせるということが本当にいいことかどうかと考えさせられます。選択にするか、必修にするかということを議論してもいいと思います。しかし、英語の先生の数が減らされるのではないかという心配をしたりして、英語教育そのものと関係のない次元の問題になってくる恐れもあります。

田辺　おかげさまでたいへん良いお話を伺うことができました。本日は、ほんとうにありがとうございました。

## 第四部 J A C E T年譜

年	月 日	事 柄
1962	11／ 9	大学英語教育協議会、東京外語大にて総会を開く。席上、大学英語教育学会の創立が決議され、わが国で初めての大学英語教育における本格的な学会が誕生。出席者120名。この総会が大学英語教育学会大会の嚆矢となる
1963	4／ 8	役員の選出なる。会長：朱牟田夏雄。理事：天野一夫、萩原恭平、星山三郎、五十嵐新次郎、稲村松雄、石橋幸太郎、梶木隆一、宮内秀雄、小川芳男、佐山栄太郎、芹沢 栄、上野景福、山田和男
	10／ 1	『会報』創刊号を発行
	11／ 8	第2回大学英語教育学会大会を法政大にて開催
1964	11／ 6	第3回大会を東京外語大にて開催
1965	10／15	第4回大会を東京大（教養学部）にて開催
1966	10／16	第5回大会を明治学院大にて開催
1967	7／17～ 8／ 4	第1回大学英語教育学会夏期セミナーを東京都八王子市大学セミナーハウスにて開催
	10／16	第6回大会を東京大（教養学部）にて開催
1968	7／15～27	第2回夏期セミナーを開催
	10／ 1	会長、朱牟田夏雄より小川芳男に交代
	10／25	第7回大会を明治学院大にて開催
	11／15	「大学英語教育改善を目標とする基礎実態調査報告書」を作成。大学の現行教材一覧を『会報』に収録
1969	1／11	研究企画委員会が発足。代表幹事：小池生夫
	4／30	『JACET通信』創刊号を発行。これより『会報』は廃刊
	7／13	萩原恭平理事、死去
	7／14～ 8／ 2	第3回夏期セミナーを開催
	10／17	第8回大会を学習院女子短大にて開催。佐山栄太郎・上野景福、理事を辞任。原沢正喜・宮部菊男、理事に就任
	11／6～8	第1回秋期セミナー（John B. Carroll 特別講演会）を大学セミナーハウスにて開催
1970	7／12～ 8／ 2	第4回夏期セミナーを開催
	10／23	第9回大会を慶應大（三田）にて開催。『大学英語教育学会 紀要』創刊号を発刊
1971	2／ 9	宮内秀雄、理事を辞任
	2／24	入試問題検討委員会、発足
	4／ 8	Paul Pimsleur 講演会を国立教育会館にて開催。これより月例研究会、発足

年	月 日	事 柄
1972	7／12～22	第5回夏期セミナーを開催
	10／20	『1971年度 大学英語入試問題の検討』(開拓社)を出版
	10／24	第10回大会を日本女子大にて開催
	11／20～23	第2回秋期セミナー (Robert Lado 講演会) をELEC会館にて開催
	3／1	『英語の評価と教授』(John B. Carroll著 大学英語教育学会編・訳注、大修館書店)を出版
	3／15	JACET基金設立 (朱牟田夏雄前会長夫人死去に伴う寄付金を基礎とする)
	5／10	教材研究委員会、発足
	6／24	関西支部発足。平安女学院短大にて大会を開催。支部長:大浦幸男。幹事:多田 稔
	7／10	日本学術振興会米国派遣研究者の推薦制度始まる
	7／23	研究企画委員会代表幹事、田中春美に交代
	7／26～8／12	第6回夏期セミナーを開催
	8／25	『1972年度 大学英語入試問題の検討』(開拓社)を出版
	10／14～15	第11回大会を立教大にて開催
	10／20	海外向け案内用に The Ten-Year History of JACET を編集
1973	11／18	関西支部大会を京都産業大にて開催
	11／23～25	第1回日本英語教育改善懇談会に参加
	4／1	研究企画委員会代表幹事、松山正男に交代
	5／26	関西支部大会を神戸大にて開催
	7／11～29	第7回夏期セミナーを開催
1974	10／27～28	第12回大会を東京学芸大(小金井)にて開催
	11／10	関西支部大会を奈良教育大にて開催
	12／8～9	第2回日本英語教育改善懇談会に参加
	4／27	Walter A. Cook 講演会を上智大にて開催
	5／11	関西支部大会を同志社女子大にて開催
1975	7／15～28	第8回夏期セミナーを開催
	8／20～22	Kenneth L. Pike 講演会を上智大にて開催
	9／21	朱牟田夏雄、顧問となる。大浦幸男、理事に就任
	10／6	第13回大会を平安女学院短大にて開催
	10／24	Arthur Spicer 講演会を上智大にて開催
	11／15	稻村松雄、理事を辞任
	11／30～12／1	第3回日本英語教育改善懇談会に参加
	6／21	関西支部大会を大阪クリスチャンセンターにて開催
	7／13～26	第9回夏期セミナーを開催
	8／9	Listening Comprehension Test: Form A を COLTD と共同完成

年	月 日	事 柄
1976	10／ 5	第14回大会を千葉商科大にて開催
	11／29~30	第4回日本英語教育改善懇談会に参加
	12／ 5	五十嵐新次郎理事、死去
	5／ 1	文学研究会、発足
	6／ 5	関西支部大会を神戸女学院大にて開催
	7／18~31	第10回夏期セミナーを開催
	10／10	第15回大会を関西大にて開催
	11／27~28	第5回日本英語教育改善懇談会に参加
1977	2／10	<i>Language and Culture, Book Two</i> (英潮社) を出版
	2／20	<i>Listening-The First Skill Drill A</i> (開拓社) を出版
	4／ 1	研究企画委員会代表幹事、五十嵐康男に交代
	6／11	関西支部大会を梅花女子大にて開催
	7／10~8／22	第11回夏期セミナーをハワイ大および東西センターにて開催
	10／ 1	海外資料研究委員会、発足
	10／30	第16回大会を成城大にて開催
	12／3~4	第6回日本英語教育改善懇談会に参加
1978	2／20	<i>Gems of English Prose and Poetry</i> (英潮社) を出版
	3／20	『英語教育』に海外論文の紹介記事を掲載 (4月号より)
	6／24	関西支部大会を京都外大にて開催
	7／15	大学英語教育学会賞 (JACET 賞) 創設。小川芳男会長の寄付による金100万円を JACET 基金に組み入れ、これを賞の基金に充当。小池生夫・松山正男、理事に就任
	7／16~25	第12回夏期セミナーを開催
	10／28~29	第17回大会を竜谷大にて開催
	12／2~3	第7回日本英語教育改善懇談会に参加
	1979	
1979	6／ 9	関西支部大会を神戸商科大にて開催
	7／16~28	第13回夏期セミナーを開催
	8／22	石橋幸太郎理事、死去
	9／ 1	大学英語教育実態調査委員会、発足
	10／20~21	第18回大会を国際基督教大にて開催。The Teaching of English in Japan (英潮社) の編集者、小池生夫・松山正男・五十嵐康男・鈴木絢治にJACET 賞授与
	11／17	関西支部大会を立命館大にて開催
	12／2~3	第8回日本英語教育改善懇談会に参加
	1980	
1980	1／10	<i>Language and Culture, Book One</i> (英潮社) を出版
	6／ 4	関西支部大会を神戸外大にて開催

年	月 日	事 柄
1981	7／21～8／2	第14回夏期セミナーを開催
	8／10	Listening Comprehension Test: Form B 完成
	10／20	一般会員1000名に達す（大学、英語学校などの団体も含む）。特別会員51社。名誉会員24名
	10／25～26	第19回大会をノートルダム清心女子大にて開催。 JACET 賞、『英語教育学研究ハンドブック』（垣田直巳ほか編、大修館書店）・「大学生標準ヒアリングテスト Form A 及びForm B の作製」（テスト研究開発委員会）の2件に授与
	11／29～30	第9回日本英語教育改善懇談会に参加
	5／1	研究企画委員会代表幹事、田辺洋二（正）・國吉丈夫（副）に交代
	6／13	関西支部大会を京都教育大にて開催
	7／20～8／1	第15回夏期セミナーを開催
	8／26	宮部菊男理事、死去
	9／12	東北支部発足。支部長：長谷川松治。幹事：畠中孝実・西村嘉太郎
	10／28	和文・案内用パンフレットを改訂、英文・案内用パンフレットを新たに発行
	11／11	『大学一般教養課程における英語購読用教科書のあり方』を出版
	11／13～15	第20回大会を早稲田大にて開催。JACET 賞、ICU言語学科研究グループ（R. Linde 他7名）に授与。創立20周年記念事業の一環として記念誌を発行
	1982	6／19 上智大学において第1回応用言語学研究会を開催し、応用言語学研究委員会、発足
1983	7／20～8／1	第16回夏期セミナーを開催
	10／29～31	第21回大会を同志社女子大学にて開催。JACET 賞、『英語学と英語教育』（大修館書店）の著者、伊藤健三・島岡丘・村田勇三郎に授与
	3／31	『大学英語教育に関する実態と将来像の総合的研究（I）－教員の立場－』（昭和56、57年度文部省科学研究費補助金による）を発表
1984	4／1	中部支部発足（支部長を置かず支部運営委員会で運営）
	7／26～8／5	第17回夏期セミナーを開催
	10／1	『英語購読用教科書のあり方』についてのアンケート調査報告書－「JACET基本語第2次案」を中心に－を発表
	10／8～10	第22回大会を東北学院大学にて開催
	12／10	教育問題研究委員会、発足
	4／1	研究企画委員会代表幹事、國吉丈夫（正）・奥津文夫（副）に交代
	6／3	中国・四国支部発足。支部長：片山嘉雄
	7／8	九州・沖縄支部発足。支部長：林 哲郎

年	月 日	事 業 楠
1985	7／22～29	第18回夏期セミナーを開催
	10／19～21	第23回大会を上智大学にて開催。JACET賞、『ヒアリングの行動科学』(研究社)の著者、竹蓋幸生に授与
	10／19	会長、小川芳男より梶木隆一に交代。副会長、小池生夫。名誉会長、小川芳男
	3／31	『大学英語教育に関する実態と将来像の総合的研究(II)－学生の立場』(昭和59、60年度文部省科学研究費補助金による)を発表
	4／1	語法研究会、発足 英語教育メディア研究開発委員会、発足
	4／7	本部事務所、東京都新宿区揚場町セントラル コーポラスよりラインビルド神楽坂に移転
	7／24～30	第19回夏期セミナーを開催
	10／25～27	第24回大会を堀山学園大学にて開催
1986	12／15	山田和男理事、死去
	7／28～8／15	第20回夏期セミナーをハワイ大学にて開催
	8／2	北海道支部発足。支部長：北村正司
	9／19～21	第25回大会を慶應義塾大学にて開催。JACET賞、大学英語教育学会 語彙研究グループに授与
1987	9／22	研究企画委員会代表幹事、奥津文夫(正)・鈴木博(副)に交代
	2／1	English Workshop(三修社)を出版
	3／16	本部事務所、ラインビルド神楽坂より研究社英語センタービルに移転
	3／25	『読みの活性化に向けて』(弓書房)を出版
1988	8／16～21	第21回夏期セミナーを開催
	10／9～11	第26回大会を京都産業大学にて開催。
		JACET賞、河野守夫および『日本人とアメリカ人の敬語行動』(南雲堂)の著者、井出祥子・荻野綱男・川崎晶子・生田少子に授与
	3／31	『早期教育・中学校・高等学校の英語教育における実態と将来像の総合的研究(海外子女教育を含む)』(昭和61、62年度文部省科学研究費補助金による)を発表
1989	7／31～8／5	第22回夏期セミナーを開催
	9／23～25	第27回大会を四国学院大学にて開催。
		JACET賞、『日本語の意味・英語の意味』(南雲堂)の著者、小島義郎に授与
	9／26	研究企画委員会代表幹事、鈴木博(正)・村田年(副)に交代
	10／18	朱牟田夏雄初代会長、死去
	2／10	Listening Comprehension Test: Basic(開拓社)完成
	7／9	星山三郎元理事、死去

年	月 日	事 柄
1990	7／29～8／5	第23回夏期セミナーをケンブリッジ大学（チャーチルカレッジ）にて開催
	9／22～24	第28回大会を西南学院大学にて開催
	9／25	研究企画委員会代表幹事、森住衛（正）・村田年（副）に交代
	3／31	『職業人から見た英語教育に関する実態と将来像の総合的研究』（昭和63、平成元年度文部省科学研究費補助金による）を発表
	7／30～8／5	『わが国の英語教育に関する実態と将来像の総合的研究』（昭和63、平成元年度文部省科学研究費補助金による）を発表
	7／31	第24回夏期セミナーを開催
	8／20	小川芳男名誉会長、死去
	9／6～8	原沢正喜元理事、死去
	9／10	第29回大会を神田外語大学にて開催。
	9／10	JACET賞、『英語読解のストラテジー』（大修館書店）の著者、天満美智子に授与
1991	7／29～8／4	『応用言語学研究1990.1』（和文）と <i>Proceedings: Studies in Applied Linguistics 1990 II</i> （英文）をリーベル社より出版
	8／23～25	第25回夏期セミナーを開催
1992	8／26	第30回記念全国大会を北海道大学にて開催
	3／17～19	会長、梶木隆一より小池生夫に交代。梶木隆一、名誉会長となる
	4／24	第3回JACETパソコン研修会開催
	7／1	会員数、2239名に達す（一般2071名、団体48団体、賛助84社、特別36名）
	8／2～8	「大学設置基準改正に伴う外国語（英語）教育改善のための手引き（1）—JACETハンドブックー」を作成
1993	9／8～11	第26回夏期セミナーをケンブリッジ大学（ダウニングカレッジ）にて開催
		第31回大会を早稲田大学にて開催。JACET賞、『しぐさの英語表現辞典』（研究社）の著者、小林祐子に授与。創立30周年記念英語教育特別功労賞、平川唯一（元NHK「ラジオ英語会話」講師）に授与
		創立30周年記念事業の一環として記念誌を発行

(高木道信)

## JACET 1962—1992 HISTORY AND OBJECTIVES

The Japan Association of College English Teachers (JACET), originally a subsidiary of the Institute for Research in Language Teaching, was founded as an independent organization in 1962. JACET was established in a time of educational reform, in order to improve the state of English language education. Those involved were strongly convinced of the need to solve college-level problems relating to English language education so as to improve the teaching of the subject at all levels of the educational system.

In the early years, the primary activities of the organization were the sponsorship of an annual convention, held in the autumn, and the publication of *JACET Reports*, a newsletter containing the proceedings of the conventions.

In 1967, with the financial support of the Fulbright Commission, the first JACET Summer Seminar was held. This was a turning point for the organization because in its wake JACET began to experience a rapid growth in both membership and influence. District-based activities grew with rising membership, and, consequently, local chapters were formed (Kansai, 1972; Tohoku, 1981; Chubu, 1983; Chugoku-Shikoku, 1984; Kyushu-Okinawa, 1984; Hokkaido, 1986).

JACET's growth, however, has not been confined to Japan: in April, 1982, the Japan Association of Applied Linguistics (JAAL) was established in JACET in order to engage in activities on a more international scale. In August, 1984, JAAL in JACET became an affiliate of the Association Internationale de Linguistique Appliquée (AILA).

### ACTIVITIES

#### I. Conventions

##### 1. National Conventions

Since JACET was established, annual conventions have been held in the autumn. During the first nine years of its history, these were composed of presentations, discussions, and lectures, and were of a one-day duration. In 1972, however, another day was added, thus making more programming possible. Eventually, the need for a more extensive program became apparent, and a third day was added, starting with the twentieth convention (1981).

Since 1981, each convention has been assigned a theme. A list of convention themes and host universities for the past eight years follows:

- The 23rd (1984): "English Teaching in Transition," Sophia University  
The 24th (1985): "Educational Reform and College English Teaching," Sugiyama Women's College  
The 25th (1986): "World Peace and English Teaching," Keio University  
The 26th (1987): "College English Teaching and Social Demands: Teaching English as an International Language," Kyoto Sangyo University  
The 27th (1988): "English Education in Japan and in Other Asian Countries," Shikoku Christian University  
The 28th (1989): "Diversification of English Language Education," Seinan Gakuin University  
The 29th (1990): "Foreign Language Teaching and Higher Education in Japan," Kanda University of International Studies  
The 30th (1991): "Cross-cultural Communication Through English Education — What Can We Do for Globalization?" — Hokkaido University

**2. Chapter Conventions:** Each chapter has its own convention once or twice a year, featuring presentations, lectures, and symposia.

## **II. Summer Seminars : English Teaching Seminars**

**Summer Seminars** Each year approximately thirty college English teachers take part in the JACET Summer Seminar, usually held at the Inter-University Seminar House, Hachioji, Tokyo. The Seminar employs the "English Village System": attendees are asked to lodge and study together.

To date, thirty-six foreign scholars have joined the seminars. Former lecturers include Sir Randolph Quirk and Dr. Wilga Rivers. Distinguished foreign participants are customarily asked to become honorary members.

The eleventh and twentieth Seminars were held in Hawaii in conjunction with the LSA Summer Institute and TESOL Summer Institute.

The venue of the twenty-first Seminar, held in 1987 at the AILA World Congress, was at the University of Sidney.

The twenty-third Seminar took place at Churchill College, Cambridge University in 1989, attracting sixty-three participants.

**English Teaching Seminar** The seminar aims at helping attendees solve problems of English teaching at junior and senior high school levels by giving every kind of information about those problems.

## **III. Public Lectures and Study Meetings**

JACET has held over 200 public lectures in Tokyo and other major cities of Japan. Distinguished scholars from abroad are given opportunities to address members and other interested parties on topics relevant to the teaching of English.

Monthly study meetings, at which speakers discuss topics in language teaching, methodology and applied linguistics, have been held more

than 150 times in the Kanto-Koshin'etsu area since 1971. Similar meetings are now held by all chapters.

## **IV. Research Committees**

### **The Development of English Language Tests**

The committee originated from a 1969 survey on listening skills that evolved into a joint effort with the COLTD organization (Council on Language Teaching Development) to develop a test of aural English. The venture has produced *JACET-COLTD Listening Comprehension Test Form A*, 1975, *JACET Listening Comprehension Test Form B*, 1980, and a lower-level version, *JACET Basic Listening Comprehension Test*, 1989. Over 250,000 students have taken the tests. Furthermore, in 1977 the Committee produced a workbook to accompany the test Form A, *Listening: the First Skill, Drill A*.

### **The Development of Teaching Materials**

The Committee was formed in 1973 as a result of a survey of English language teaching at colleges and universities. It has published three textbooks (See Section VIII). In 1981, *A Survey of Reading Materials*, a booklet containing a list of basic words compiled by JACET, was published. The most recent publication is *English Workshop*, published in 1987.

### **Reports on Recent Developments in TESL/TEFL Overseas**

The Committee gathers information from abroad on recent developments in the area of language teaching and applied linguistics. The Committee has a column on TESL/TEFL topics which appeared regularly in *Eigo Kyoiku: The English Teachers' Magazine*, Taishukan Publishing Co., Ltd. from July, 1987, to March, 1992.

### **Applied Linguistics**

The Committee functions as a liaison between AILA and JACET and publishes *The JAAL Bulletin*. It holds occasional public lectures by guest speakers from abroad. Its national conferences on applied linguistics have been held three times a year since December, 1990.

### **Research Project on College English Teaching in Japan**

The Committee publishes reports financially supported by the Ministry of Education. To date, it has issued the following: General Survey of English Language Teaching at Colleges and Universities in Japan — Teachers' View (1983), — Students' view (1985); A General Survey of English Language Teaching at Senior High Schools, Junior High Schools and Primary Schools; The Education of Japanese Children Overseas (1988); A General Survey of English Language Teaching — College Graduates' Views (1990).

### **Educational Media and English Teaching**

The Committee has been exploring issues related to computers in the teaching of English. It is engaged in developing software for use in college-level English programs. It has also organized three workshops so far on how to manipulate personal computers.

### **Educational Problems**

In 1984, when it was formed, the group was known as the Committee for the Reformation of the Teacher-Training Course. The name was changed when its responsibilities were broadened in 1985. The Committee has been working on various administrative problems related to the teaching of English in Japan. Upon the revision of the standards for establishing colleges and universities, this Committee organized a nationwide special group to draw up *The College English Language Education Handbook*, a guide to these

changes.

### **English Literature**

The Committee seeks to relate the study of the literature written in English with the teaching of English (TEFL). It holds regular study meetings and occasional public lectures. In 1987, it published a collection of essays (See Section VIII) on the subject of reading. This Committee will have a column on how to treat literary material in Eigo Kyoiku: *The English Teachers' Magazine*, for one year starting in April, 1992.

### **English Usage**

The Committee has been conducting a survey on synonymous adjectives for the past three years. This project is part of a large-scale survey on English usage: adjectives, nouns, and verbs. The final goal is the publication of *The JACET English Lexicon*.

The Kansai Chapter has had similar research groups since 1986: the Chubu Chapter since 1990.

## **V. External Activities**

Through its numerous external activities, JACET has made valuable contributions to the field of education. In November, 1972, for example, JACET represented research organizations on English education in Japan at a conference known as "The Gathering for the Betterment of English Education in Japan." A decade later, the organization submitted a request to the University Entrance Examination Center that a listening component be included in entrance examinations. Then, in May, 1983, JACET broadened its scope and influence when it became an affiliate of the Science Council of Japan. In December of that year, the group submitted a report on English curricula to the Minister

of Education, and in November, 1985, JACET presented the Ad Hoc Committee on Education and the Ministry of Education with a report entitled "A Proposal for the Development of Foreign Language Teaching." Furthermore, in 1988 and 1989 JACET made proposals aimed at reforming teacher licensing at the secondary level. In 1991, JACET was invited to two hearings by the University Council while it was preparing its report to the Ministry of Education.

## VI. International Activities

Summer seminars abroad, lectures by visiting foreign scholars, and the designation of JAAL in JACET as the official representative in Japan of AILA all indicate that JACET is extending its reach beyond the shores of Japan. Furthermore, there is every indication that this international trend will continue. At the 1987 AILA convention in Sydney, Australia, JACET's then Vice President Ikuo Koike was elected vice president of AILA, and the AILA Executive Board and the International Committee meetings were held in Tokyo on May 11 and 12, 1989.

## VII. The JACET Prize

From a fund established in 1977 by Yoshio Ogawa, Natsuo Shumuta, Kikuo Miyabe, Sakae Serizawa, Hiromichi Oginome, and others, awards are given annually to those who have made a significant contribution to college and/or general English education in Japan.

## VIII. Public Relations and Publications

### 1. The JACET Bulletin

The aim of this annual journal is to promote research on college English education and related concerns. Each issue contains scholarly papers contributing to the improvement of English

education in Japan: Numbers 1 (1970) - 22 (1991) extant.

### 2. JACET News

The quarterly publication keeps all members informed of the activities of the Association. One of four issues, published in March, is in English.

### 3. The Membership Directory

This annual publication is distributed to all JACET members.

### 4. Other publications

*A Critical Survey of Japanese University English Entrance Examinations*, Kaitakusha Publishing Co., 1971; 1972

*Lectures on English Language Testing and Teaching* by John B. Carroll, Taishukan Publishing Co., 1972

*Language and Culture*, Book 2, Eichosha Publishing Co., 1977

*Gems of English Prose and Poetry*, Eichosha Publishing Co., 1977

*Language and Culture*, Book 1, Eichosha Publishing Co., 1980

*Toward the Vitalization of Reading*, Yumi Press Publishing Co., 1987

## 編 集 後 記

◆ 30年は、人生では一つの世代の長さに相当する。英語教育に關係の深い *Longman Dictionary of Contemporary English* によれば、'generation' は 'a period of time in which a human being can grow up and have a family, about 25 or 30 years' であるという。人が生れて成長し、社会的にも立派に独り立ちするに要する年数である。20年が一応一人前とされる年であるとすれば、JACET はそれを祝って以来10年、人間なら社会的責任をもった大人ということになる。

JACET は、創立30年、立派に独り立ちしている。しかし、大学設置基準の大改定（1991年7月1日施行）に伴う慌しい動き、高校と中学校の学習指導要領改正に伴う大きな動き、さらに大きくは世界の枠組の大変革等々、成人しだいな責任を担う存在になるや、安定する間もなく、またいくつもの大波を受けている。日本という国の大発展と歩調を合わせるかのように、急速に成長を続けてきた本学会も、一息入れる暇もなく、直接、間接にそのあり方、中身を問われていることになる。正念場を迎えているといえよう。

創立30周年記念誌は、1991年春の全国理事会で正式提案がなされ、夏の北海道全国大会で編集委員会が発足し、それを受け、内容、構成、執筆者などの検討が行なわれ、年末には執筆依頼をすることになった。しかし、まだ当年度の諸活動が進行中のため、委員会、支部で本格的に執筆が始まったのは2月になってからのことである。いざ取りかかると、過去10年中心とはいっても、正確を期するため確認する必要が生じたり、かなり手間暇のかかった場合もあるように聞く。30名を超す執筆者がおり、遅速、執筆量など、調整すべきことも多く、一部の筆者には大変ご迷惑をおかけすることになった。この場をお借りしてお詫びをする次第である。

結局、いろいろな遅れがあつて、6月に完成し余裕をもって9月の大会で配布する目算も大きく狂ってしまった。いま最後の校正をしていて、わが学会が、学会として、委員会として、支部とし

て、会員個人として、いかに多彩で数多くの研究・教育活動をしてきたか、あらためて目をみはるばかりである。英語教育のあり方が問われ続けた30年とはいえ、研究・教育団体としての JACET の意気込みに満ちあふれた記念誌になったことを誇りに思う。

一世代30年を経て JACET も大きく世代交代をした。若手として屋台骨を支えていた世代が舵取りをすることになった。世界の態勢が大きく変化し、内外の諸情勢が動き、研究が深まり、多様化し、所帯が大きくなり、考え方も多様化した今、JACET はどの方向に、どのように進むのか、あたらめて問い合わせし、態勢を整え直す時であろう。本記念誌は、その大きな手掛かりを提供してくれるはずである。

(伊部 哲)

◆ 拙宅には小川芳男先生の揮毫された「断而敢行鬼神避之」の掛け軸がある。JACET の発展史の根底に、このイズムが潜んでいるように思えてならない。英文の *The Ten-Year History of JACET* は、田中春美氏と私とで執筆したが、これは夏期セミナーの講師や資金面での援助団体に本学会の活動状況を紹介ないしは報告することが主な目的であった。その後、新入会員への案内書も兼ねて、日本語版の記念誌を出版しようとの気運が高まり、創立20周年記念誌発刊の運びとなつた。この記念誌は、いわば生き証人の記録となつた。当時の名誉会長・会長・理事の先生方から懐籠期の模様を聴取し再現するため、小池生夫・松山正男の両氏と私とが日夜奔走した。

上記二誌の編集に携わったからとのことで、私はこの30年誌にも関与させていただくことになった。今回は編集委員の数も増え、より多角化された活動内容を手際よく盛り込むことができたことは、ご同慶の至りである。末筆ながら、この欄を借りて執筆を担当された方がたに、心より謝意を表したい。わが学会の「而立から不惑」への限りなき飛躍と発展を願って筆を擱く。

(高木道信)

## J A C E T 創立30周年記念誌編集委員会

鈴木 博（担当理事）、伊部 哲（委員長）、高木道信（副委員長）、田中英史、石川祥一（以上本部）、浪田克之助（北海道支部）、遠藤祐一（東北支部）、丹下省吾（中部支部）、木村博是（関西支部）、橋内 武（中国・四国支部）、名本幹雄（九州・沖縄支部）、森住 衛（本部代表幹事）、神保尚武、竹前文夫（以上本部幹事）

### 大学英語教育学会「創立30周年記念誌」

発行日 1992年9月8日  
編集 大学英語教育学会  
創立30周年記念誌編集委員会  
発行所 大学英語教育学会  
代表者 小池生夫  
〒162  
東京都新宿区神楽坂1-2  
TEL (03) 3268-9686  
FAX (03) 3268-9695  
印刷所 有限会社 タナカ企画  
〒228  
神奈川県座間市緑ヶ丘3-46-12  
TEL (0462) 51-5775番